

福岡市埋蔵文化財調査報告書第609集

福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

— 6 —

福岡市早良区野芥所在野芥遺跡群第5次調査

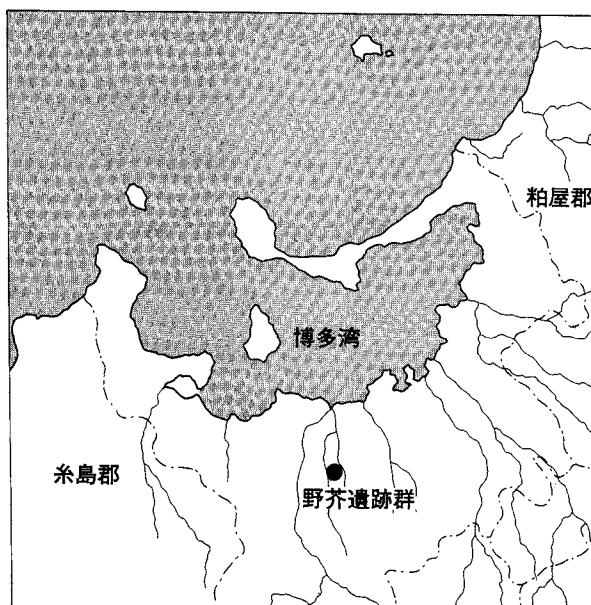
1999

福岡市教育委員会

福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

— 6 —

野芥遺跡群第5次発掘調査報告



遺 跡 名	遺 跡 略 号	調 査 番 号
野芥遺跡群	NOK-5	9454

1999

福岡市教育委員会

序

福岡外環状道路は、福岡市西区姪浜から柏屋郡柏屋町戸原までを結ぶ都市計画道路で、延長26.4kmの路線をいいます。本道路は福岡市の交通問題解決の鍵を握る幹線道路で、早急な供用が望まれています。現在、志免町と月隈間、片江、姪浜と野芥間など一部区間で供用が行われ、他区間も供用に向けての工事や事前の発掘調査が行われています。

今回報告する野芥遺跡群は、早良区野芥から干隈地内にかけて所在する遺跡で、平成6年度に発掘調査を実施いたしました。

調査では古墳時代の前期から中期にかけての集落を検出し、住居跡や溝、土坑などの遺構を調査いたしました。遺構からは古墳時代の土師器などの遺物が出土し、多大な成果を得ることが出来ました。

発掘調査とその整理・報告に際しましては、建設省福岡国道工事事務所の関係者及び地元の方々をはじめとし、多くの皆様のご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表します。併せて、本書が市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、広く活用していただけることを願う次第です。

平成11年1月11日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

例　　言

1. 本書は、福岡外環状道路の建設省施工区間にあたる福重・野芥間の道路建設に伴う事前調査で、福岡市教育委員会が平成6年（1994）4月から12月にかけて発掘調査を実施した野芥遺跡群第5次調査の報告書である。福岡外環状道路関係の埋蔵文化財調査報告書としては第6集にあたる。
2. 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は文化財部埋蔵文化財課山崎龍雄（現福岡市博物館学芸課）が担当した。
3. 遺構記号は福岡市の遺構略号基準によっている。
S A…柵、S B…掘立柱建物、S C…竪穴住居、S D…溝（自然流路）状遺構、S E…井戸、S K…土坑、S P…柱穴・ピット、S X…その他の遺構などである。
4. 遺構の実測は山崎、瀬戸啓治、金子由利子、清原ユリ子が行った。また遺物の実測は井上加代子が主を行い、一部を山崎が補足した。
5. 本書使用の写真は山崎が撮影し、遺構の全体写真は株式会社空中写真企画が撮影を行った。
6. 本書使用の図面の浄書は山崎と藏富士寛が行った。
7. 本書で用いる方位は国土地理院座標第Ⅱ系による座標北である。磁北との偏差は西偏約6°40'である。
8. 昨年第4集で報告した野芥大藪遺跡第1次調査で、北九州大学の野井英明先生に依頼して行った花粉分析の調査結果を、付論1として収録した。
9. 本書の執筆・編集は山崎が行った。またIX区のプラント・オパールの分析は宮崎大学農学部の藤原宏志先生に依頼し、その結果を付論2として収録した。
10. 調査にかかる記録類・出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。

野芥遺跡群第5次調査概要

遺跡調査番号	遺跡略号	分布地図番号	調査地地籍	調査実施面積	調査期間
9454	NOK-5	083-0319	早良区野芥2丁目・干隈6丁目地内	5,555m ² VI区 1,070m ² VII区 83m ² VIII区 234m ² IX区 4,168m ²	1994.04.20～ ～12.15

本文目次

	頁
Iはじめに.....	1
1. 調査に至るまで.....	1
2. 平成6年(1994)度の調査体制.....	3
II遺跡の立地と歴史的環境.....	4
1. 遺跡の立地.....	4
2. 遺跡の歴史的環境.....	4
III調査の記録.....	7
1. 調査の概要.....	7
2. VI区の調査.....	7
3. VII区の調査.....	13
4. VIII区の調査.....	15
5. IX区の調査.....	19
6. 小結.....	48
IV付論1. 福岡市野芥大藪遺跡における古環境変遷.....	49
付論2. 福岡市野芥遺跡群におけるプラント・オパールの分析結果について	55

図版目次

- P L . 1 (1)上空から外環状道路予定地を見る（南東から）
(2)野芥遺跡第5次地点調査区全景（北西から）
- P L . 2 (1)VI区第1面遺構検出状況（東から） (2)同東側 S D 6001・6002（北から）
- P L . 3 (1)第2面遺構検出状況（西から） (2)第2面北西部遺構検出状況（西から）
- P L . 4 (1)第3面遺構検出状況（西から） (2)第3面北西部遺構検出状況（西から）
- P L . 5 (1)S D 6004（北から） (2)第2面 S D 6014・6015（西から）
- P L . 6 (1)第3面 S D 6016・6017（西から） (2)S D 6008（北から） (3)S K 6005（南から）
(4)S X 6013（南西から）
- P L . 7 (1)東壁土層（西から） (2)南壁土層（北から） (3)西壁土層（東から）
(4)S K 6005・6007出土遺物（縮尺不統一）
- P L . 8 (1)VII区全景（南から） (2)同全景（東から） (3)だめ押し作業状況（南から）
- P L . 9 (1)VIII区南側全景（東から） (2)同北側全景（南から）
- P L . 10 (1)S D 8003・8004（南から） (2)S D 8003・8004南壁土層（北から）
(3)同北壁土層（南から） (4)S D 8003・8004出土遺物（縮尺不統一）
- P L . 11 (1)IX区第1面全景（北西から） (2)同第1面全景（南東から）
- P L . 12 (1)調査区西側遺構検出状況 (2)調査区西側から中央部遺構検出状況
- P L . 13 (1)調査区中央から東側遺構検出状況 (2)調査区東側遺構検出状況
- P L . 14 (1)調査区南西隅遺構検出状況 (2)調査区北側農耕地遺構検出状況
- P L . 15 (1)S C 9025完掘状況（北西から） (2)同遺物出土状況（北西から）
(3)同遺物出土状況（南から） (4)S C 9030遺物出土状況
- P L . 16 (1)S C 9030（南から） (2)S C 9051（南東から）
- P L . 17 (1)S B 9017・S A 9018（南から） (2)S B 9069（西から）
- P L . 18 (1)S K 9010（西から） (2)S K 9013（西から） (3)S K 9015（東から）
(4)S K 9020（東から） (5)S K 9021（北東から） (6)S K 9091（南東から）
- P L . 19 (1)S D 9001（南東から） (2)同北壁土層（南から） (3)S D 9011（西から）
(4)S D 9035（北西から）
- P L . 20 (1)S D 9022（南東から） (2)S D 9028（南から） (3)S D 9022遺物出土状況（南東から）
(4)同遺物出土状況（南東から） (5)調査区西側足跡群（北西から）
- P L . 21 (1)牛と思われる足跡の検出状況 (2)人の足跡検出状況 (3)S D 9073の水口か（北西から）
(4)西側第2面遺構検出状況（北西から）
- P L . 22 (1)S D 9073（南から） (2)S D 9097（南から） (3)S D 9076・9101（南から）
- P L . 23 (1)中央部北側第2面遺構検出状況（北東から） (2)中央部北側第2面遺構検出状況（西から）
(3)北西侧第2面遺構検出状況（西から）
(4)西側南半部だめ押し調査遺構検出状況（北西から）
- P L . 24 (1)東側第2面遺構検出状況（西から） (2)中央部遺構検出状況（南東から）
- P L . 25 (1)調査区西壁土層（北東から） (2)同北壁土層（南東から）
(3)同南壁土層（北から）
- P L . 26 S C 9025出土遺物（縮尺不統一）

- P L .27 S C9025・9030・9051・S B9069出土遺物（縮尺不統一）
 P L .28 S D9022出土遺物（縮尺不統一）
 P L .29 S D9022・9028出土遺物（縮尺不統一）
 P L .30 各遺構出土遺物（縮尺不統一）

挿 図 目 次

	頁
Fig. 1 福岡外環状道路路線図	1
Fig. 2 福岡外環状道路IV工区調査遺跡位置図	2
Fig. 3 野芥遺跡群の位置と周辺の遺跡（1/50,000）	5
Fig. 4 調査区全体図（1/1,000）	6
Fig. 5 S K6005・6007（1/30）	8
Fig. 6 第1面遺構全体図（1/200）	折込み
Fig. 7 第2・3面遺構全体図（1/200）	折込み
Fig. 8 調査区東壁・西壁・南壁土層（1/80）	折込み
Fig. 9 各遺構出土遺物（1/3）	9
Fig. 10 S K6009・S X6013（1/60）	10
Fig. 11 第3面出土杭（1/4）	10
Fig. 12 各溝土層図（1/40）	11
Fig. 13 1・2号トレンチ土層図（1/60）	12
Fig. 14 遺構全体図（1/100）	13
Fig. 15 調査区南壁・西壁土層図（1/80）	14
Fig. 16 遺構全体図（1/150）	16
Fig. 17 各遺構出土遺物（1/3）	17
Fig. 18 調査区南壁・北壁土層図（1/80）	18
Fig. 19 調査区北壁・東壁土層図（1/80）	折込み
Fig. 20 調査区南壁土層図（1/80）	折込み
Fig. 21 S C9025・9030（1/60）	21
Fig. 22 S C9025出土遺物1（1/3）	22
Fig. 23 S C9025出土遺物2（1/3）	23
Fig. 24 S C9025出土遺物3（1/3）	24
Fig. 25 S C9051（1/60）	24
Fig. 26 S C9030・9051出土遺物（1/3・1/6）	25
Fig. 27 S B9017・9069・S A9018（1/80）	26
Fig. 28 S K9010・9013・9014・9015・9020・9021・9091・9103・9113（1/40・1/30）	27
Fig. 29 S K9021出土遺物（1/3）	28
Fig. 30 S D9001土層図（1/60）	29
Fig. 31 S D9001出土遺物（1/3）	30

頁

Fig.32	S D9022 (1/60)	31
Fig.33	S D9022出土遺物 1 (1/3)	32
Fig.34	S D9022出土遺物 2 (1/3)	33
Fig.35	S D9022出土遺物 3 (1/3)	34
Fig.36	S D9022出土遺物 4 (1/3)	35
Fig.37	S D9022出土遺物 5 (1/3)	36
Fig.38	S D9022出土遺物 6 (1/3)	37
Fig.39	S D9022・9028 (1/40)	38
Fig.40	S D9028出土遺物 (1/3)	40
Fig.41	S D9011・9022・9035・9066土層図 (1/40)	41
Fig.42	S D9073・9076土層図 (1/40・1/60)	42
Fig.43	各溝出土遺物 (1/3)	43
Fig.44	柱穴・ピット出土遺物 (1/3)	44
Fig.45	足跡検出状況 (1/160)	折込み
Fig.46	不明土坑 (S X) 出土遺物 (1/3・1/1)	45
Fig.47	遺構面出土遺物 (1/3・1/2)	46
Fig.48	各遺構出土石器 (1/3・2/3)	47

付 図 目 次

付図 1 VI～IX区遺構全体図 (1/200)

付論 1 図表一覧

- Fig. 1 野芥大藪遺跡花粉試料採取地点位置図と土層 (1/1,600・1/400・1/80)
- Fig. 2 大藪遺跡SD0149から採取した試料の花粉ダイアグラム
- Fig. 3 大藪遺跡SD0149から検出された主要花粉化石

付論 2 図表一覧

- 表 1 野芥遺跡群におけるプラント・オパール定量分析結果
- 表 2 野芥遺跡群におけるプラント・オパール定量分析結果
- 図 1 プラント・オパール定量分析結果－土層 1－
- 図 2 プラント・オパール定量分析結果－土層 2－

I はじめに

1. 調査に至るまで

福岡外環状道路は、昭和44年に都市計画決定された都市計画道路、井尻粕屋線・井尻姪浜線で、西区姪浜から粕屋郡粕屋町戸原間の延長26.4kmの道路である。今回調査の対象となっているのは、建設省施工の福重から月隈間の16.2kmの部分で、一般国道202号福岡外環状道路と呼ばれる区間である。

福岡市では、平成7年度に大学生の世界的なスポーツの祭典であるユニバーシアード大会を福岡で開催する事となり、それに向けての都市基盤整備の推進が必要になり、福岡外環状道路建設が具体化してきた。平成元～3年に、建設省福岡国道工事事務所（以下国道事務所とする）から、福岡外環状道路予定路線内の埋蔵文化財の事前調査願いが埋蔵文化財課（以下埋文課とする）に提出された。これを受け、埋文課は東側からI～IV工区と番号づけられた各工区で、用地買収が終了した部分について、試掘調査を実施した。

各工区で、隨時試掘調査を実施した結果、I工区では博多区井相田、立花寺、板付、笹原地区、IV工区では橋本、次郎丸、免、干隈、野芥地区などで遺跡を確認した。これらの試掘結果を受けて、遺跡が確認された地区について、国道事務所と協議を行い、発掘調査が必要となった部分について、調査費用を建設省が負担するということで、調査を実施することになった。

調査は平成3年度にまずI工区の井相田地区で行われ、その後、ユニバーシアード福岡大会までに部分開通が必要となったIV工区の調査を優先して行った。平成4～7年度にかけて、次郎丸遺跡群、次郎丸高石遺跡、免遺跡群、野芥大藪遺跡、野芥遺跡群、橋本一丁田遺跡、橋本遺跡群の調査を行い、IV工区については予定通り開通となった。今回の報告は平成6年（1994）4月から12月にかけて実施した、野芥遺跡群第5次調査の調査記録である。

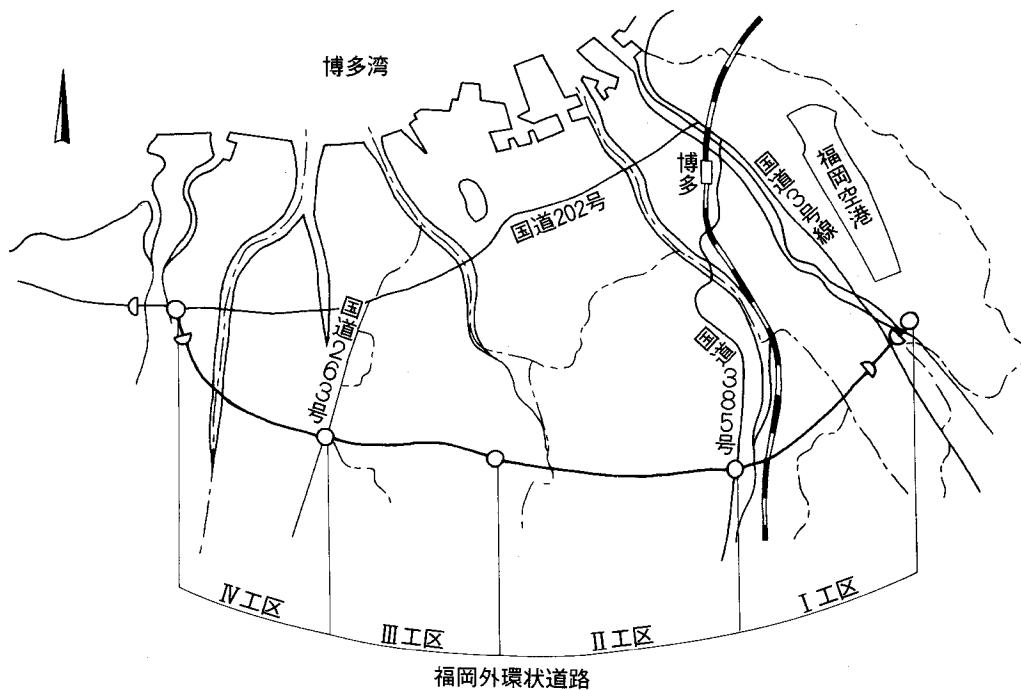


Fig. 1 福岡外環状道路路線図

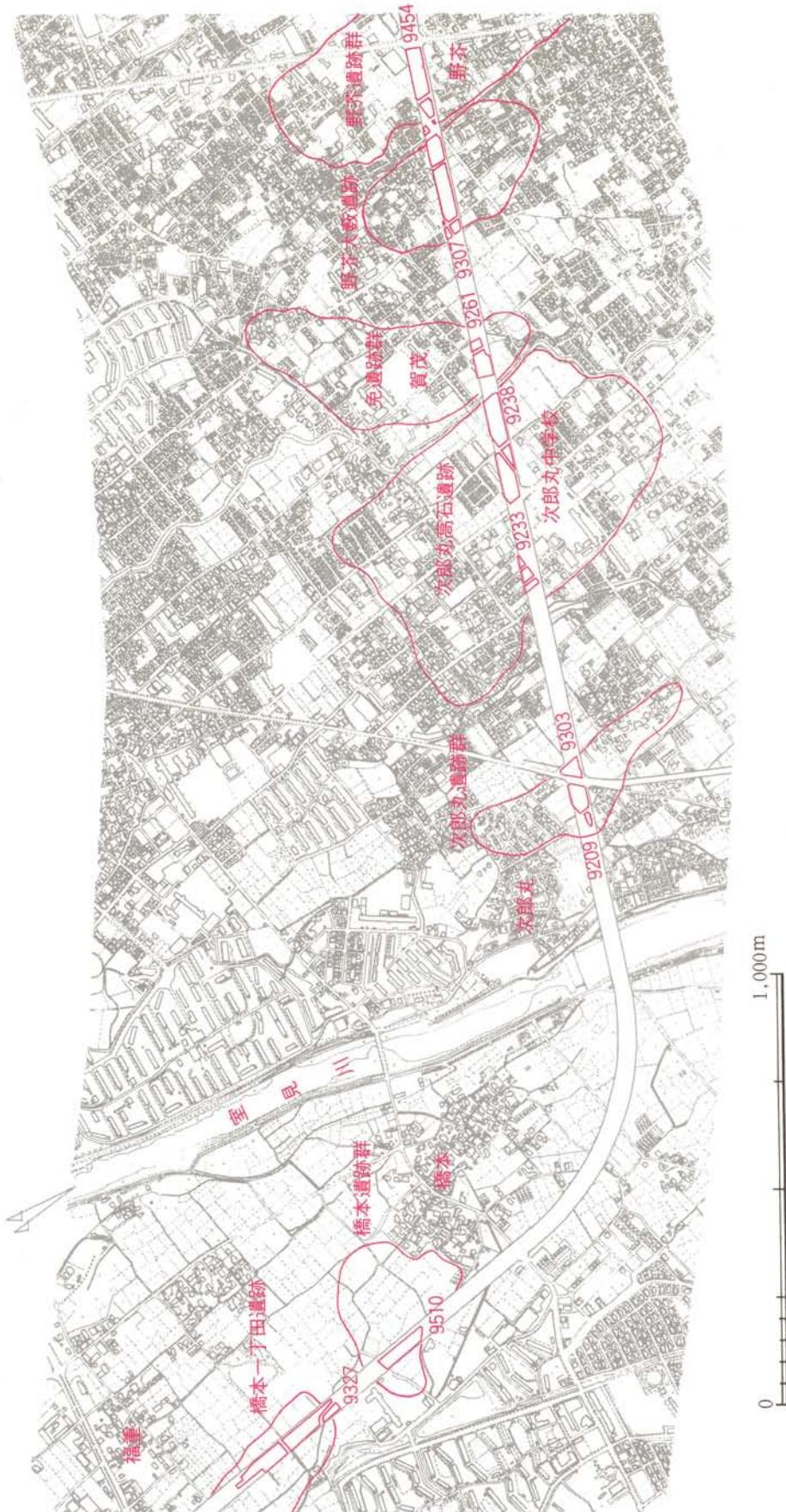


Fig. 2 福岡外環状道路IV工区調査遺跡位置図

2. 平成 6 年（1994）度の調査体制

外環状道路の調査はⅣ工区を、平成 7 年に福岡で開催するユニバーシアード大会に開通を間に合わせるということで、平成 4 年度から山口謙治の担当で調査が始まった。5 年度からは山口と池田祐司・中村啓太郎の 3 名体制で調査を拡大した。途中山口と山崎が交代したが、平成 5 年度は 3 名で調査を行った。平成 6 年度は調査地区が野芥大藪遺跡の残りと野芥遺跡群、橋本遺跡群のみとなつたため、調査班を縮小し山崎のみで調査を行った。橋本遺跡群は用地買収が遅れたため、7 年度に杉山富雄が調査を担当し、Ⅳ工区の調査を終了した。また各遺跡の調査記録については、平成 7 年度から整理作業が終了したものから隨時、報告書を作成してきている。

調査については、建設省福岡国道工事事務所および本市土木局外環状道路推進部をはじめとする関係者各位の協力のもとに、順調に終了出来た。記して感謝の意を表する次第である。

平成 6 年度の調査体制

調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課 教育長 尾花 剛（前任） 町田英俊 文化財部長 後藤 直（前任） 平塚克則 埋蔵文化財課長 折尾 学（当時） 柳田純孝 大規模遺跡調査担当 塩屋勝利（当時）
試掘調査担当	井澤洋一（主任文化財主事） 滝本正志、加藤良彦、吉武 学（文化財主事）
平成 6 年度調査担当	主任文化財主事 山崎龍雄（現博物館学芸課主任文化財主事）
庶務担当	入江幸男（当時）、小森 彰（前任）
調査指導	藤原宏志（宮崎大学教授）、野井英明（北九州大学助教授）
調査・整理調査員	井上加代子、加藤周子、瀬戸啓治、俵寛司（九州大学大学院）
調査・整理協力者	井上八郎、吉川春美、島崎昭二、甲斐正耕、木須昭三、加島定次郎、上野道朗、真田弘二、大塩皓、徳永洋二郎、脇坂信重、金子由利子、金子ヨシ子、清原ユリ子、坂本ハツ子、佐藤テル子、正崎由須子、永井ゆり子、大穂アサ子、西尾タツヨ、土生ヨシ子、平野ミサオ、堀川ヒロ子、門司弘子、大穂栄子、水野由美子、井釜康子、石橋マサ子、松本ミツ子、鬼塚友子、指山歌子、指山浩子、高木陽子、川岡涼子、網田美代子、川口シゲノ、西島マツコ、西嶋ムラ子、西嶋洋子、原ハナエ、平田千鶴子、平田政子、森山早苗、山下アヤ子、脇坂チカ、脇坂ミサヲ、結城千代子、井上トミ子、清末シズエ、井上ヒデ子、侯野志津代、永末京子、東園直美、中園啓子、池水美吉子、赤星攝、有吉千栄子、池田礼子、吉良山益美、武田祐子、手錢恭子、大賀順子、坂木智子、釣崎由美、上野裕子、塚本直子（順不同）

II 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

野芥遺跡群は、福岡市の西南部に位置する早良平野の中央部東側、飯倉丘陵の西側に立地する遺跡である。国土地理院の五万分の一の地図（福岡）では、上から27cm、右から28cmの地点である。

早良平野は中央を南北に貫流する室見川と、その支流や十郎川によって形成された扇状地と沖積地から構成される平野で、西側は長垂丘陵、南側は背振山塊、東側は油山と飯倉丘陵によって限定され、その形状は博多湾に向かって扇形に展開する。今回報告の野芥遺跡群第5次調査地点は昨年報告の野芥大藪遺跡と川を挟んで南東側、標高17m前後を測る扇状地状を呈する低位段丘上に立地する。

2. 遺跡の歴史的環境

野芥遺跡群が立地する早良平野は旧石器時代から遺跡が知られている。旧石器時代の遺跡は余り多くない。平野周辺部の室見川西岸の飯盛山東側にある吉武遺跡群や、平野中央部の小田部台地上の有田遺跡群が知られているが、野芥遺跡群第7次地点でも遺構・遺物が確認されている。縄文時代は周辺の丘陵や台地部、内陸部の内野や四箇、田村あたりにかけての扇状地上に、早期から晩期頃にかけての遺跡が立地する。特に内陸部の内野あたりには古い時期の遺跡が分布している。晩期末になると下流の有田、福重あたりまで遺跡は拡大する。

弥生時代になると、水田農耕が始まるという生業形態の変化から、遺跡は下流低地部から海岸砂丘部まで拡大する。有田遺跡群では縄文時代末から弥生時代前期頃の環濠集落が、早良平野で初めて出現する。吉武遺跡群では弥生時代前期末から中期後半にかけての、多数の副葬品を持つ木棺墓、甕棺墓群が調査されており、地域の首長層の墓地と考えられている。この吉武遺跡群は環濠は持たないものの早良地域では卓越した集落規模を持ち、この地域の中心集落と考えられる。このほか有田遺跡群や飯倉遺跡群、東入部遺跡群など青銅器を少数副葬する墓を持つ拠点集落遺跡が点在している。野芥遺跡群西側の免遺跡群では昭和48年と平成5年の調査で、旧金屑川の河道に構築された弥生時代以降の水利施設の井堰が調査されている。

古墳時代の遺跡は前時代と同範囲に分布する。海岸砂丘部の藤崎遺跡群では方形周溝墓が調査され、多量の外来系の土師器と共に、主体部から副葬品として三角縁神獣鏡が出土し、また海岸部の五島山古墳では前期の古墳が調査されている。しかし前方後円墳は今のところ拝塚古墳や樋渡古墳、羽根戸南古墳群G2号・3号墳、梅林古墳などが知られているだけである。後期になると群集墳が東西山麓部に多数造営される。野芥遺跡群周辺の主な集落遺跡としては、北側に有田遺跡群、原遺跡群、西側に田村遺跡群、東側に飯倉遺跡群などがある。

古代、早良郡には7郷あったことが知られており、当遺跡はその内の能解郷にあたる。周辺には「三十田」「池ノ坪」などの条里制地割りの地名が残り、都市化が進むまでは、水田、道路などに条里の遺制が良好に残っていた。また有田遺跡群では7～8世紀頃の早良郡の郡衙と思われる建物跡が最近の調査で確認されている。

中世、鎌倉～戦国時代は野芥荘であり、西側の田村遺跡群や次郎丸遺跡群、北側の原遺跡群や南西側の清末遺跡などで平安時代末～室町時代にかけての集落が調査されている。これらの遺跡は微高地に立地し、周辺の低地部に生産基盤を確保した遺跡である。特に清末遺跡では有力者のものと考えられる方形居館跡が検出されている。

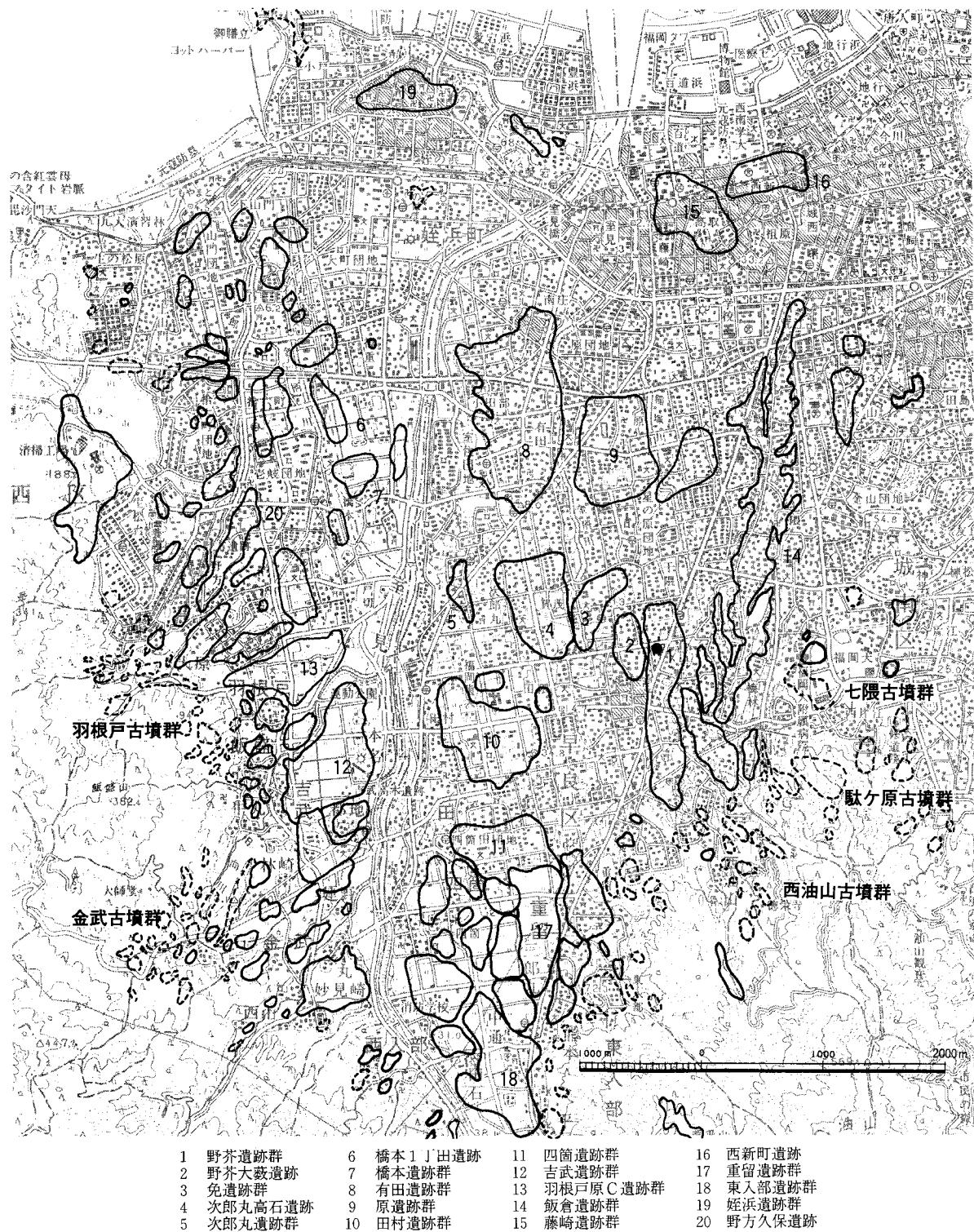


Fig. 3 野芥遺跡群の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

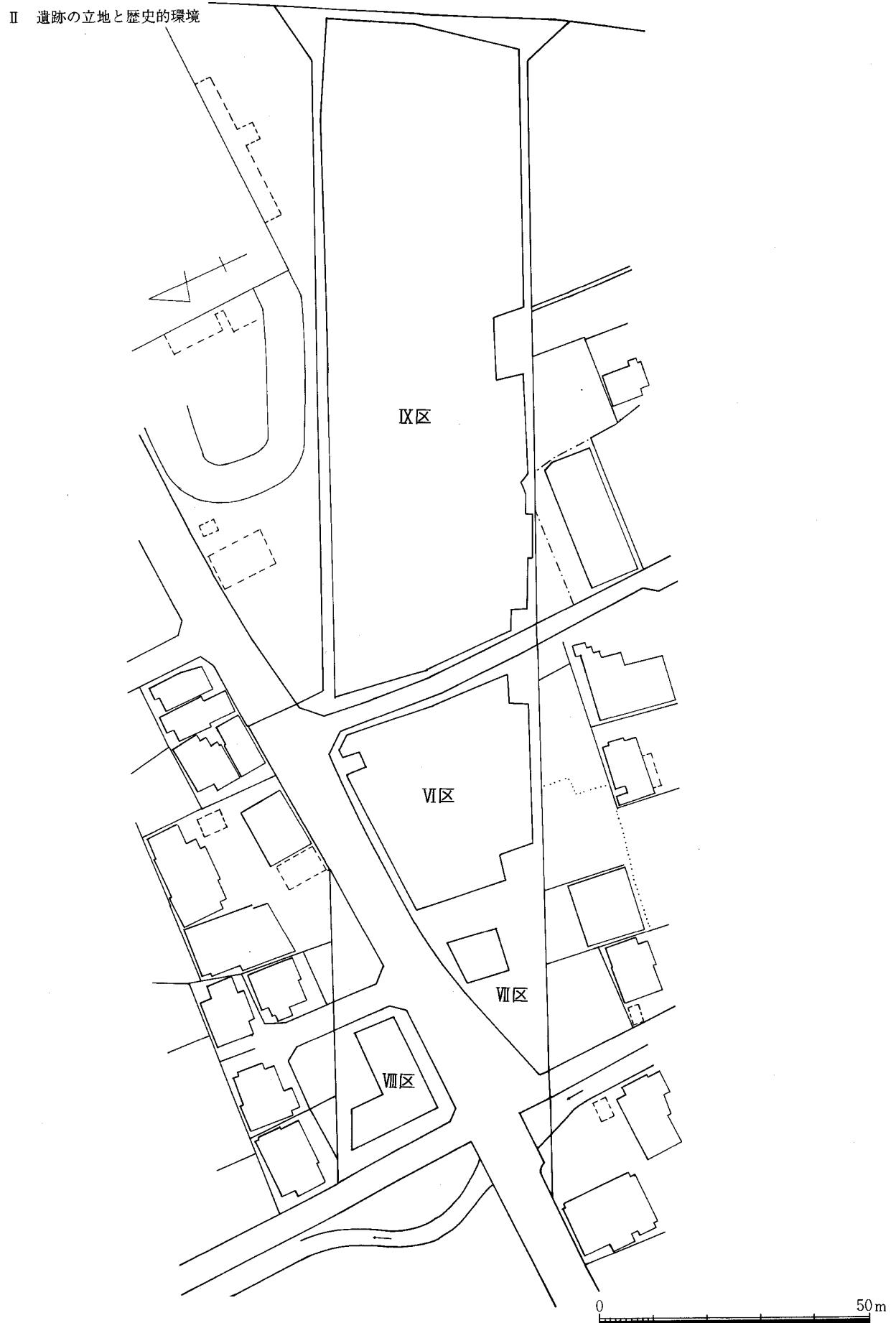


Fig. 4 調査区全体図 (1/1,000)

III 調査の記録

1. 調査の概要

調査地は早良区野芥2丁目・千隈6丁目地内に所在する。西側は用水路を挟んで外環状道路で調査された野芥大藪遺跡第1次調査地点である。調査区は従来の分布調査では確認されていなかったが、今回の調査で初めて確認され、遺跡の範囲が北側へ拡大した。野芥遺跡群ではここ数年発掘調査がたびたび行われている。現在8カ所の調査地点を数え、遺跡の実態がかなり分かりつつある。

調査区は既存道路を基準に、野芥大藪遺跡の調査区から通してVI～IX区の4区画に分割して設定した。調査は1994年4月20日、VI区から重機による表土剥ぎを開始し、廃土は場外搬出して作業の効率化を図った。その後調査はVII区、IX区、VIII区と展開し、調査を終えると埋め戻しを行った。しかし、IX区は大部分がスーパーマーケットの駐車場として夏まで使用されたため、この部分は9月5日から表面の舗装を撤去した後、調査を行った。調査はこの途中から始まったIX区を最後に、12月15日に機材撤去と埋め戻しを終えて終了した。総調査面積は5,555m²である。

調査の方法としては国土座標系を基準に南北をX軸方向、東西をY軸方向とし、西と北からそれぞれ10m間隔のグリッド（番号はX軸方向A～Z、Y軸方向は0～とする）を設定し、遺物の取り上げ、実測の基準とした。調査前の現状は宅地または駐車場であったが、その状況になる前は農地であったようで、盛土が厚くなっていた。遺構面の標高は15～16mで、IX区西側あたりが一番高くなる。遺構はこの一番高いあたりが中心であり、住居跡などが確認されている。

2. VI区の調査

① 調査の概要 (Fig.8、PL.7-(1)～(3))

VII区の東側の調査区で、東側に道路を挟んでIX区に隣接する。元々は住宅地であった。調査面積は1,070m²で、IX区に次いで広い。遺構面迄の堆積土は上から厚さ70～80cmの盛土、灰色の水田耕作土、床土、黒褐色粗砂混じり土となる。調査は3面の遺構面について行った。出土遺物は少なく、土坑や溝から少量出土しているだけである。

② 第1面の調査 (Fig.6、PL.2-(1))

第1面は約0.9～1.1mの深さの暗オリーブ褐色粘質細砂上面で検出した。検出した遺構は土坑、溝、ピット群である。ピット群は建物としてまとめ切れなかった。住宅地であったためか、攪乱がひどく、住居に伴う井戸やトイレなどが残っていた。また遺構の残りも不良であった。

土坑

S K 6005 (Fig.5、PL.6-(3)) 調査区北側中央で検出した平面が円形を呈する土坑である。規模は上面で直径0.85m、深さは47cmを測る。壁面は直立もしくはオーバーハングする。底面はほぼ平坦である。底から20cm程上面に土師器の甕が出土している。

出土遺物 (Fig.9、PL.7-(4)) 古墳時代の土師器が出土している。1・2は甕である。1は口縁部を欠失する肩から胴部1/2片である。復元最大胴径は19.1cmを測る。胴部外面はハケ調整、内面はヘラケズリである。2は肩部1/4片である。外面はハケ調整、内面はヘラケズリである。3は鉢1/5片で、復元口径13.2cmを測る。外面の調整は指ナデ、内面はヨコハケである。色調は1がにぶい褐色、2がにぶい橙色、3が灰黄橙色を呈する。いずれも胎土は砂粒を含み、焼成は良い。

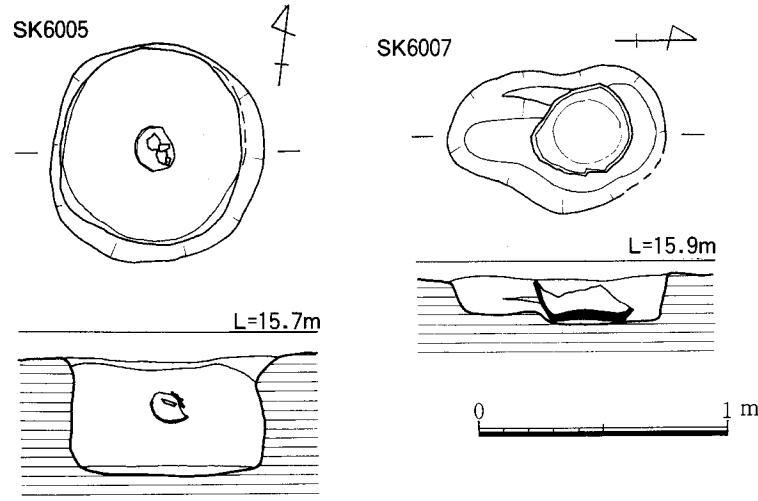


Fig. 5 SK 6005・6007 (1/30)

SK 6007 (Fig.5) 調査区中央で検出した洋梨形の平面を呈する土坑。規模は長軸長0.87m、短軸長0.56m、深さは北側が20cm程で残りは不良である。北側に褐色の釉がかかる陶製の甕が据えられていた。住宅地として埋め立てられる前の農地の一角にあった肥溜用の甕であろうか。

出土遺物 (Fig.9、PL7-(4)) 4は内部から出土した陶器の甕底部1/2片で、底径29.6cmを測る。外底部を除いて褐色の下地釉をかけ、その上に緑色を帯びた濁った白色釉が所々かかる。外底は露胎で表面は荒れている。胎土は5mmを越える粗砂粒を多く含み、色調は浅い黄橙色を呈する。

SK 6009 (Fig.10) 調査区南側でSD 6002を切る隅丸方形を呈する土坑である。規模は長軸長2.6m、短軸長2.4m、深さ50cmを測る。壁面は直立し、各壁際にはそれぞれ4カ所の小ピットがある。時期的には新しいものであろう。形態から見て、防空壕か半地下の倉庫であろうか。**出土遺物**はない。

溝状遺構

SD 6001 (Fig.12、PL.2-(2)) 調査区東側を南北方向に蛇行して伸びる小溝で、SD 6002を切り、SD 6003と重複している。溝の幅は0.65~1.43m、深さ18~44cmを測る。埋土はオリーブ黒色砂質粘土、黒褐色細砂、黒褐色粗砂で、洪水で埋まったような状況は見られない。

出土遺物 (Fig.9) 古墳時代の土師器片が少量出土している。5は土師器の甕の肩部小片である。外面は細かいハケ、内面はヘラ削りである。色調はにぶい黄橙色、胎土はやや雜である。

SD 6002 (Fig.12、PL.2-(2)) 調査区の東側を南西から東北へ伸びる小溝である。SD 6001・6003に切られる。溝の幅は0.7~1.0m、深さは20~40cmを測る。溝断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色粗砂礫から黒灰色細砂である。**出土遺物**は少なく古墳時代の土師器の細片が10点出土している。

SD 6003 (Fig.12) SD 6001と重複する小溝であり、同一方向に伸びるが北端がSD 6001と方向を違える。溝幅は確認出来る部分で1.08~1.32m、深さは20~40cmを測る。埋土は黒褐色系の粘土や粗砂などである。**出土遺物**は少なく古墳時代の土師器細片が9点出土している。

SD 6004 (Fig.12、PL.5-(1)) 調査区南西隅で検出した南から西に逆「く」字状に伸びる小溝である。溝幅は0.8~0.9m、深さは約20cmを測る。埋土は上層が黒褐色粘質粗砂、下層が暗灰黄色砂から暗オリーブ褐色粘質細砂である。**出土遺物**はなかった。



Fig. 6 第1面遺構全体図(1/200)

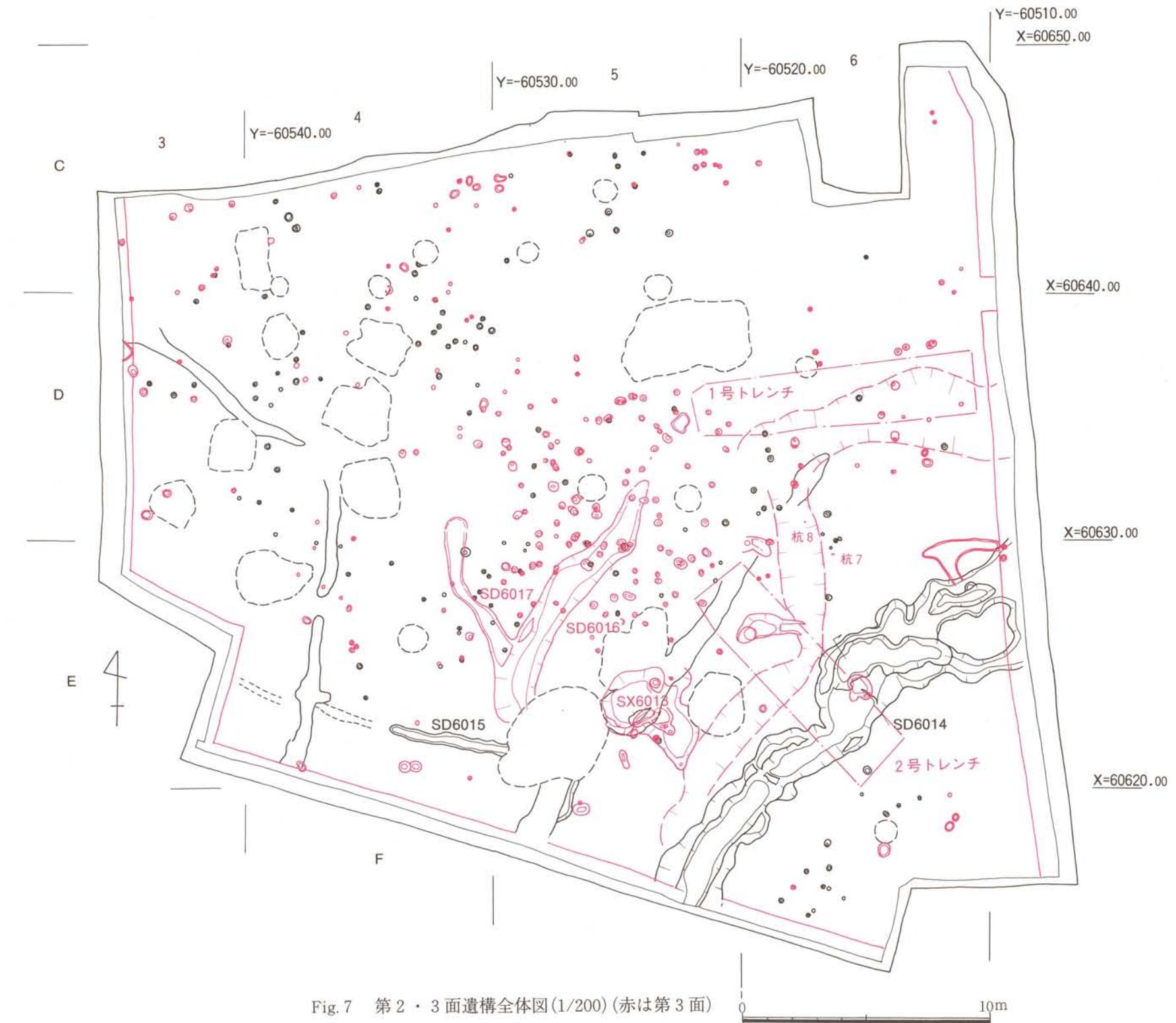


Fig. 7 第2・3面遺構全体図(1/200)(赤は第3面)

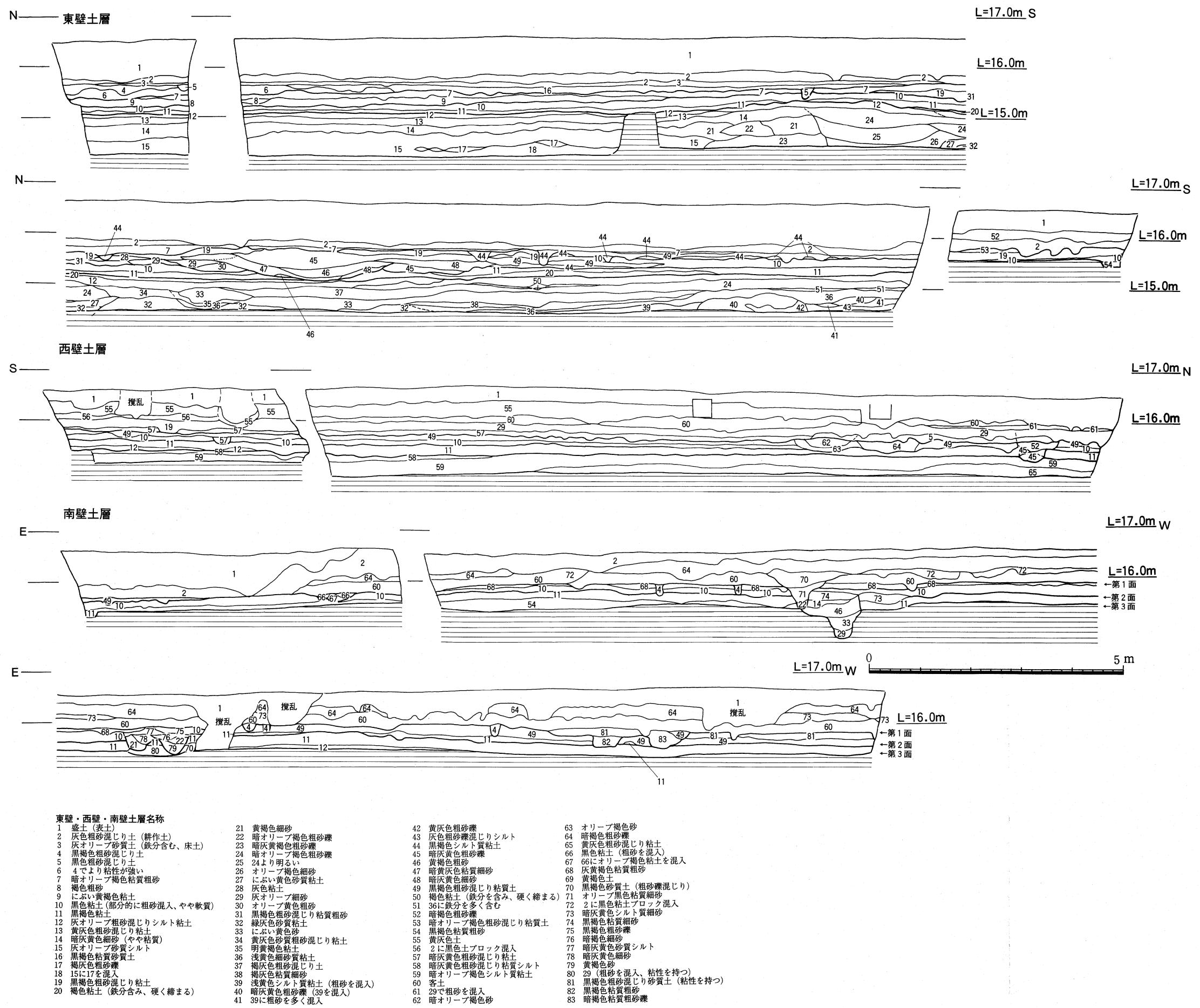


Fig. 8 調査区東壁・西壁・南壁土層図(1/80)

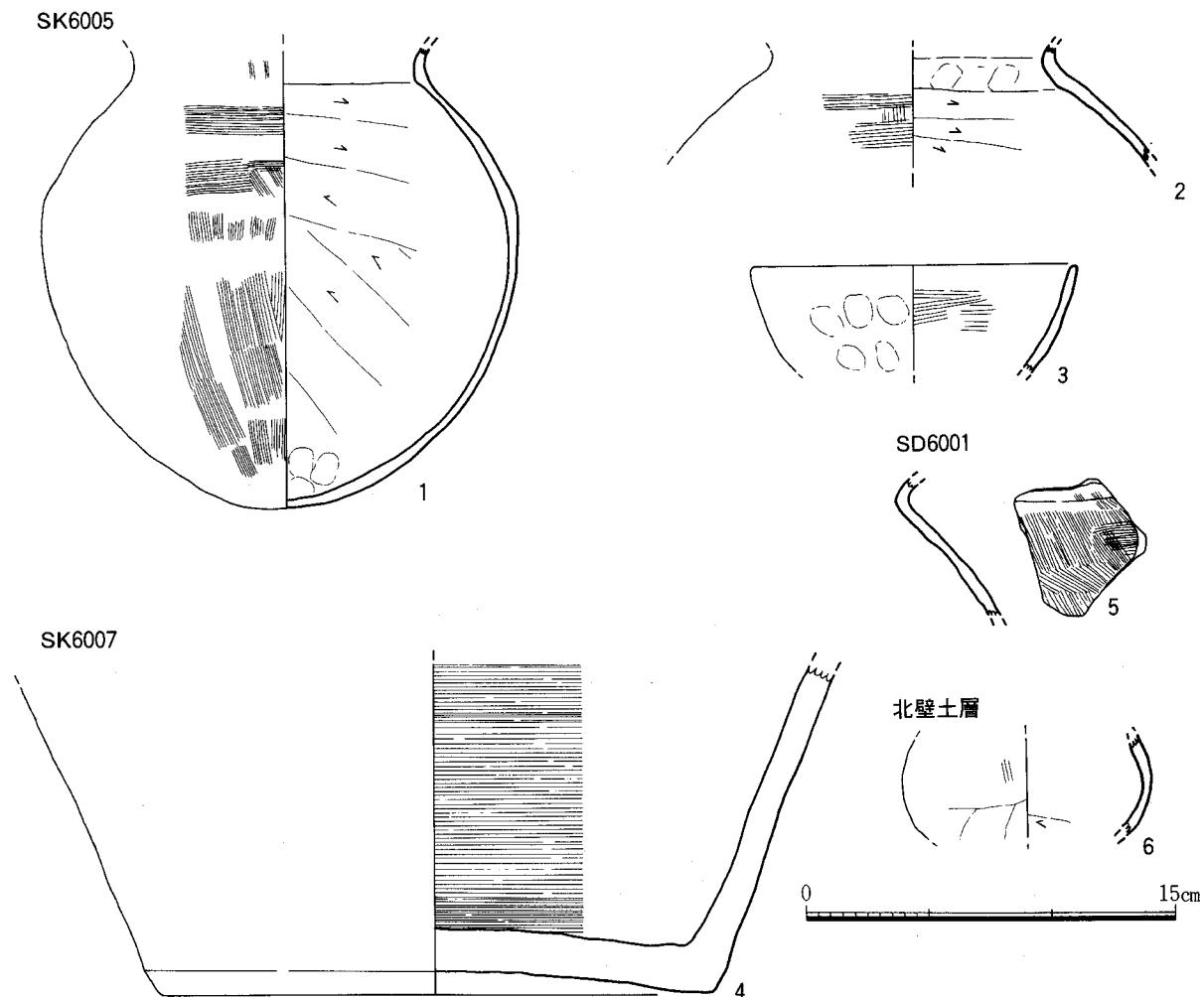


Fig. 9 各遺構出土遺物 (1/3)

S D 6008 (PL. 6-(2)) 調査区南東隅を北北東に伸びる小溝である。溝幅は0.74m、深さ35cmを測る。埋土は黒色粗砂混じり粘土から黒褐色粗砂混じり粘質土である。出土遺物は縄文土器らしき細片が4点出土している。

北壁出土遺物 (Fig. 9) 6は壁面の暗褐色砂から出土した土師器の小壺の胴部小片と思われる。上部はナデ、下半はヘラ調整である。色調は淡橙色を呈する。

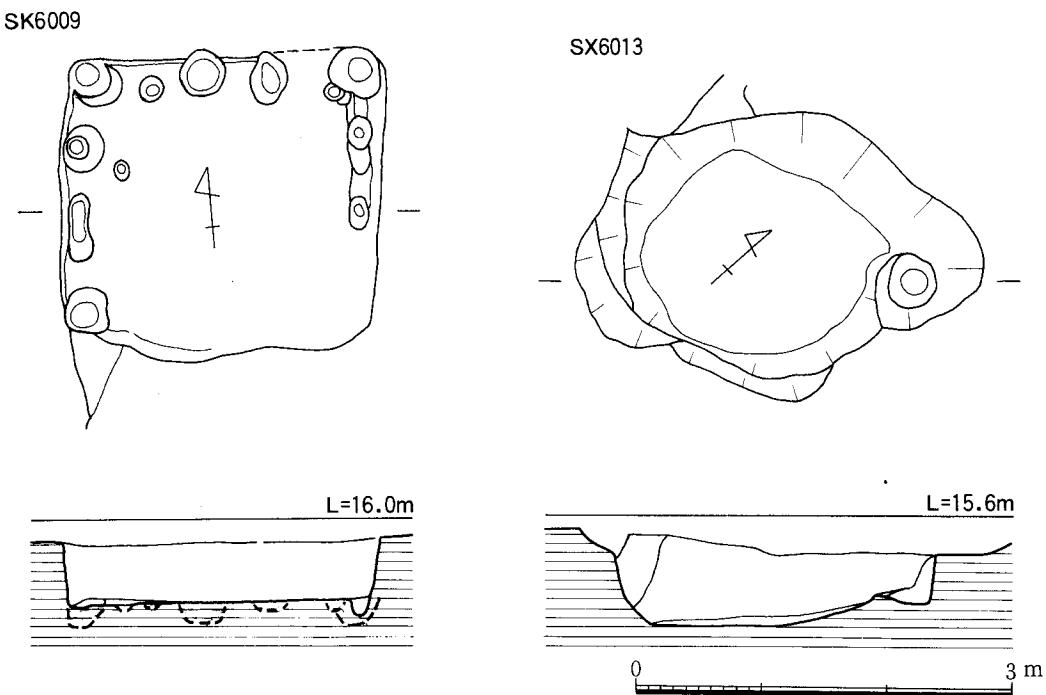


Fig. 10 SK6009・SX6013 (1/60)

③ 第2面の調査 (Fig.7、PL.3)

第2面は第1面から更に10~20cm下の黒色粘土上面で検出した。検出した主な遺構はピット、溝などである。上面の掘り残しの遺構もあるものと思われる。

溝状遺構

S D 6014 (Fig.12、PL.5-(2)) 調査区南東隅で検出した南西から北東方向へ斜めに伸びる溝である、溝幅が一定でなく1.4~5.2m、深さ約40cmを測る。埋土は粗砂礫を主体としており、下の方は鉄分を帯びる。溝の形状や埋土が砂であることから自然流路と考える。出土遺物はなかった。

S D 6015 (PL.5-(2)) 調査区南壁沿いを東西に伸びる小溝である。確認長は約5mを測るが、断続的に西に伸びるようである。埋土は暗灰黄色粗砂礫混じり粘土である。出土遺物はなかった。

④ 第3面の調査 (Fig.7、PL.4)

第3面は2面より10~20cm下の灰オリーブ粗砂混じりシルト粘土である。検出された遺構は溝と不定形土坑とピット

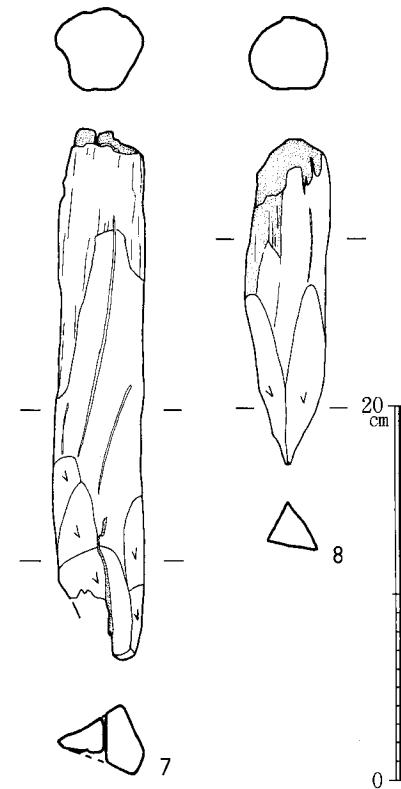


Fig. 11 第3面出土杭 (1/4)

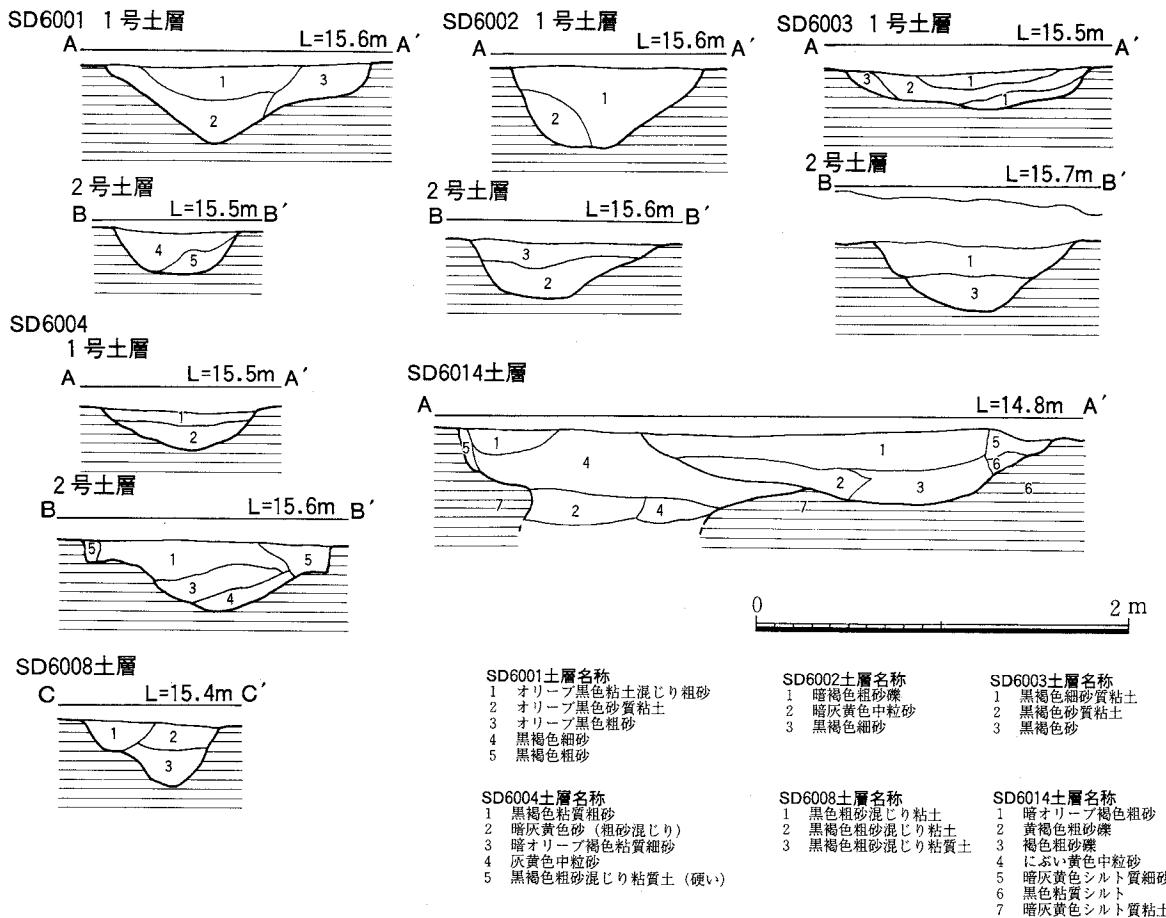


Fig.12 各溝土層図 (1/40)

トである。また遺構面で粗砂礫を主体とした埋没流路を確認したので、だめ押しとしてトレンチ (Fig.13) を入れたが、遺物・流木などは確認出来なかった。

溝状遺構

S D 6016・17 (PL.6-(1)) 調査区南側で検出した自然流路で二股に分かれ、東側を **S D 6016**、西側を **S D 6017**とする。いずれも浅く、出土遺物はない。

不明土坑

S X 6013 (Fig.10、PL.6-(4)) **S K 6009**の南側で検出した楕円形状を呈する土坑で、規模は長軸長3.23m、短軸長2.30m、深さは75cmを測る。埋土は灰オリーブシルトで粗砂礫を含む。出土遺物はない。

遺構面出土杭 (Fig.11) 6・7は第3面の表面に打ち込まれていた杭であるが、この面に伴うものかは不明。長さはそれぞれ28.3cm、17.3cmを測る。芯持ちの丸杭で、先端は断面三角形を呈するよう削られている。

III 調査の記録

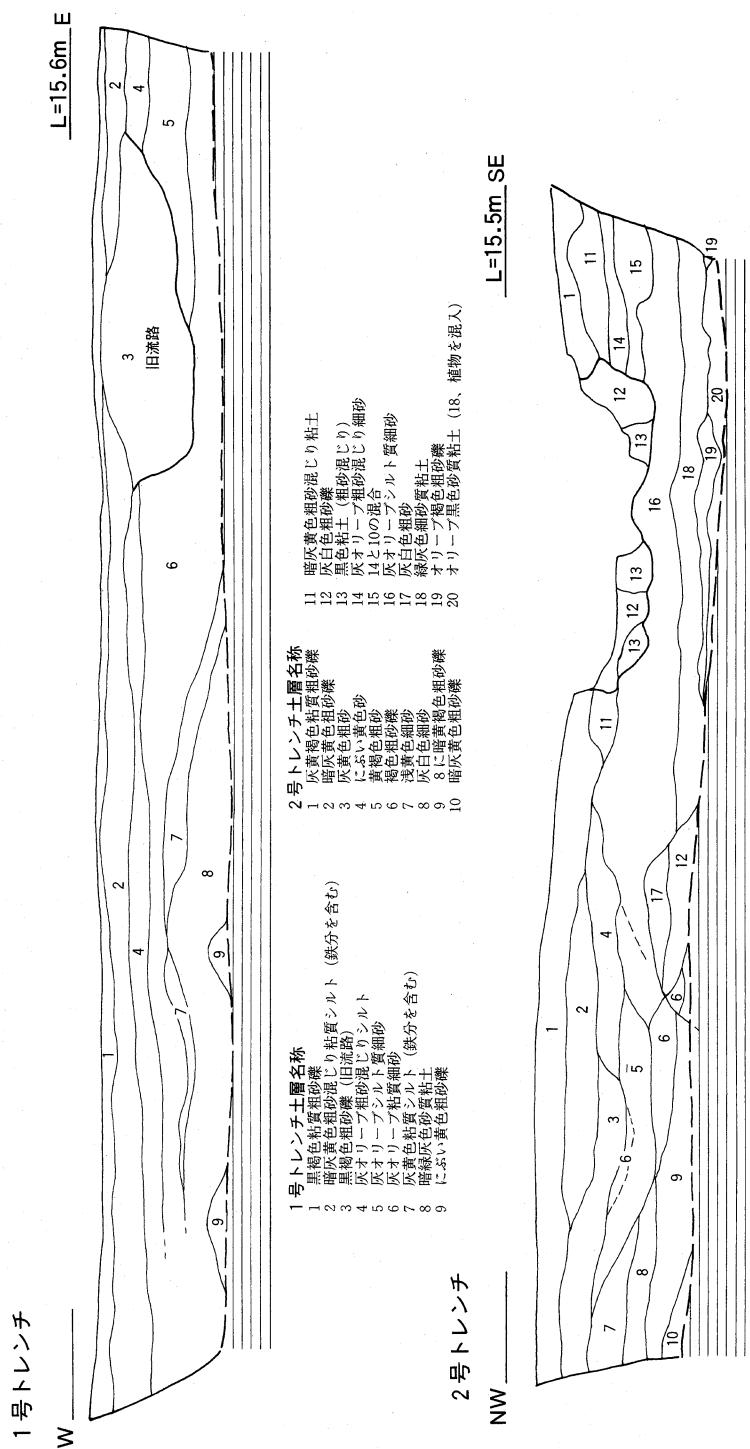


Fig.13 1・2号トレンチ土層図 (1/60)

3. VII区の調査

① 調査の概要 (Fig. 14・15、PL. 8)

VII区の西側で、間に民家への通路を挟んで隣接する。北側は道路を挟んでVIII区と向かい合う。本区は調査区域が生活道路や駐車場として利用されておりして、実際に調査できた範囲は狭く、調査面積は83m²である。

遺構面までの堆積土は上から表土（所々攪乱が入った盛土）、黒色粗砂混じり土、黒褐色粗砂混じり粘質土で、その下が遺構面の暗褐色粘質土（粗砂混じり）となり、その深さは70cmを測る。この面で黒褐色の埋土のピットを検出したが、いずれも浅く、また遺物の出土もなかった。きっととした柱穴とは考えられない。この後、20~30cm下の暗灰黄色粗砂混じりシルト層まで掘り下げ、遺構のだめ押しの精査を行った。少數のピットを検出したが、いずれも浅く、上面で見逃したピットと思われ、明確な遺構は確認出来なかった。

出土遺物は埋土中から土師器の細片が1点出土しているだけで、遺構の時期の特定は出来ない。

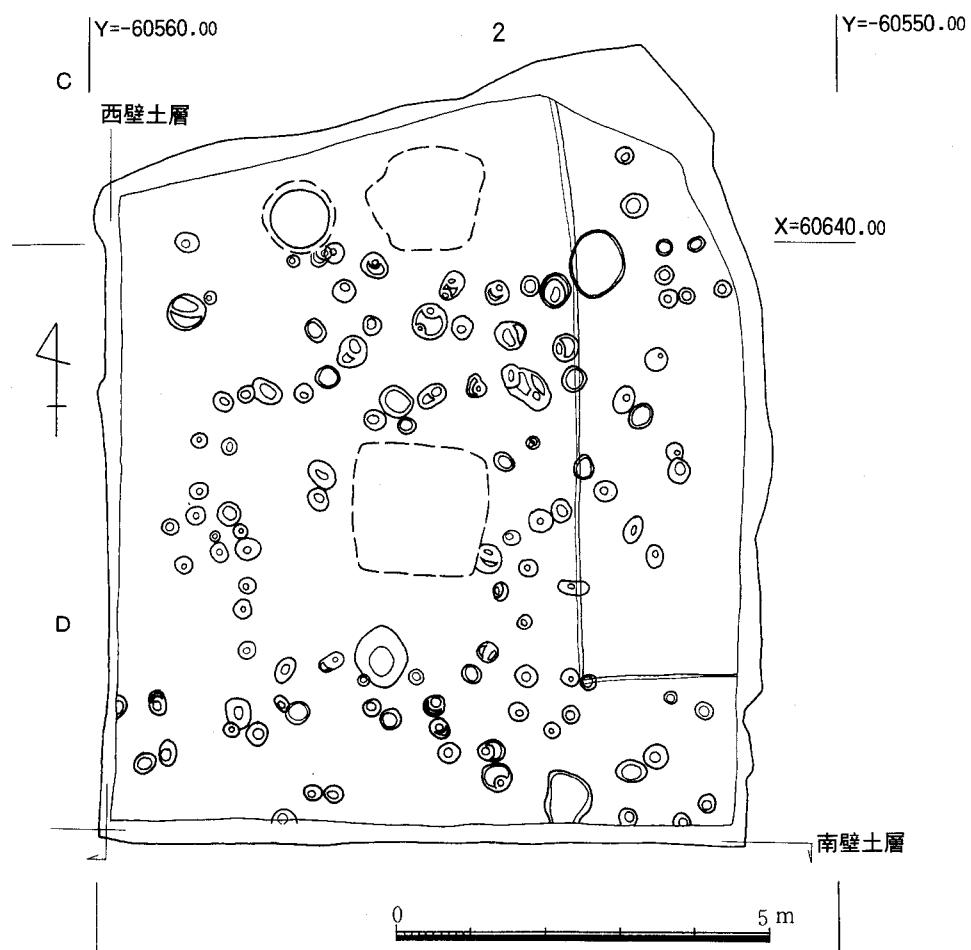


Fig. 14 遺構全体図 (1/100) (赤はだめ押しで検出)

III 調査の記録

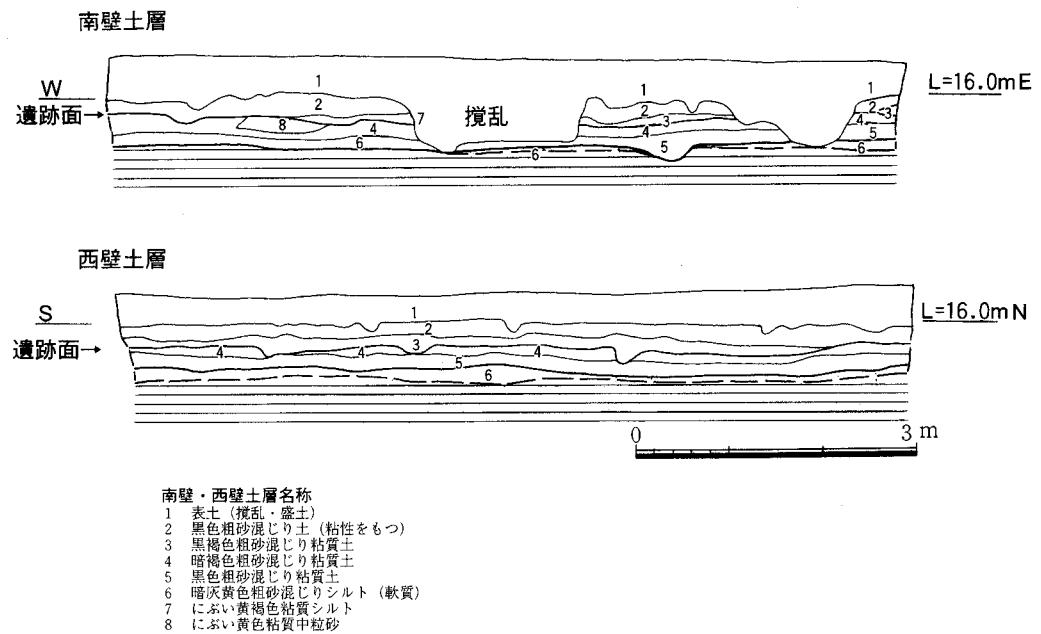


Fig.15 調査区南壁・西壁土層図 (1/80)

4. VIII区の調査

① 調査の概要 (Fig.16・18、PL.9)

調査区は北西側、三角形を呈する部分であるが、実際調査を行ったのはL形をした範囲である。当初現場事務所があったため、調査の終盤に事務所を撤去した後、調査を行った。調査は廃土処理の関係から2分割して行った。調査面積は234m²を測る。遺構面までの深さは約1mで、西に向かって深くなる。堆積土は70~90cmの盛土、暗灰色粘質土（粗砂混じりで水田耕作土）、黄灰色粘質土（床土）、暗灰黄色粘質土（鉄分を含む）で、遺構面は黒色粘質土またはシルトである。検出した遺構は溝7条とピットなどである。

② 遺構と遺物

溝状遺構

S D 8001 調査区南西側を北西方向に伸び、S D 8003を切る小溝である。溝の確認規模は長さ10.5m、幅0.25~0.7m、深さは最大でも10cmと浅い。埋土は淡黒褐色シルトで浅黄色粗砂礫を混入する。出土遺物は古墳時代の土師器や須恵器の細片が少量出土している。

S D 8002 南東から西に膨れるように北に伸びる小溝で、S D 8001に切られる。溝幅は0.3~0.5m、深さは最深でも10cm位である。埋土は粘性を持った黒褐色土である。出土遺物はごくわずかで、古墳時代から中世にかけての土師器の細片が出土している。

S D 8003 (Fig.18、PL.10-(1)~(3)) 西側境界を南北に伸びる溝である。S D 8004を切る。規模は幅2.7m、深さ0.8mを測る。埋土は粗砂礫や細砂を主体とし、水が流れた状態を示している。西側に流れる水路の旧流路であろうか。

出土遺物 (Fig.17、PL.10-(4)) 古墳時代から中世にかけての土師器、須恵器、白磁、青磁などの破片が出土しているが、大半は磨滅している。1・2は古墳時代土師器である。1は壺の口縁部1/5片で、復元口径14.7cmを測る。内外面ナデである。2は甕の肩部細片である。全体に磨滅がひどい。3・4は須恵器。3は杯蓋口縁部小片である。口縁部内面に明確な稜を持つ。4は壺底部小片で、復元底径は7.5cmを測る。5・6は中世の土師器の壺である。5は1/2片で、復元口径は15.5cm、器高は2.8cmを測る。底部は回転糸切りで板圧痕が残る。6は1/3片で、復元口径は13.8cm、器高は2.6cmを測る。外底は回転糸切りである。7~9は白磁である。7・8は碗。7は玉縁を呈する口縁部細片。釉には気泡が入る。8は口縁部が端反りである。9は皿1/6片で、復元口径9.8cmを測る。口縁部内面は釉を搔き落とし、露胎としている。10は鎬蓮弁の青磁碗細片である。ほかにサヌカイトの剥片がわずかに出土している。

S D 8004 (PL.10-(1)~(3)) S D 8003の東側を南北方向に伸びる、幅1.4~2.35m、深さ0.5m程度を測る溝である。埋土は黒褐色から黒色の砂質の粘質土で、自然流路ではない。切り合いからS D 8003に先行するものである。

出土遺物 (Fig.17、PL.10-(4)) 古墳時代の土師器や須恵器片が少量出土している。11は中世土師器皿1/6片で、復元底径5.2cmを測る。外底は糸切りである。12・13は須恵器である。12は高台付壺の細片。13は高壺の一部である。14は砥石片を転用した叩石である。残存長8.8cm、幅8cmを測る。石材は砂岩である。

S D 8005 調査区東側を南東から北西に伸びる小溝で、確認規模は長さ8.5m、幅0.2~0.7mを測る。極めて残りが悪く、深さは2~10cm程度で、北西端はほとんど消滅する。埋土は黒褐色土で、灰褐色土ブロックを混入する。出土遺物は古墳時代の土師器の細片が少量出土している。

III 調査の記録

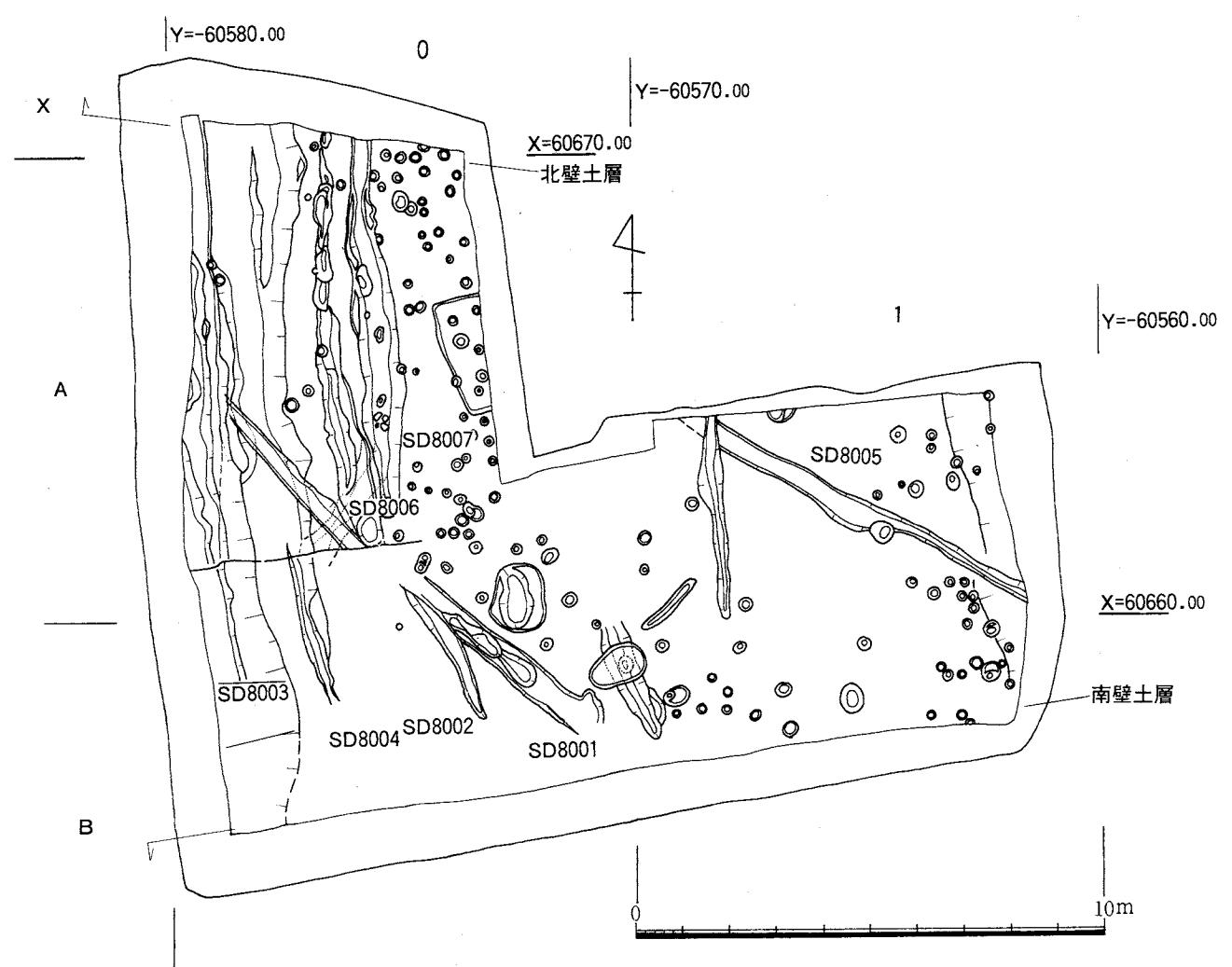


Fig.16 遺構全体図 (1/150)

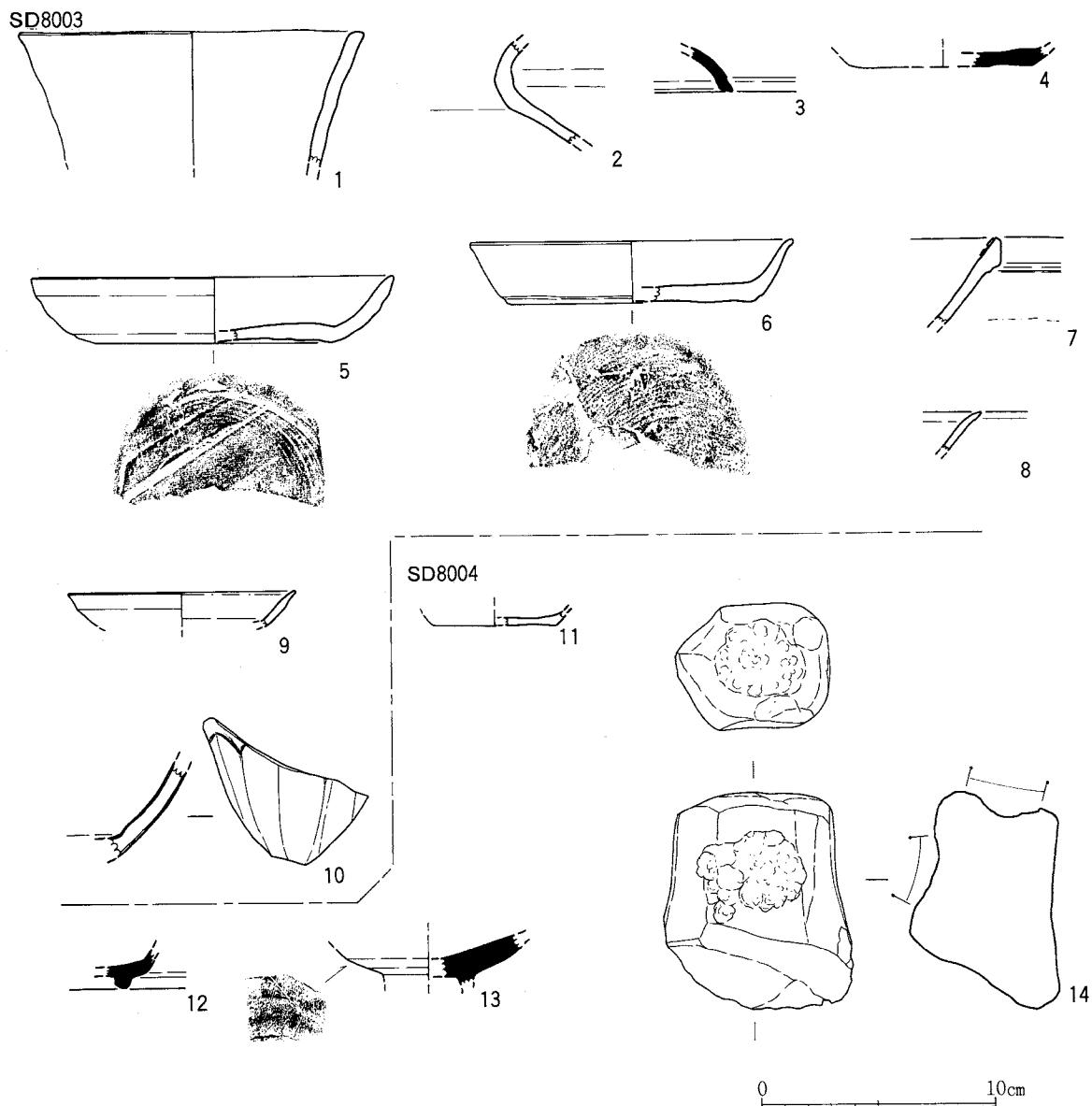


Fig.17 各遺構出土遺物 (1/3)

S D 8006 S D 8001とS D 8002に切られ、S D 8007と重複する溝である。断片的で状況は不明。埋土は浅黄褐色粗砂礫である。**出土遺物**は古墳時代の土師器や須恵器の細片が少量出土している。

S D 8007 S D 8002の東側を南北に伸びる溝で、確認長は8.2m、幅0.4~0.9m、深さは6~20cmを測る。埋土は黒褐色から黒色の粘質土又は粘質の砂質土である。**出土遺物**は古墳時代の土師器の細片がわずかに出土している。

このほかに2基のピットから古墳時代土師器の細片が出土している。

III 調査の記録

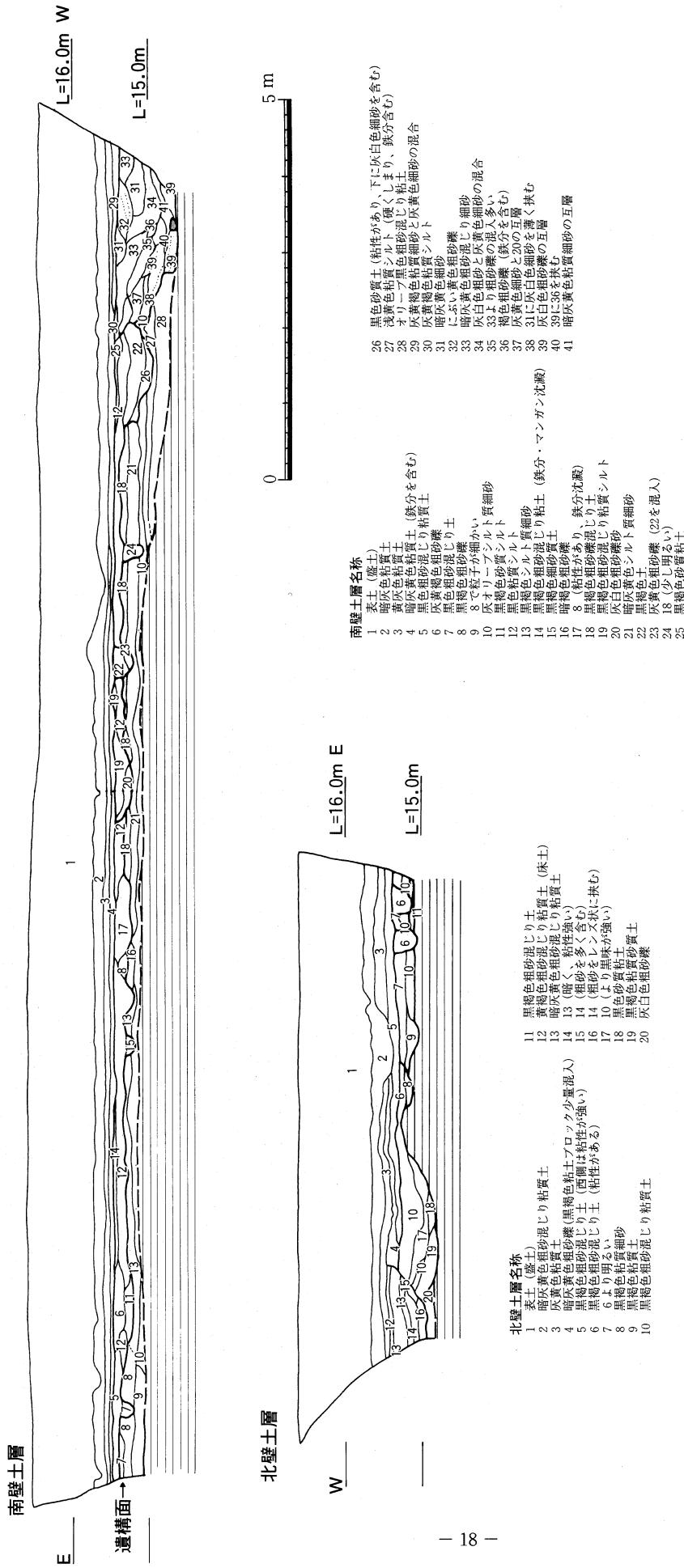


Fig. 18 調査区南壁・北壁土層図 (1/80)

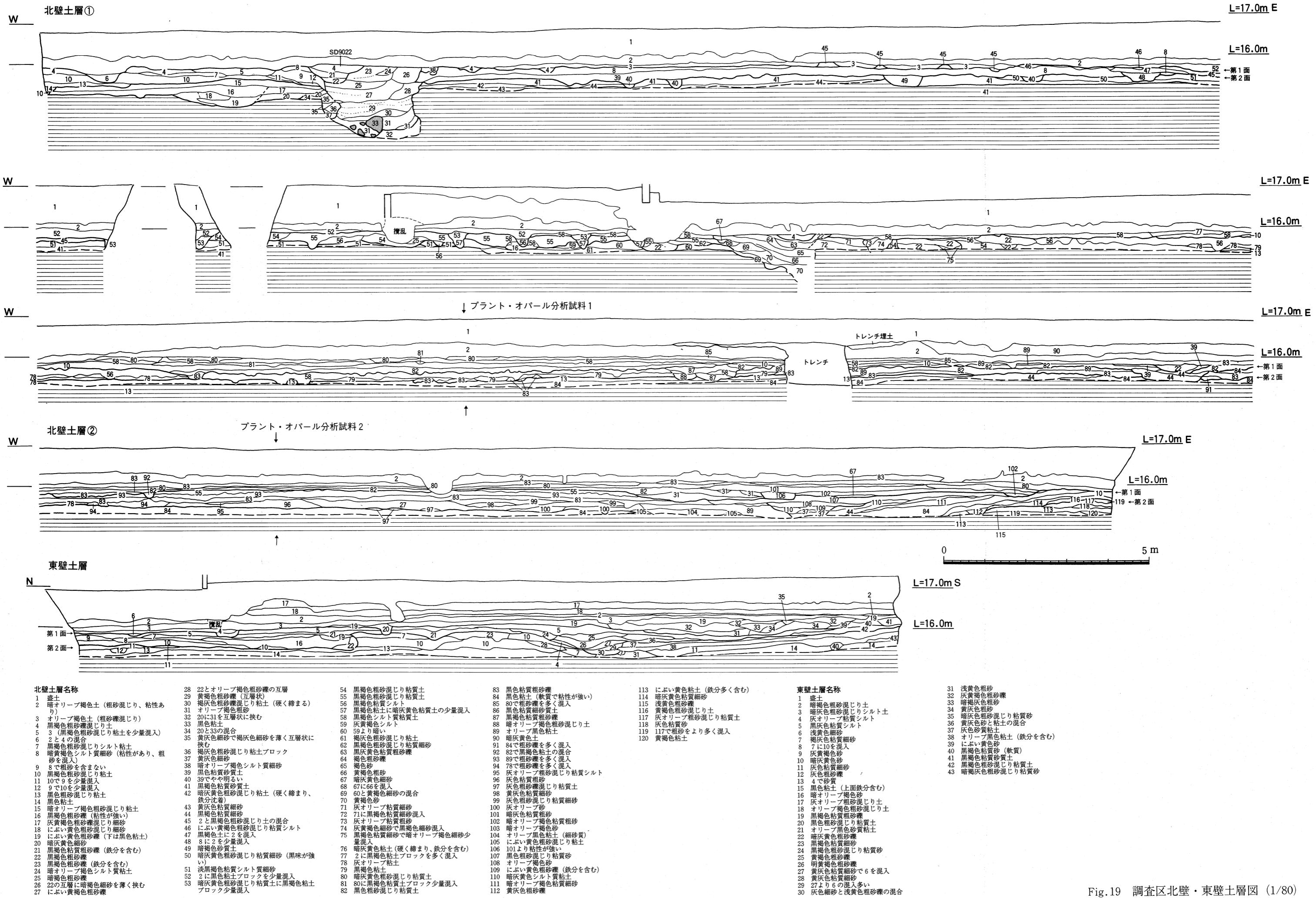
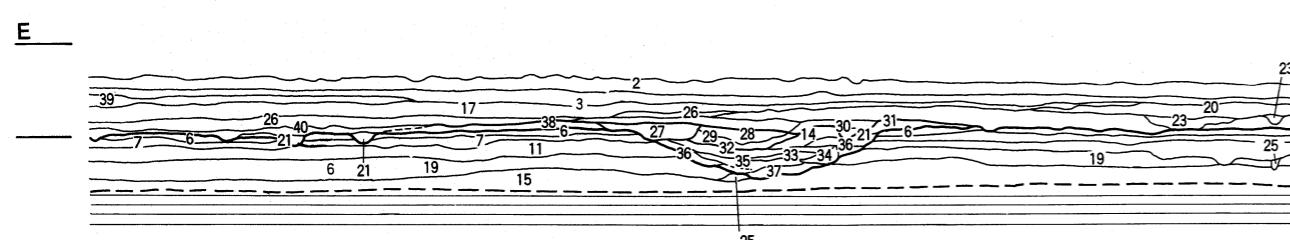


Fig.19 調査区北壁・東壁土層図 (1/80)

南壁東側土層



L=17.0m W

L=16.0m

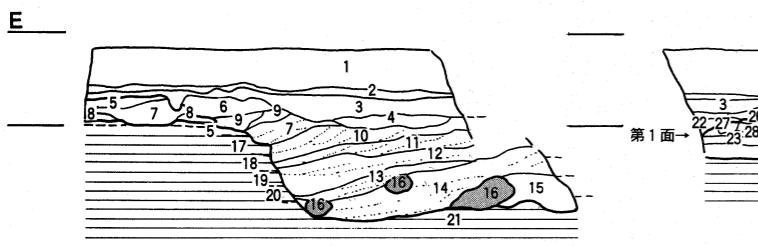
南壁東側土層名称

- 1 盛土
- 2 黒褐色粗砂混じり土
- 3 黄灰色粗砂混じり土
- 4 暗灰黄色粗砂混じり粘質土(鉄分を含む)
- 5 黑褐色粗砂混じり粘質土
- 6 黑褐色粗砂混じり粘質シルト
- 7 黑褐色シルト粘土
- 8 にぶい黄褐色粗砂疊
- 9 暗灰黄色粗砂質土
- 10 黑褐色砂粘土
- 11 黑褐色砂粘土
- 12 黑褐色細砂
- 13 暗オリーブ褐色粗砂疊
- 14 暗オリーブ褐色砂
- 15 黑色粗砂混じり粘質砂
- 16 黑色粗砂混じり粘土(泥土に近く粘質)
- 17 暗灰黄色粗砂質土と黄褐色粘質土の混合
- 18 黑褐色粗砂疊
- 19 青黒色粗砂混じり粘質土
- 20 暗灰黄褐色粗砂質土
- 21 黑褐色粗砂疊
- 22 暗灰黄色粗砂疊
- 23 17に6ブロック混入
- 24 暗オリーブ褐色粘質砂
- 25 11に粗砂を混入
- 26 17に黒褐色土ブロック混入
- 27 暗灰黄色粗砂質土
- 28 暗灰黄色砂
- 29 黑褐色粗砂疊混じり土
- 30 黑褐色粘質細砂
- 31 黑褐色粗砂混じり粘質土
- 32 黑褐色粘土
- 33 32と褐色砂の混合
- 34 黑色粘質細砂
- 35 32で砂質(かなり軟質)
- 36 21より暗い
- 37 黑褐色粗砂混じり砂質土(かなり軟質)
- 38 6に鉄分・マンガン粒子を含む
- 39 灰色粗砂混じりシルト粘土
- 40 黒褐色粘質粗砂
- 41 黑褐色粘質砂
- 42 暗オリーブ褐色粗砂混じり粘土
- 43 黑褐色粘土
- 44 暗褐色粘土
- 45 黑色粘土
- 46 暗灰色粗砂疊混じり粘土
- 47 オリーブ黑色粘土
- 48 黑色砂質土

南壁西側土層名称

- 1 盛土
- 2 黒褐色粗砂混じり土
- 3 暗オリーブ褐色粗砂混じり土(やや粘性あり)
- 4 暗褐色粗砂疊
- 5 黑褐色粘質細砂
- 6 黑色粗砂(やや粘性あり)
- 7 黑褐色粗砂疊
- 8 黑褐色粗質シルト
- 9 黑褐色砂疊
- 10 オリーブ褐色粗砂疊
- 11 にぶい黃色粗砂疊の互層
- 12 11で間に暗灰黄色粗砂疊を薄く縞状に挟む
- 13 浅黄色粗砂疊
- 14 灰黄色粗砂疊(黒色粘土大ブロックを混入)
- 15 黒色粘土ブロックと灰白色砂の混合
- 16 黑色粘土
- 17 黑褐色粗砂質粘土
- 18 にぶい黄褐色粗砂疊混じり粘土
- 19 黑褐色粗砂混じり粘土
- 20 黑色粗混じり粘土
- 21 黑褐色シルト質粘土
- 22 暗灰黄色粗砂質粘土
- 23 黑褐色砂質土
- 24 (粗砂混じりで、粘性がある)
- 25 黄褐色粗砂疊混じり砂質土
- 26 23で4を混入
- 27 暗灰色シルト質細砂
- 28 暗オリーブ褐色粘土
- 29 28と黒褐色粘土の混合
- 30 暗灰黄色粗砂疊混じり粘土
- 31 黑褐色細砂
- 32 暗オリーブ褐色土に16ブロック多量混入
- 33 にぶい黄褐色粗砂疊
- 34 暗褐色粘質細砂
- 35 23で粗砂を混入
- 36 23と黒褐色粘土の混合
- 37 暗灰色粘質細砂
- 38 暗オリーブ褐色土
- 39 暗灰黄色粘質砂
- 40 暗い灰褐色粘土
- 41 黑褐色粘土
- 42 黑褐色砂質粘土
- 43 17で粗砂疊を混入
- 44 暗灰色粗砂疊混じり粘質土
- 45 暗灰黄色粗砂疊混じり粘質シルト土
- 46 暗灰黄色粗砂疊混じり粘質土
- 47 オリーブ褐色粗砂疊混じり細砂
- 48 浅黄色細砂
- 49 暗褐色砂
- 50 黄褐色粗砂疊
- 51 16に鉄分・粗砂疊少量混入
- 52 黑褐色粘土
- 53 黑褐色粘土
- 54 黑褐色粗砂疊混じり粘質細砂
- 55 暗オリーブ褐色粘質細砂
- 56 よりやや暗い
- 57 暗褐色粗砂疊
- 58 暗灰褐色粗質細砂
- 59 暗褐色粗砂疊
- 60 暗褐色灰質粘土質土
- 61 黑褐色灰質粘土
- 62 黑褐色粗砂混じり粘質土
- 63 暗オリーブ土
- 64 暗褐色土
- 65 黑色砂質混じりシルト土
- 66 41(鉄分含む)
- 67 黑灰色細砂
- 68 オリーブ黑色粘質細砂

南壁西側土層-①

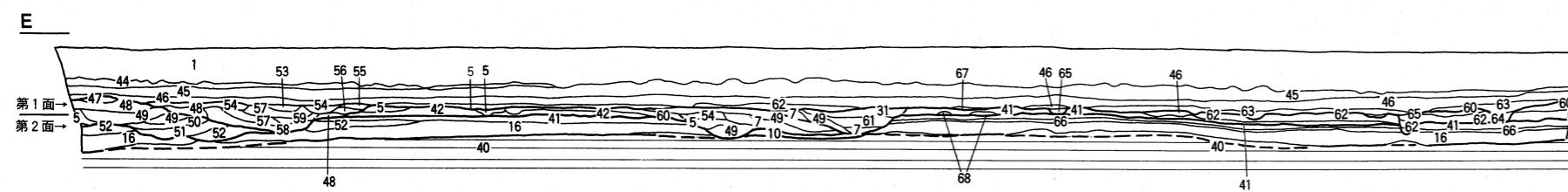


L=17.0m W

L=16.0m

0 5 m

南壁西側土層-②



L=17.0m W

L=16.0m

Fig. 20 調査区南壁土層図(1/80)

5. IX区の調査

① 調査の概要

今回の調査では最も広い調査区である。調査区の大半がスーパーマーケットの駐車場となっていたので、その部分は表面の舗装を撤去した後、重機で遺構面まで掘削し、その廃土はトラックで場外に搬出した。また調査区の北側は店舗として営業していたため、特に安全対策には気を使った。調査面積は4,168m²である。

当初は中央南北に延びる排水溝を基準に西をIX区、東をX区としたが、整理の段階でIX区に統一した。遺構面は2面あり、上面の遺構面の標高は15.5~16.1m、西南側が高く北と東に向かって低くなる。西側では上面に粗砂がかぶる部分があり、それを取り除くと足跡群を検出した。東側では畦畔などの明瞭な遺構は確認されなかったが、水田が存在した可能性も考えて、堆積土のプラントオパールの調査を行った。

② 第1面の調査（付図1、PL.11~13）

遺構面までの深さは0.7~1.2mで、堆積状況は上から0.4~0.9mの盛土、暗オリーブ褐色土の表土、黒褐色粗砂混じり土、黒褐色粗砂混じり粘土である。遺構面は暗オリーブ褐色粗砂混じり土で表面に鉄分が沈着し硬く締まっていた。検出した主な遺構は竪穴住居跡3棟、掘立柱建物2棟、柵1条、土坑10基、溝、ピット群、足跡群などである。

竪穴住居跡

S C 9025 (Fig.21、PL.15-(1)~(3)) 調査区南壁沿いで検出した住居跡である。平面形は長方形を呈し、規模は長軸長6.20m、短軸長4.82m、床面までの深さは15cm程を測る。遺構の残りは余り良くない。主柱は2本で、直径は14cm程である。柱軸線から少し北側の床面に炭化物が集中する部分があり、その南側に楕円形状を呈する炉と思われる焼土面がある。床面南壁中央近くに長軸径0.62m、短軸径0.5m以上、深さ20cmを測る、隅丸長方形を呈する土坑がある。埋土は黒色粗砂混じり土で、暗褐色土を少量混入する。

出土遺物 (Fig.22~24、PL.26・27) 床面から少し浮いた状態で土師器の壺、甕、高壺などが出士しているが、須恵器を1点含む。

1は須恵器の胴部片で、小片で器形は壺と思われるが不明確である。胴部最大部にカキ目が入るが、全体の調整はヨコナデ。色調は灰色で、胎土に黒色粒子を含む。

2~26は土師器。2は小型の丸底壺。底部と上部は一致せず、別個体の可能性がある。全体の調整はナデで、底部内面は指オサエとヘラケズリである。色調はにぶい黄橙色を呈する。3~15は甕である。3は頸部が締まる甕の頸部から底部1/3片で、復元口径18.4cm、器高34.5cm以上を測る。外面はハケ、内面はケズリ。底部はいびつで安定しない。4はほぼ完形で口径15cm、器高25.5cmを測る。外面から口縁部はハケ、胴部内面はケズリである。底部は平底気味である。胴部上半には煤が付着し、黒斑がある。色調は3がにぶい橙色、4がにぶい黄橙色を呈し、胎土は3が赤色粒子を含む。5は口縁部1/2片で4に形態が似る。復元口径14.5cmを測る。口縁部外面には刻線があり、肩部内面には粘土の接合痕が明瞭に残る。6は口縁部1/2片で、肩は丸みを持つ。復元口径14.5cmを測る。色調は5が浅黄橙色、6が浅黄橙色を呈する。7・8は小型甕の口縁部片で、7は小片、8は1/4片である。それぞれ復元口径は12.8cm、16.6cmを測る。7の胴部内面は表面が剥落して不明。色調はにぶい橙色、にぶい黄橙色である。胎土にはいずれも粗砂を多く含み、特に7は赤色粒子を含む。9・10は丸みを

持つ胴部の甕である。1/3片で復元口径14.2cm、13.8cmを測る。9の外面は丁寧なハケ、内面は粘土帶の継目が残り、胴部内面は強いヘラナデである。10は肩部内面はハケで、その下はヘラケズリである。色調は橙色、にぶい黄橙色を呈し、いずれも胎土には粗砂粒を多く含む。11は口縁部から胴部1/3片で、復元口径15cmを測る。口縁部外面はハケ後ナデ、胴部は粗いハケ、内面はケズリである。12は1/3片で、大きく丸く膨らむ胴部を持つ。復元口径は20.6cmを測る。胴部外面はハケ、内面はナデで指オサエ痕が残る。色調はにぶい黄橙色で黒斑を持つ。胎土に粗砂粒を多く含む。13・14は口縁部片。13は頸部小片で、内外面ハケ後ナデ。14は布留式甕の口縁部小片である。15は土師器の壺の口縁部小片。小片のため形態ははっきりしない。

16～26は高坏である。16・17は坏部である。16は1/2片で復元口径は18.2cmを測る。外面はハケ後ナデ、内面はハケで底部はナデである。17は口縁部小片の為、他器形の可能性もある。色調は16は橙色、17はにぶい橙色を呈する。胎土は16は赤色粒子を含み、17は精良。18・19は坏部と筒部の接合部である。色調はいずれも橙色で、胎土に赤色粒子を含む。20～25は脚部である。20は脚筒部の小片で、接合面にはヘラの刻み目が入る。21・22は裾部が外側に屈折して開く形態である。21は脚端径11.6cm、22は1/2片で12.2cmを測る。22は外面は指ナデ仕上げである。20～22の色調は橙色、胎土は21・22が粗砂粒を多く含む。23・24は筒部で、24は1/2片である。23・24の色調は橙色を呈し、胎土は23が精良、24が赤色粒子を含む。25は裾部の小片である。25は小片である。26は真っ直開く脚部である。26の復元口径は15cmを測る。色調は25が明赤褐色、26が橙色である。胎土は25に赤色粒子を含む。

S C 9030 (Fig.21、PL.15-(4)・16-(1)) 10F区で検出した小型の長方形を呈する住居跡である。規模は長軸長4.0m、短軸長2.7m、床面までの深さは15cmを測る。遺構の残りは悪く、主柱穴や炉は不明であるが、形態や遺物の出土具合から住居跡とした。埋土はやや粘性を持った黒色粗砂混じり土である。

出土遺物 (Fig.26、PL.27) 古墳時代前期の土師器が床面から出土している。27は小型の甕1/2片で復元口径14cm、器高15.7cmを測る。胴部外面はタタキのちナデ、底部はヘラ状工具によるナデ、内面は丁寧なナデである。28は大型の二重口縁の壺である。バラバラの破片で出土した。完全には接合は出来ず、推定復元である。復元口径27.4cm、最大胴径57.6cmを測る。胴部中央と下半に二条の扁平な凸帯が貼り付き、下の凸帯は内面にも凸帯状の膨らみが見られる。胴部全体は横方向のタタキ、内面は斜めのハケを加える。口縁部はナデである。29は底の浅い鉢2/3片である。口径12.4cm、器高3.0cmを測る。調整はナデで、外底部はヘラナデである。色調は橙色、胎土は精良。色調は27・28がにぶい黄橙色、29が橙色を呈し、胎土はいずれも精良である。

S C 9051 (Fig.25、PL.16-(2)) 10E区で検出した住居跡であるが、攪乱や削平、他遺構との切り合いで残りは悪い。規模は長軸長4.92m、短軸長3.44m以上、床面までの深さは10cmを測る。床面に炉跡はなく、主柱穴も今ひとつはっきりしない。埋土は黒褐色土である。

出土遺物 (Fig.26、PL.27) 古墳時代の土師器片が少量出土している。30・31は甕である。30は底部を欠失するが、口径17.4cm、器高28cm以上を測る。布留式の流れを汲むが、胴部は長胴化する。肩部に波状の沈線がある。口端部は窪み、胴部外面は細かいハケ、内面はヘラケズリである。全体に黒変し、外面にはススが付着する。31は胴部片である。胴部上半に径1cm余りの穿孔が入る。外面はハケ後ナデ、内面はヘラケズリである。32は高坏の坏部小片で、復元口径19.2cmを測る。坏の底部は深い、ハケ後ヘラ調整である。色調はそれぞれにぶい黄褐色、にぶい橙色、にぶい黄橙色である。胎土は31が砂粒を多く含む。

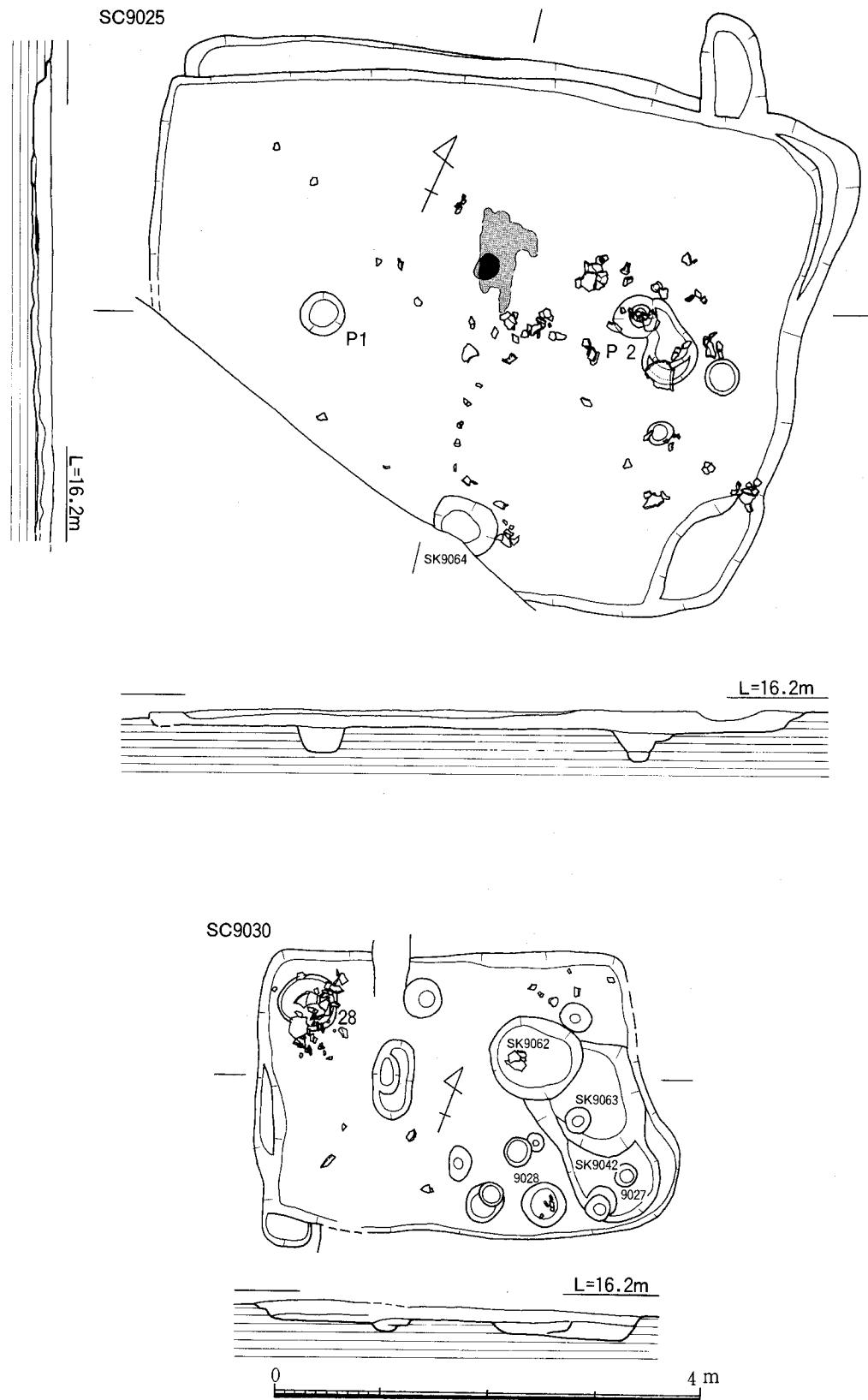


Fig.21 S C 9025・9030 (1/60)

III 調査の記録

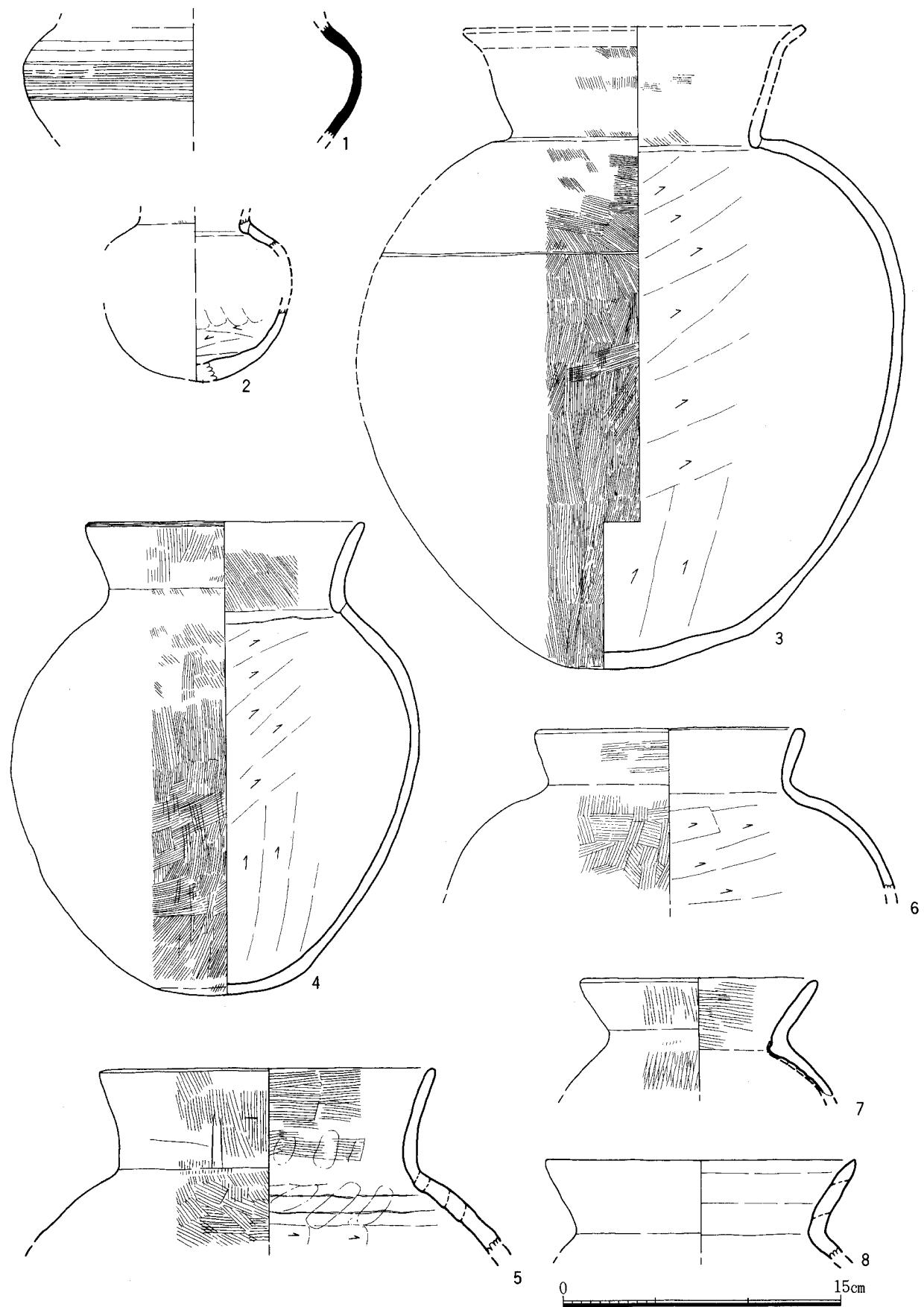


Fig. 22 S C 9025出土遺物 1 (1/3)

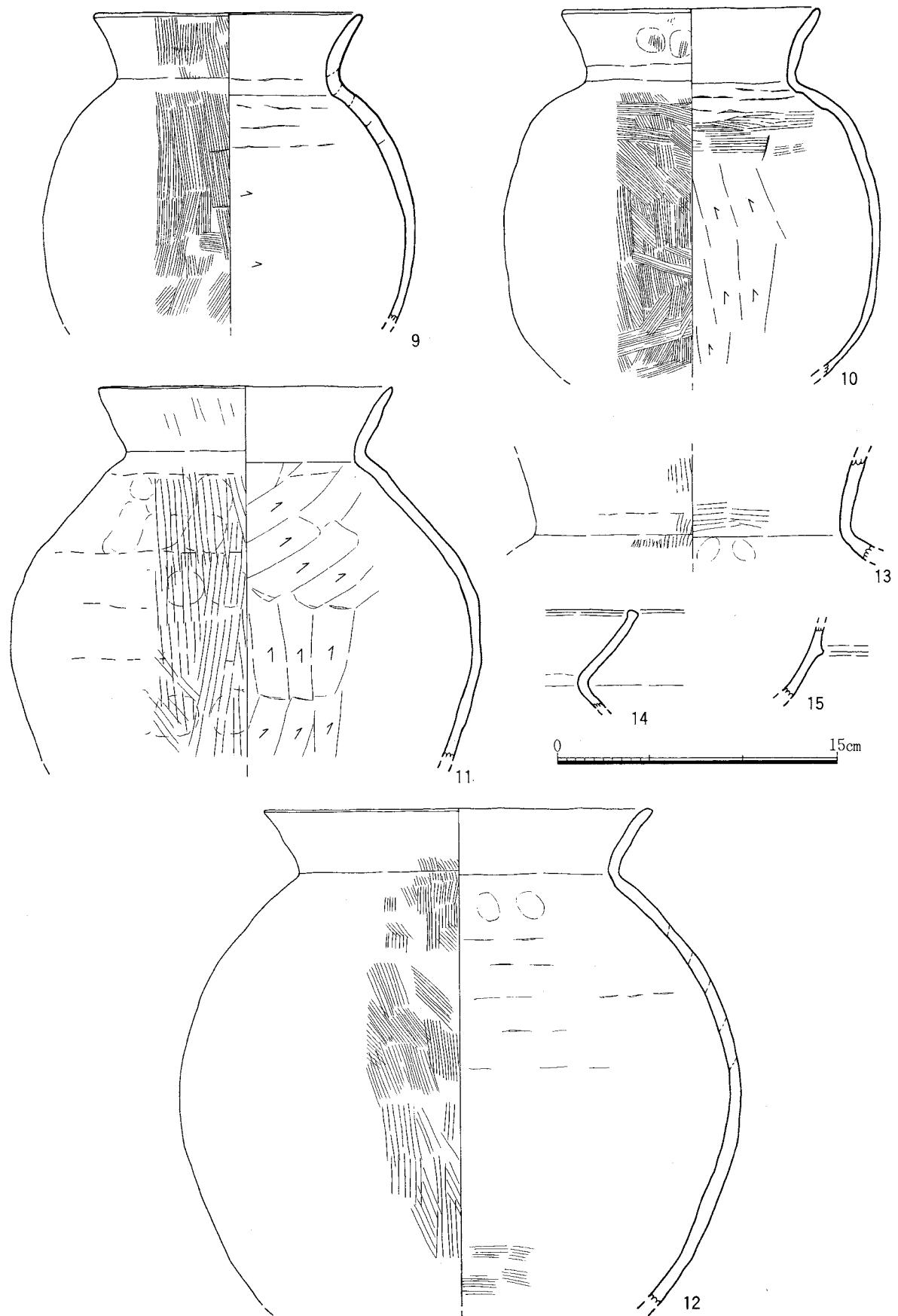


Fig. 23 S C 9025出土遺物 2 (1/3)

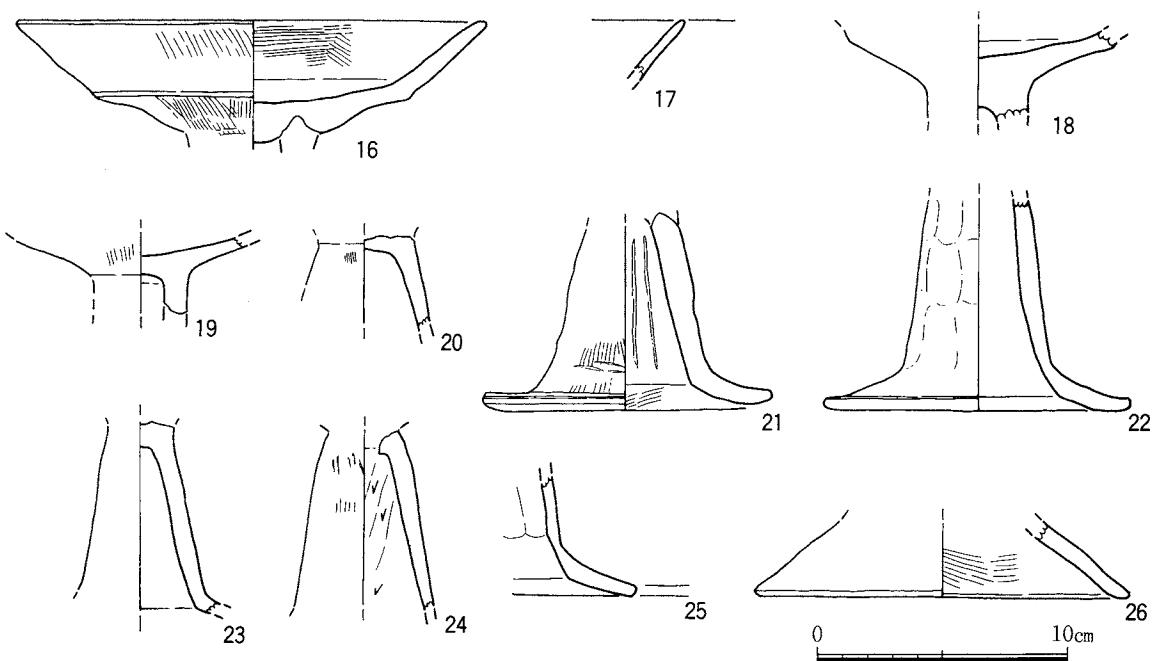


Fig. 24 S C 9025出土遺物 3 (1/3)

掘立柱建物

S B 9017 (Fig. 27、PL. 17-(1)) 調査区南西側9G区で検出した1×1間の建物跡である。規模は長軸長2.45m、短軸長2.10mを測る。柱穴は円形で、径は45~60cm、深さ20cmを測る。埋土は黒色または黒褐色土である。出土遺物は各柱穴から古墳時代の土師器の細片が少量ずつ出土している。

S B 9069 (Fig. 27、PL. 17-(2)) S B 9017の西側にある1×2間の建物跡である。S D 9008・9012の下から検出した。規模は梁間2.15m、桁行3.00mを測る。柱穴は円形又は楕円形で、直径は55~72cm、深さは25~50cm余りと比較的大きくしっかりしている。柱径は痕跡から15cm位である。埋土は黒褐色から黒色土である。

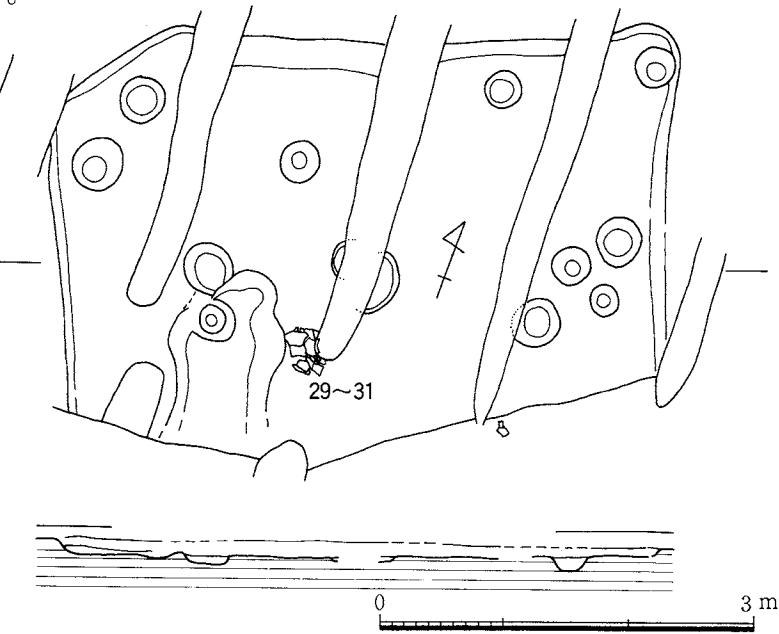


Fig. 25 S C 9051 (1/60)

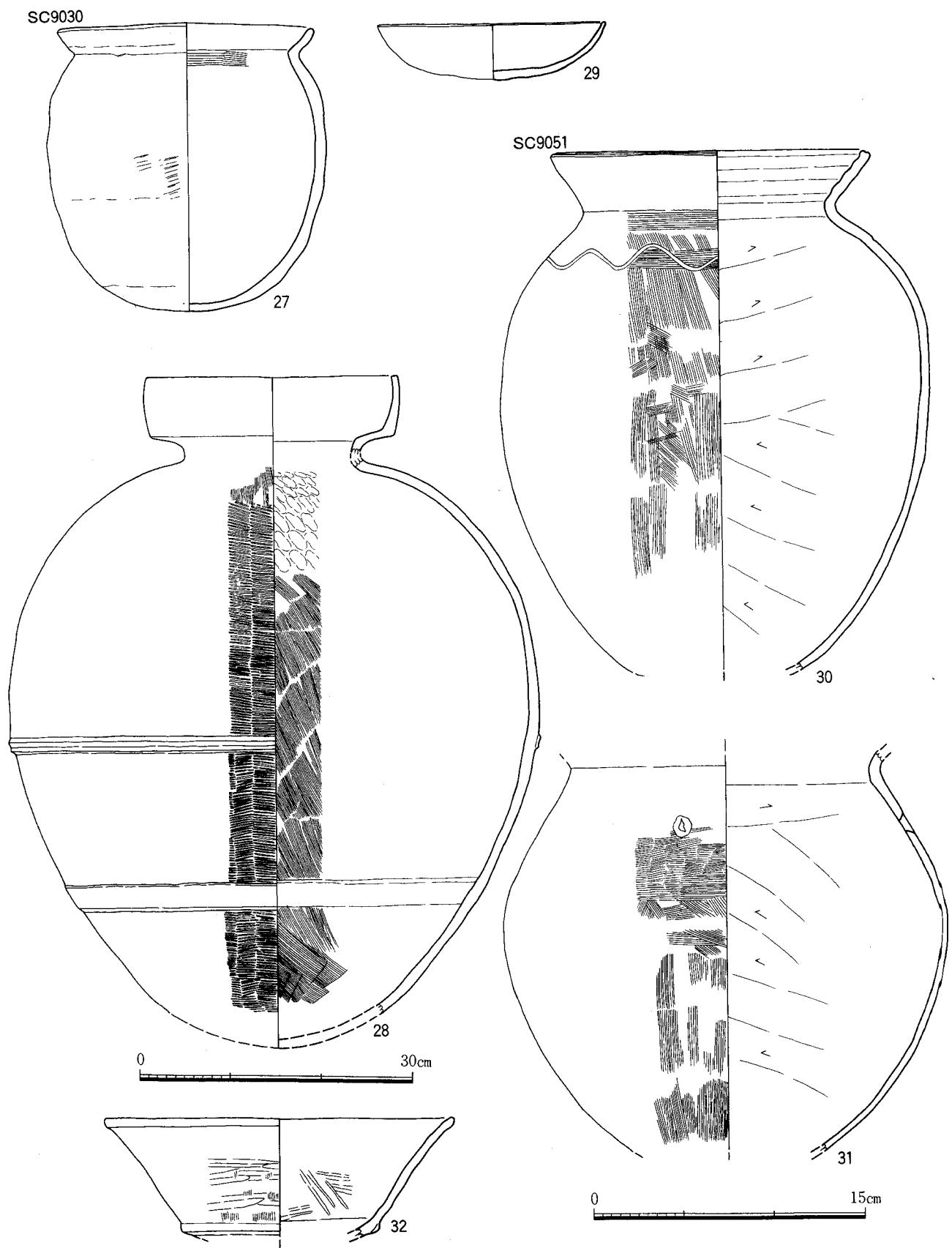


Fig. 26 S C 9030・9051出土遺物 (1/3・1/6)

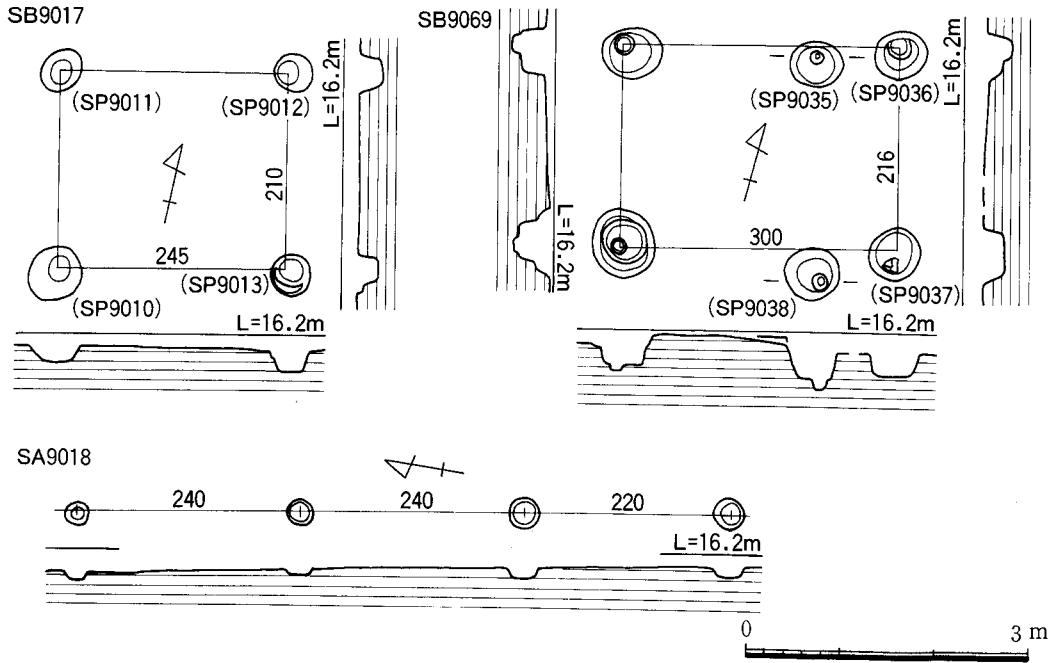


Fig.27 S B9017・9069・S A9018 (1/80)

出土遺物 (Fig.45、PL.27) 古墳時代の土師器片が各柱穴から出土している。167は布留式の甕胴部1/3片である。復元最大胴径21cmを測る。肩部に1条の沈線が巡る。外面横ハケ、内面ヘラケズリ。色調はにぶい黄橙色を呈する。

柵

S A 9018 (Fig.27、PL.17-(1)) **S D 9012**を切る柵で3間分確認した。主軸は磁北に近い。柵の規模は7.0mを測る。柱穴は円形で、径は25~35cm、深さは10cm位である。埋土は黒褐色土である。**出土遺物**は土師器の細片が2点出土している。

土坑

S K 9010 (Fig.28、PL.18-(1)) 8 F区で検出した楕円形の土坑である。規模は長径0.86m、短径0.72m、深さ28cmを測る。埋土は黒色粗砂混じり土である。**出土遺物**は古墳時代前期の土師器細片が4点出土している。

S K 9013 (Fig.28、PL.18-(2)) 8 E区で検出した楕円形の土坑。規模は長径0.97m、短径0.82m、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色粗砂混じり土である。**出土遺物**はない。

S K 9014 (Fig.28) 8 F区で検出した長方形状の土坑。長軸長1.77m、短軸長1.02m、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色粗砂礫で暗灰黄色シルト質粘土を含む。**出土遺物**はない。

S K 9015 (Fig.28、PL.18-(3)) 9 F区の**S D 9001**を切る隅丸長方形状の土坑である。規模は長軸長2.36m、短軸長1.40m、深さ24cmを測る。西から南側壁沿いに最大幅30cmほどのテラスを持つ。埋土は褐色味を持つ黒色土である。**出土遺物**は古墳時代の土師器の細片が少量出土している。

S K 9020 (Fig.28、PL.18-(4)) **S K 9015**の北側で**S D 9001**上面で検出した楕円形の土坑である。規模は長径1.1m以上、短径0.60m、最大深さ43cmを測る。埋土はオリーブ黒色土である。**出土遺物**は古墳時代の古式土師器の細片が少量出土している。

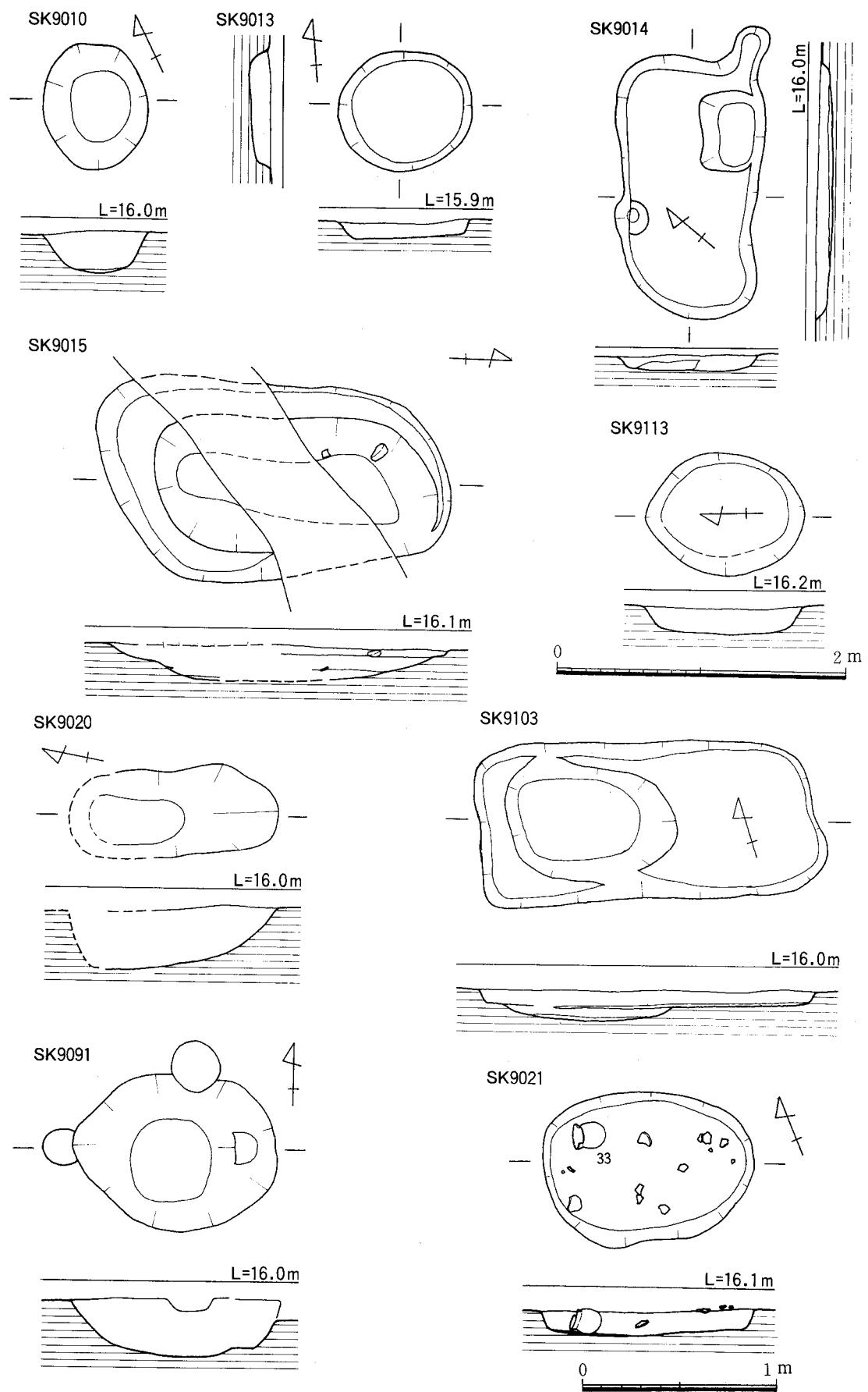


Fig.28 SK9010・9013・9014・9015・9020・9021・9091・9103・9113 (1/40・1/30)

III 調査の記録

SK 9021 (Fig. 28、PL. 18-(5)) 9 G 区で検出した楕円形状の土坑である。規模は長径1.10m、短径0.80m、深さ15cmを測る。埋土はオリーブ黒色細砂と黒色粘質細砂の混合砂である。床面に密着して小型の甕33などが出土している。

出土遺物 (Fig. 29) 古墳時代の前期の土師器が出土している。33はほぼ完形の小型の甕である。口径12.6cm、器高14.0cmを測る。胴部外面は粗いハケで、底部近くは6×5cmの大きさで、表面が円形に剝離している。34は高壇の脚部で裾部が外側に大きく開く。外面はヘラ状工具によるナデ、内面は細かい横ハケである。色調はいずれも橙色、胎土は33は精良である。

SK 9091 (Fig. 28、PL. 18-(6)) 12 F 区で検出した楕円形状の土坑である。規模は長径1.40m、短径1.08m、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色土である。**出土遺物**は古墳時代前期の土師器片が少量出土している。

SK 9103 (Fig. 28) 18 G 区で検出した長方形状の土坑。規模は長軸長2.37m、短軸長1.09mを測る。床面はほぼ平坦であるが、西側は1.21×0.84mの範囲で楕円形状に一段深くなる。床面までの深さは一段目は12cm、二段目は更に8cm程度深くなる。埋土は暗灰黄褐色粘質土で黒褐色粘土ブロックを少量含む。**出土遺物**は古墳時代の土師器の細片がわずかに出土している。

SK 9113 (Fig. 28) 8 G 区で検出した楕円形状を呈すると思われる土坑である。半分は溝 S D 9008 に切られるが、規模は長径1.10m、短径0.84m、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色土である。**出土遺物**は古墳時代の土師器の細片が少量出土している。

溝状遺構

溝は多数検出されているが、紙面の都合上主なものについて記述する。

S D 9001 (Fig. 30、PL. 19-(1)・(2)) 調査区西側を北北西に少し蛇行して伸びる溝で、北壁近くで湾曲して北に方向を変える。南側は **S C 9025**、北側は **S D 9022** に切られる。溝幅は1.5~3m程で一定していない。深さは0.9~1.2mで北側に向かって深くなる。溝底からは湧水があった。埋土は上層が黒褐色粗砂礫で、下層の方が褐色から灰黄色の粗砂礫に変わり、底には黒色粘土ブロックを含んでいた。この粘土は基盤土のものであり、流れによって壁が削られ崩落したものと思われる。

出土遺物 (Fig. 31・48、PL. 30) 繩文時代から古墳時代の土師器、黒曜石の剥片などが出土している。主に下層では縄文土器や弥生土器、上層では弥生土器や古墳時代の土師器などが出土している。須恵器細片も1点上層から出土しているが、混入と思われる。

35~46は上層から出土。35~37は古墳時代の土師器。35は甕の口縁部小片、36は高壇の壇部1/6片、37は高壇の脚部小片である。調整はいずれもナデ。色調は35が灰黄褐色、36が橙色、37が浅黄橙色である。胎土は35・36が精良。38~46は縄文土器。38~41は晩期末または弥生早期の突帯文土器の深鉢の口縁部小片。刻目突帯が口唇部につくもの38~40と、口縁から少し下がったところにつく41がある。42も鉢の口縁部小片。5条の沈線が巡る。43は滑石を混入する土器片である。外面には指による凹線

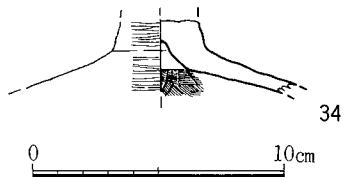
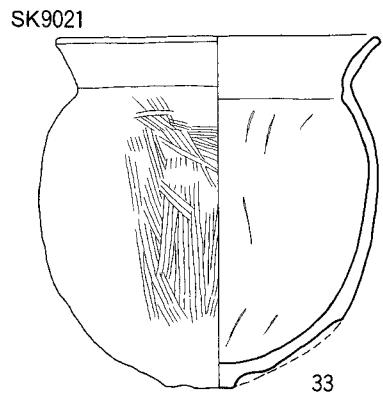


Fig. 29 SK9021出土遺物 (1/3)

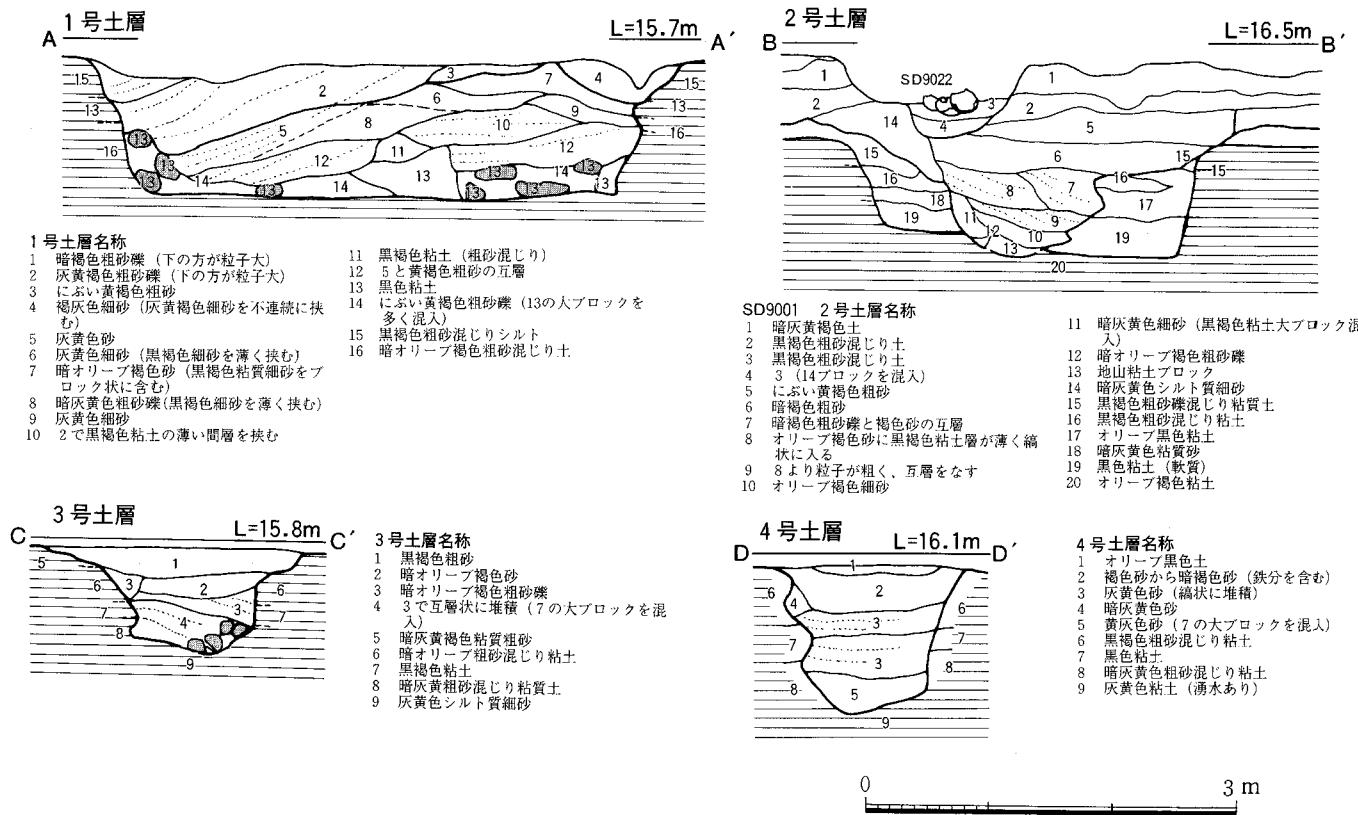


Fig. 30 SD9001 土層図 (1/60)

が入る。44は深鉢の底と胴部小片。底部は上げ底気味で調整はナデ。色調はにぶい橙色で、胎土に赤色粒子と滑石を多く含む。43・44は中期頃のものであろうか。45・46は胴部細片で、外面には条痕を施す。

47～55は下層出土。47は古墳時代の土師器の甕の口縁部小片。磨滅がひどく調整は不明。48～55は縄文土器。48は夜臼式土器の壺口縁部1/4片で、復元口径9.4cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。色調は橙色を呈す。49は弥生前期の甕の口縁部小片。口唇部に浅い刻目が8mm間隔で入る。50は縄文時代後期中葉の鐘崎式土器の鉢口縁部片である。口縁部は突帯状で穿孔があり、また口唇部には刻目が入る。色調はにぶい橙色で、胎土に赤色粒子、黒雲母を含む。51は胎土に滑石を含む縄文土器細片である。色調はにぶい赤褐色を呈す。52・53は突帯文土器の口縁部小片である。54は浅鉢の口縁部小片で、口縁部内面に軽く段がつく。55は底部片である。底径は6.2cmを測る。外底部は指押さえ後ナデ。色調は黄橙色を呈し、焼成はやや軟質である。

SD9011 (Fig. 41, PL. 19-(3)) 8G区から11D区に直に伸びる小溝である。**SD9001**を切る。溝幅は0.55～1m程、深さも10～30cmで、残りは余り良くない。埋土は黒褐色粗砂混じり土や粗砂礫である。

出土遺物 (Fig. 43) 主に古墳時代の土師器片が出土しているが、わずかに近世の白磁・陶器の細片が出土する。遺構の状況から見て混入品と考える。136～138は土師器。136は甕の頸部片。外面ハケ後ナデ、内面はハケとヘラケズリ。137は甕の口縁部小片。138は高坏の脚部片である。内面にしづり痕と頂部の接合面にはヘラの刻目がある。色調は136がにぶい橙色、137・138が橙色である。

SD9022 (Fig. 32・39・41, PL. 20-(1)・(3)・(4)) 10G区から9D区方向に東にカーブを描いて伸びる小溝で、北側は**SD9001**を切る。溝幅は0.6～1.4m、深さは15～30cmを測る。残りとしては良く

III 調査の記録

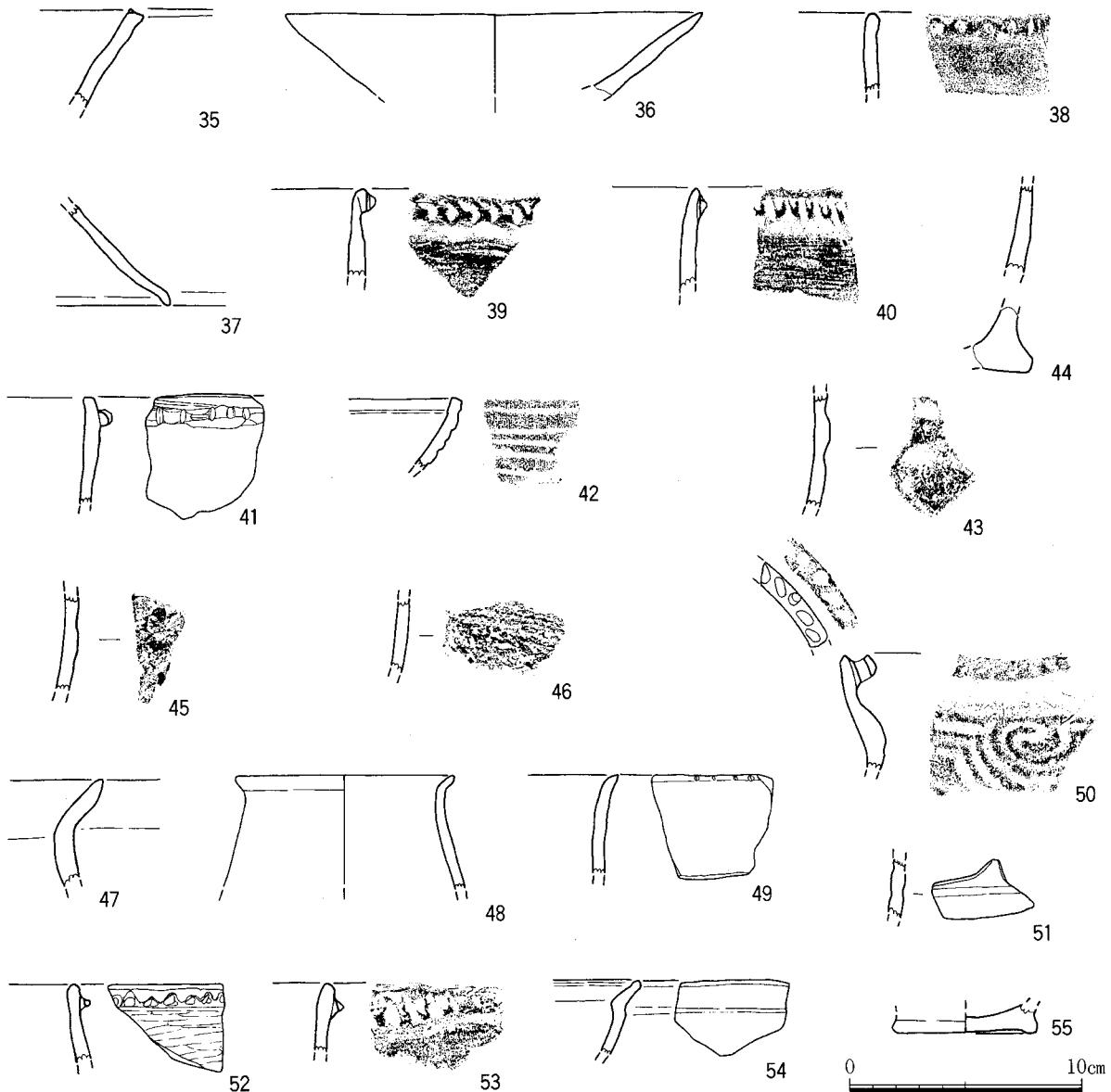


Fig.31 SD9001出土遺物 (1/3)

なく、南壁に近い部分は他遺構に切られることがあって、不明瞭になる。埋土は黒色から黒褐色の粗砂混じり土である。

出土遺物 (Fig.33~38、PL.28・29) 古墳時代前期の土師器が10F区あたりから大量に出土した。廃棄されたもののようにある。

56~60は壺。56は小型壺の底部1/3片。外面細かいハケ後ヘラ研磨。内面はナデで指押さえ痕がある。57はほぼ完形で、口径11.5cm、器高16.6cmを測る。外面上半はハケ、下半はヘラナデ、内面はナデで工具痕が残る。底部近くに径10cm程の黒斑がある。58は小型壺の口縁部小片で、復元口径9.2cmを測る。調整は内外面ナデ。59は口縁から胴部1/3片で、復元口径13.8cmを測る。外面は横ヘラ研磨、内面は横ハケ。胎土は精良。60は胴部1/3を欠失する。口径18.4cm、器高30.7cmを測る。胴部外面はハケ、内面はヘラケズリである。底部付近にススが付着する。

61~103は甕。61~65は小型のもの。61は口縁部1/4片で、復元口径12cmを測る。胴部外面はハケ、内面は粘土の接合痕が残る。62・63は口縁部が外反する。63の口唇部は欠失する。復元口径はそれぞれ16.2cm、16.6cmを測る。内外面ハケである。64は口縁から胴部1/4片で、復元口径15.4cmを測る。

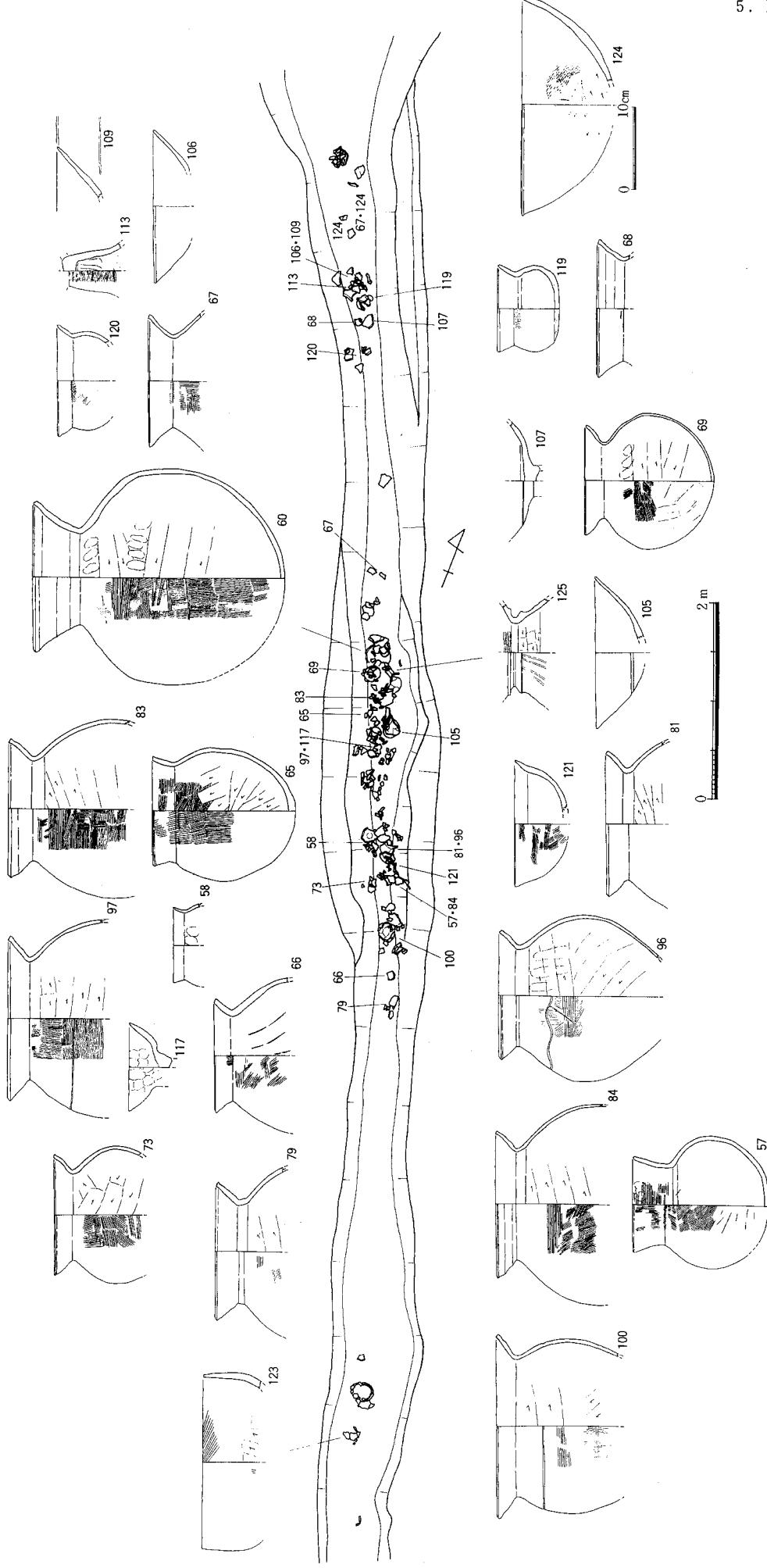


Fig. 32 SD9022 (1/60)

III 調査の記録

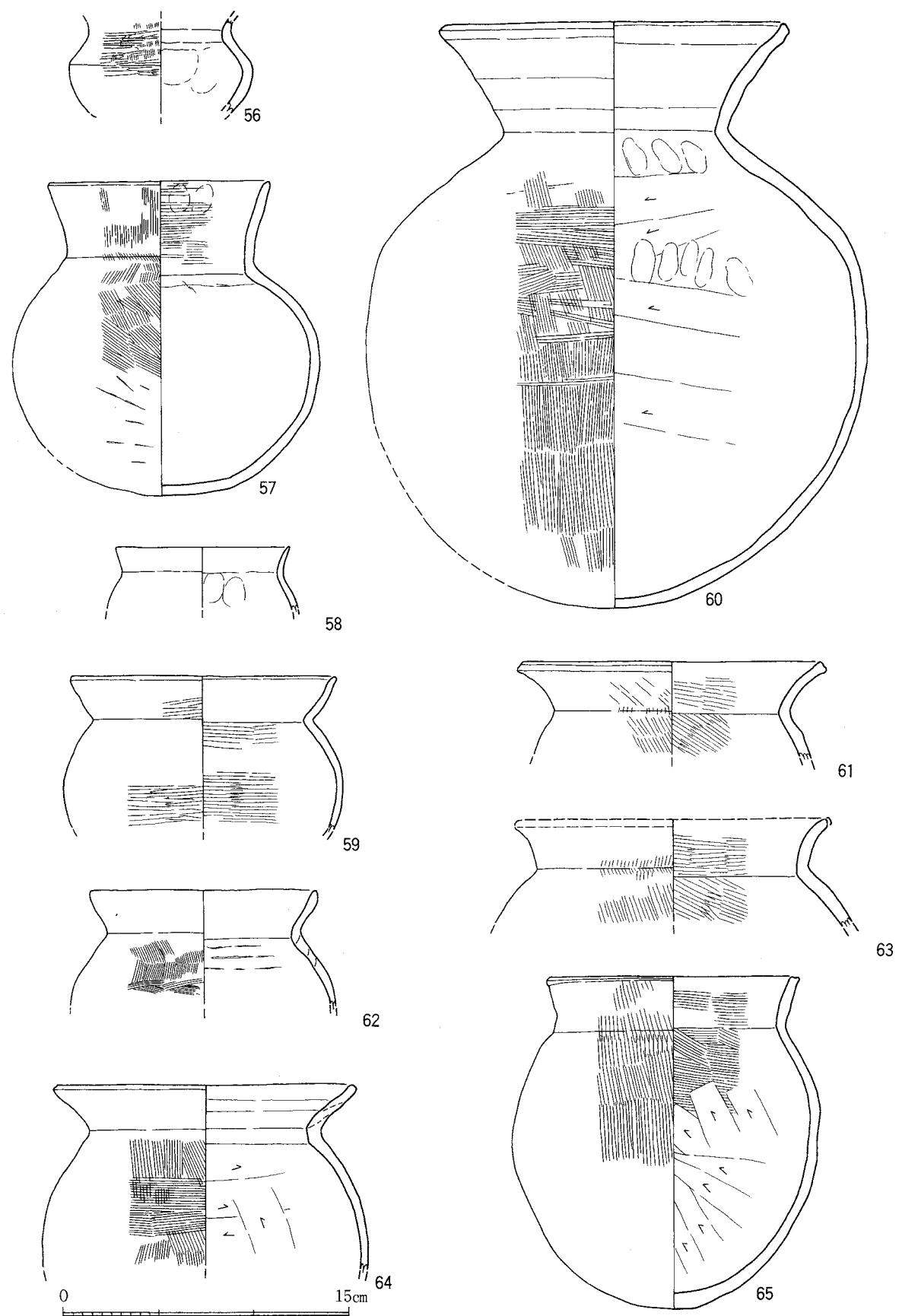


Fig. 33 S D9022出土遺物 1 (1/3)

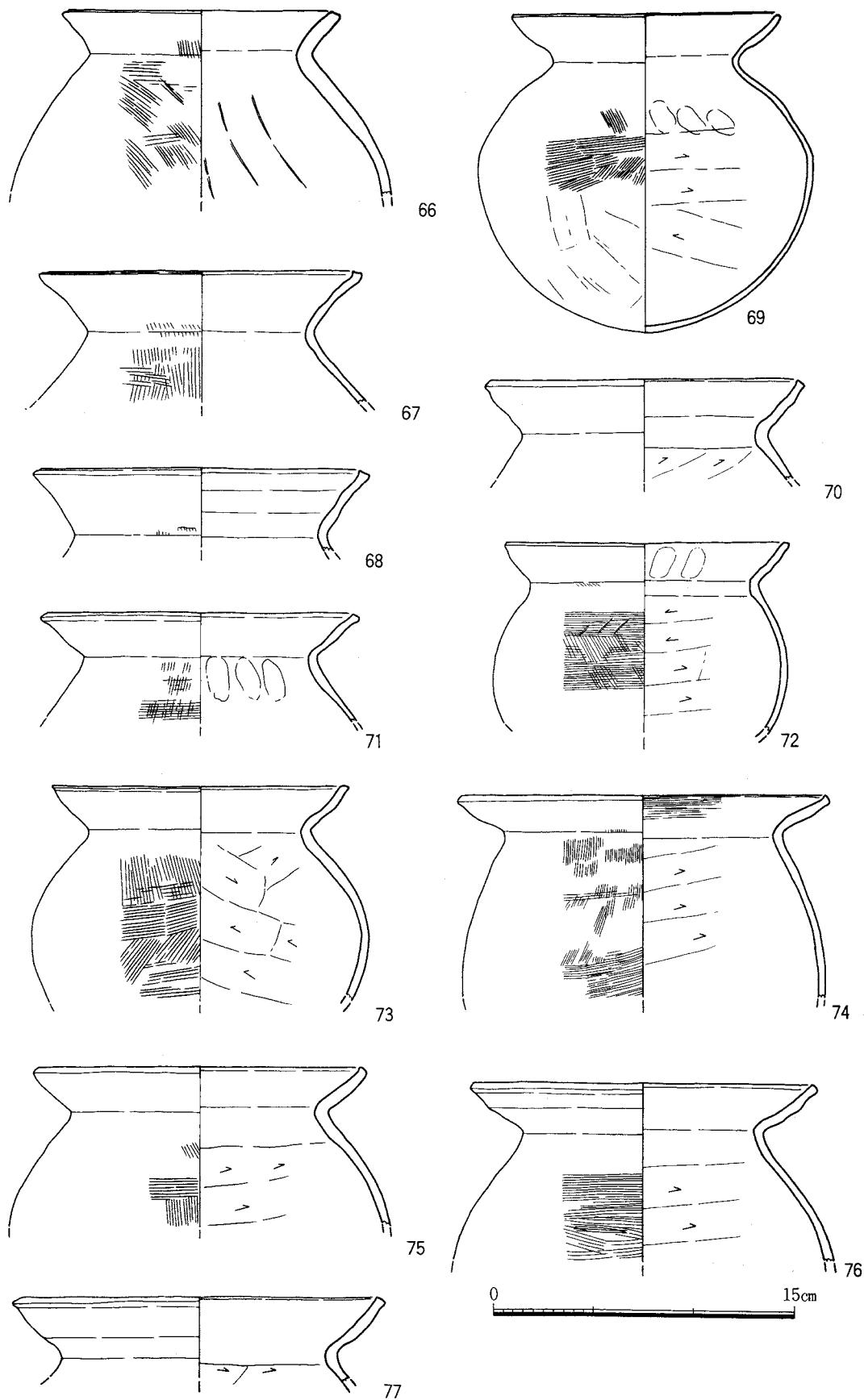


Fig.34 SD 9022出土遺物 2 (1/3)

III 調査の記録

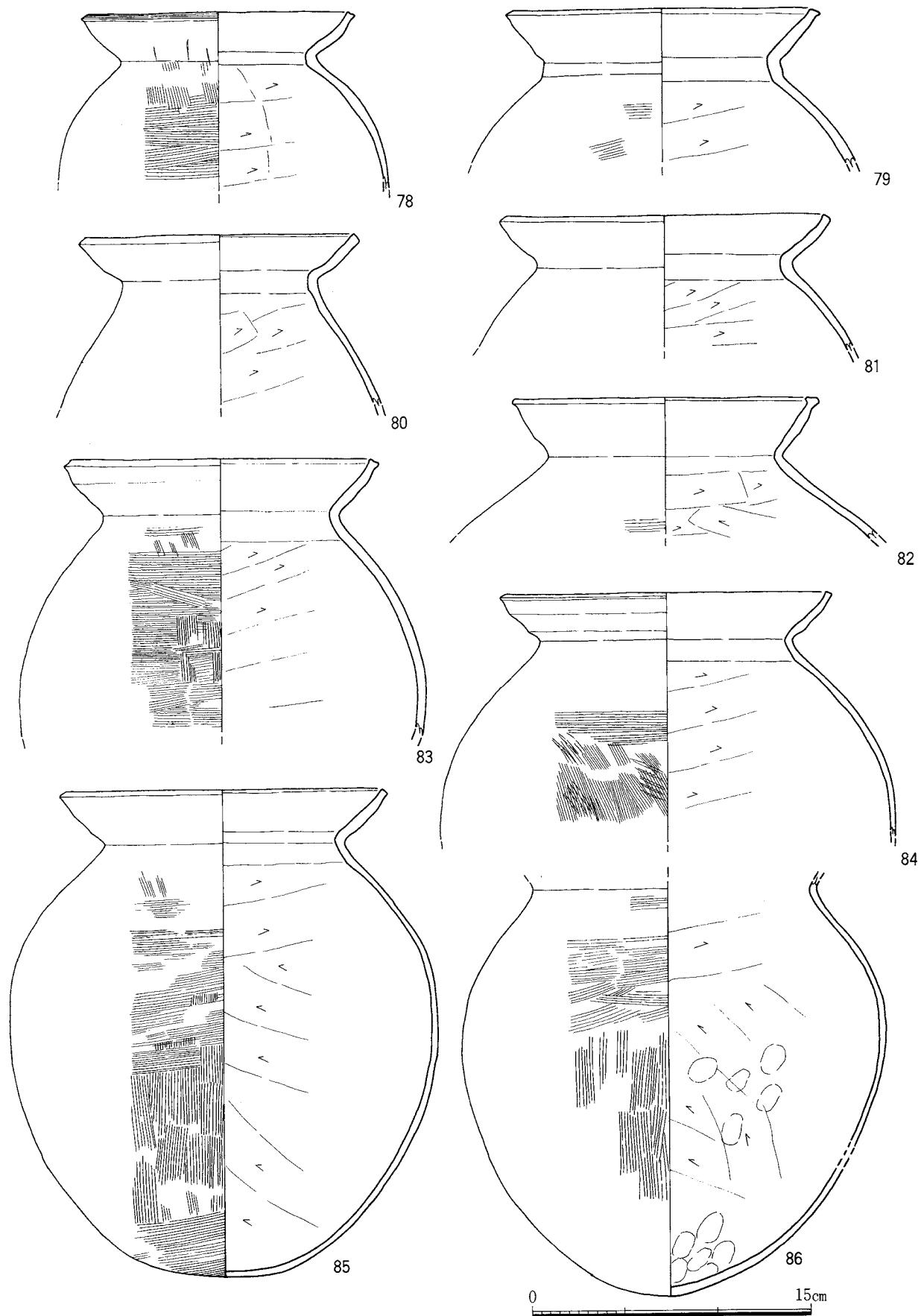


Fig.35 SD9022出土遺物3 (1/3)

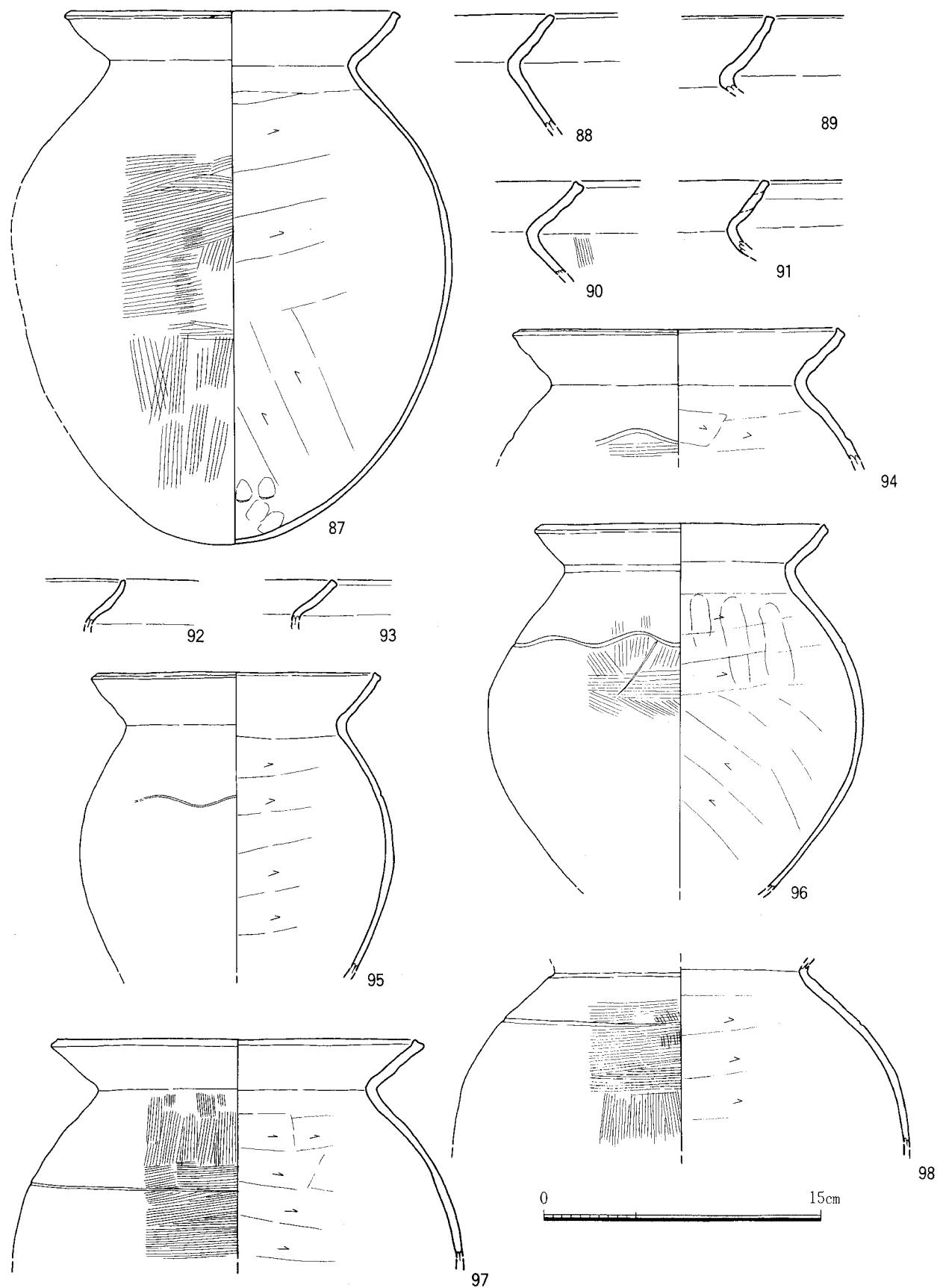


Fig. 36 S D9022出土遺物 4 (1/3)

III 調査の記録

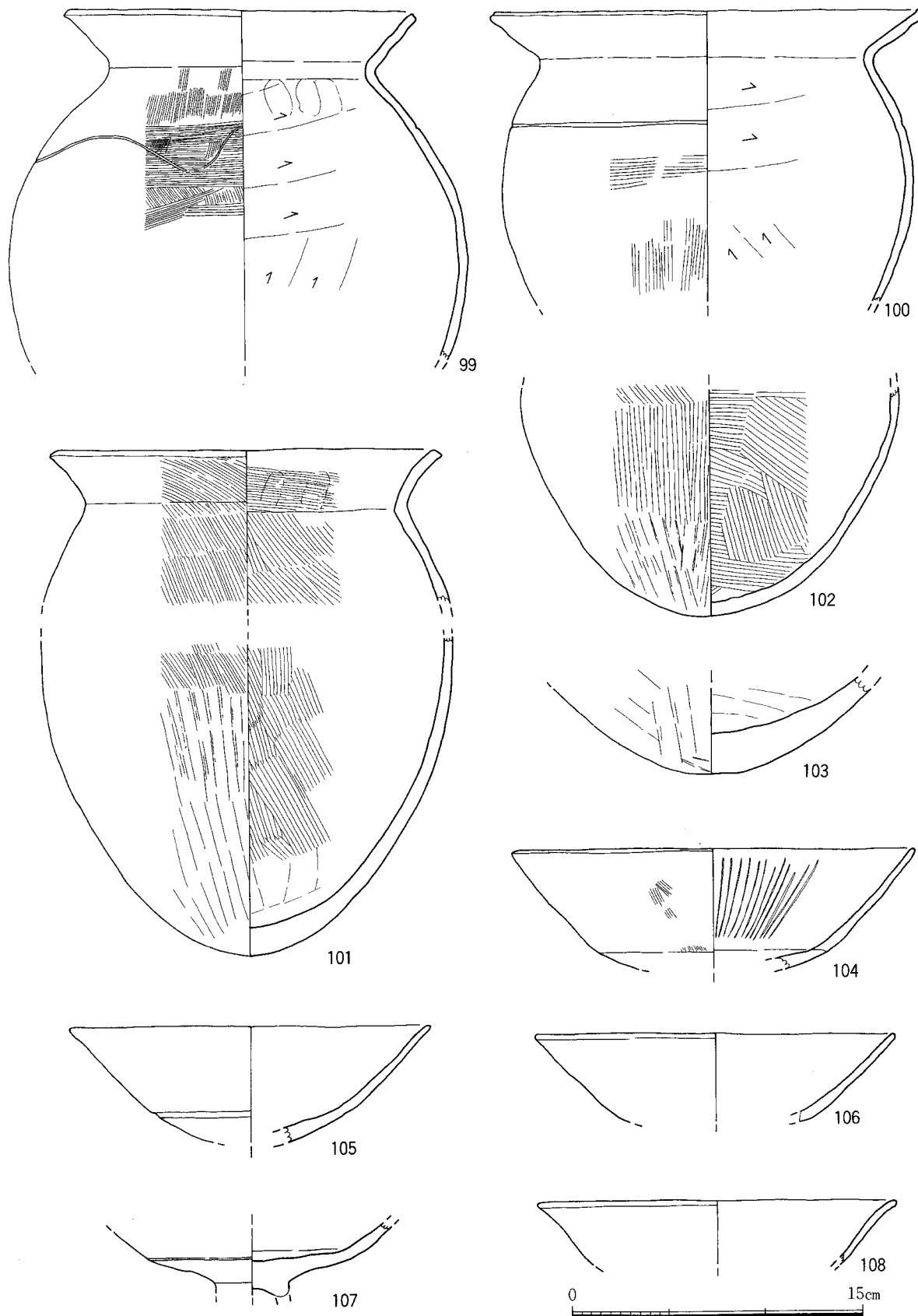


Fig.37 SD9022出土遺物 5 (1/3)

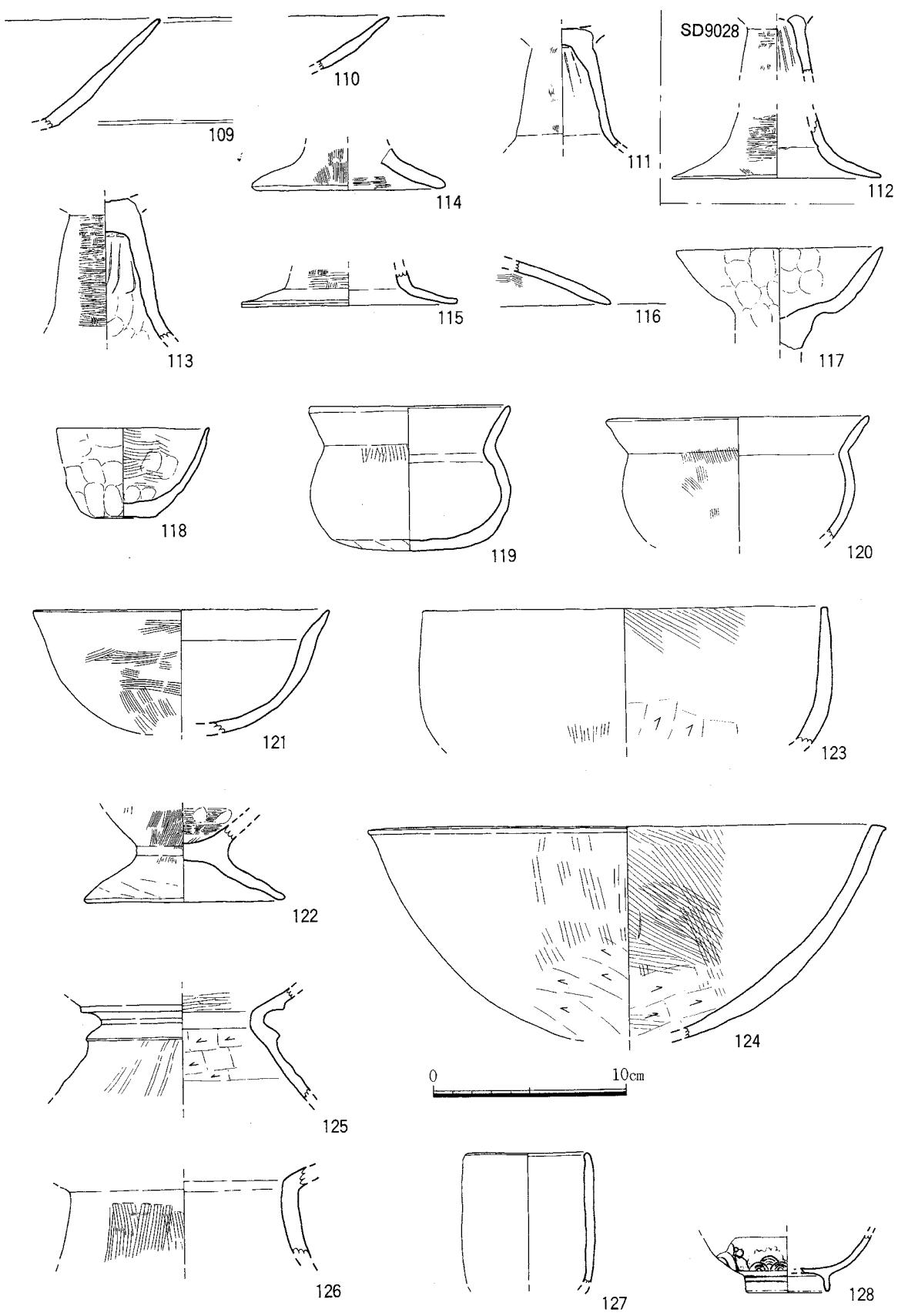


Fig.38 SD9022出土遺物 6 (1/3)

III 調査の記録

胴部外面は横ハケ、内面はヘラケズリである。外面は全面ススで黒い。65はほぼ完形で、口径13.2cm、器高17.4cmを測る。口縁から胴部上半はハケ、下半はナデで部分的にススが付着する。内面も上半はハケ、下半から底部にかけてはヘラケズリである。66は口縁部1/3片で、復元口径13.8cmを測る。頸部が締まる形態で、全体に磨滅がひどいが外面にハケ、内面にナデの工具痕が残る。67・68はなで肩の胴部から口縁部が「く」字状に開く器形である。口唇部内面に段が付く。それぞれ小片、1/6片で、復元口径は16cm、15.6cmを測る。68はハケ後ナデ。69~100は布留式の形態のもの。69は1/2片で、やや横にひしゃげた胴部を持つ。復元口径13.4cm、器高16.6cm、最大胴径16.6cmを測る。胴部外面はハケで、下半はナデ、内面はヘラケズリである。口縁部にススが付着する。70は1/4片で、復元口径16cmを測る。71は1/8片で、復元口径15.8cmを測る。外面はススが付着する。72・73は扁球気味の胴部を持つ1/2片・1/6片で、復元口径は14cm、14.7cmを測る。72の胴部外面には櫛状の刻目がある。74は胴部より開く形態の口縁部片で、復元口径18cmを測る。75は口縁部1/4片で、復元口径16.4cmを測る。76は口縁から胴部1/6片で、復元口径17.2cmを測る。77は口縁部1/6片で、復元口径18.4cmを測る。78は口縁から胴部片で、口径14.6cmを測る。頸部外面にはヘラ状工具痕が残る。79~82は口縁から胴部片である。それぞれ1/4片・1/6片・1/4片・1/6片で、復元口径は16.8cm・15cm・17.8cm・16.4cmを測る。79は胴部が下膨れし、82は口唇部内面に段が付く。83・84は口縁から胴部上半部。83は1/6片で、復元口径は16cmを測る。84は1/4片で復元口径は17.7cmを測る。胴部上半に部分的にタタキ痕と黒斑がある。85は一部欠失するがほぼ完形。口径17cm、器高26.2cm、最大胴径22.8cmを測る。器壁は薄く、外面と内底はススが付着し、黒変する。86は口縁部を欠失する。最大胴径22.5cmを測る。器壁は薄く外面は上半がハケ、下半がナデ、内面はヘラケズリで、指押さえ痕が残る。87は一部欠失するがほぼ完形。口径18cm、器高は28.5cmを測る。器壁は薄く、外面は上半がハケ、下半がナデでススが付着する。内面はヘラケズリで、底部には指押さえ痕が残る。88~93は口縁部小片で、反転復元出来ない。93~100は胴部上半に沈線を1条巡らすもの。波状のもの94~96・99と直線のもの98・100の2種類ある。94は口縁部1/4片で、復元口径18cmを測る。95は口縁部から胴部1/6片で、復元口径14.8cmを測る。胴外面にかすかに浅いハケが残る。96は口縁部から胴部2/3片で、口径15.8cmを測る。波状の沈線の下にヘラ状工具による斜めの刻目が入る。97は口縁から胴部1/5片で、復元口径19cmを測る。外面はススが付着し、黒斑がある。98は頸部から胴部上半部片。99は口縁部から胴部上半部片で、口径18cmを測る。器壁はやや磨滅し不明瞭。外面はごく部分的にススが付着する。100は口縁部から胴部1/6片で、口縁が胴部より開く。復元口径22.2cmを測る。胴部外面に浅いハケが残る。101~103は口縁部が「く」字状を呈す長胴の甕。

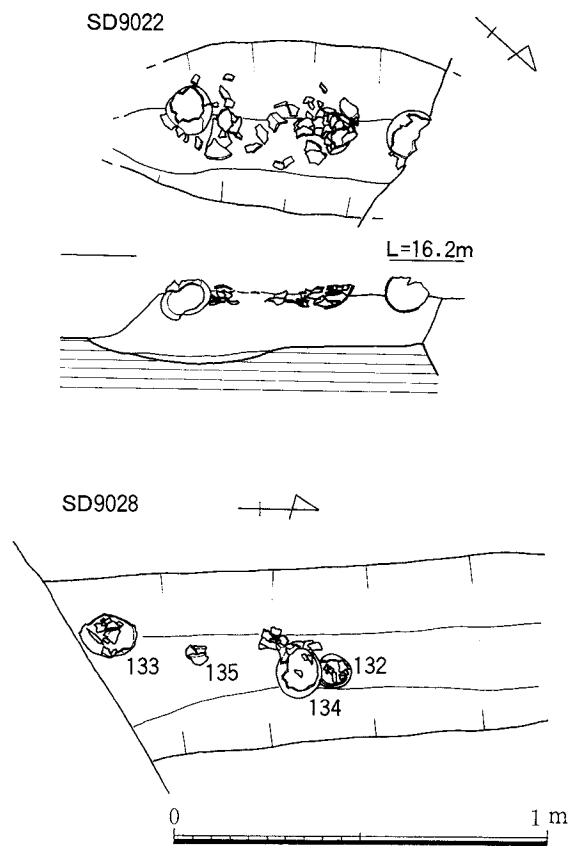


Fig. 39 S D 9022 · 9028 (1/40)

101は口縁部と胴底部片。復元口径20cmを測る。胴部上半まではハケ、外面胴部下半は板ナデ、内底は指でナデつける。102・103は底部片。

104～117は高坏。104～110は坏部片。104は1/4片で、復元口径20.8cmを測る。内面には放射線状の沈線が入る。底部はヘラ研磨。105は1/3片で、復元口径18.5cmを測る。底部と口縁部の境に段を有す。器壁は磨滅し明瞭でないが、外面はヘラ研磨のようである。106は1/2片で、復元口径18.4cmを測る。器壁の磨滅がひどく調整は不明瞭。107は坏底部片で、口縁部との境に段を有す。108は1/8片で、口縁部が軽く外反する。いずれも磨滅がひどく調整は不明。109・110は口縁部小片で、反転復元出来ない。111・113～116は脚部片。111は脚筒部。外面は細かいハケ後ヘラ研磨。113は外面細かいハケ後横方向のヘラ研磨。坏部との接合部に径5mmの浅い窪みがある。114～116は脚裾部片。脚端径は114が10cm、115が復元で11.2cmを測る。115は丹塗りである。117は1/2片。手捏ねで、器台の可能性もある。復元口径10.6cmを測る。全面に指押さえ痕が残る。

118～124は鉢。118は手捏ねのコップ状小鉢2/3片。復元口径7.9cm、器高4.7cmを測る。内面はハケ、外面指押さえ痕がある。119・120は「く」字状の口縁部を持つ鉢。119は1/3片。底部は平底で、外底部はヘラケズリ、内底はヘラナデである。120は復元口径13.7cmを測る。調整はハケ後ナデである。121は1/3片で、復元口径15.4cmを測る。わずかに口縁部が外折し、外面はハケ、内面はナデである。122は脚台部である。脚端径10.4cmを測る。鉢部内面に工具痕が残り、脚部は指ナデである。123・124は大型の鉢。それぞれ1/2片・1/6片で、復元口径は21cm・26.8cmを測る。123は口縁部が直立する器形で、器壁の残りは不良。124は内外面上半はハケ、下半はヘラケズリである。125は鼓形器台1/4片である。脚部外面は横ナデ後暗文風の縦ヘラ研磨、内面はヘラケズリ。口縁部内面は横ヘラ研磨。126は器台の頸部小片。外面はハケ。127はタコ壺型土器1/4片。復元口径6.6cmを測る。調整はナデ。128は近世の染付け碗高台部1/4片。混入品である。

S D 9028 (Fig.39、PL.20-(2)) 9 E区で検出した溝で S D 9011に切られる。確認規模は3.8mで、幅は最大で1m、深さは30cmを測る。埋土は黒色粗砂混じり土である。S D 9022から分岐するもので、北端で立ち上がると考えられる。

出土遺物 (Fig.38・40、PL.29) 古墳時代前期の土師器が出土している。129～131は壺。129・130は複合口縁で、129は口縁部から胴部1/3片、130は口縁部1/3片である。復元口径は14cm、14.4cmを測る。法量はほぼ同じであるが、若干形態が異なるため、別個体とする。131は頸部片で、頸部に三角突帯が1条巡る。132～134は布留式甕。132は口縁から胴部1/6片 復元口径15.6cmを測る。133は胴部片で最大胴径24cmを測る。134はほぼ完形で、口径17.8cm、器高27.8cm、最大胴径24cmを測る。口縁部外面はタタキ後ナデ、胴部外面もタタキ後ハケで、中央部分にはススが付着する。上半に波状の沈線が1条巡る。135は口縁部が外折する鉢で、ほぼ完形。口径10.8cm、器高7.5cmを測る。外面はナデと粗いハケ、内面はヘラの工具痕が残る。色調は131がにぶい橙色の他はにぶい黄橙色である。112は高坏脚部片で、復元脚端径10.8cmを測る。外面細かいハケ後横方向のヘラ研磨。内面に粘土帶接合痕が残る。

S D 9035 (Fig.41、PL19-(4)) 11H区から10C区にかけて蛇行して伸びる自然流路で、S D 9011やS D 9030に切られている。溝幅は1～2.4mと一定せず、深さは35～65cm程で浅い。埋土は上層が黒褐色粗砂礫を主体とし、下層は黄色から灰黄褐色粗砂礫が主体となる。

出土遺物は古墳時代の土師器が少量出土している。細片が多く、図示出来る物もない。須恵器が1点出土している。

S D 9066 (Fig.41) 12H区から12D区に蛇行しながら北に伸びる溝である。溝幅は1.2～1.6m、

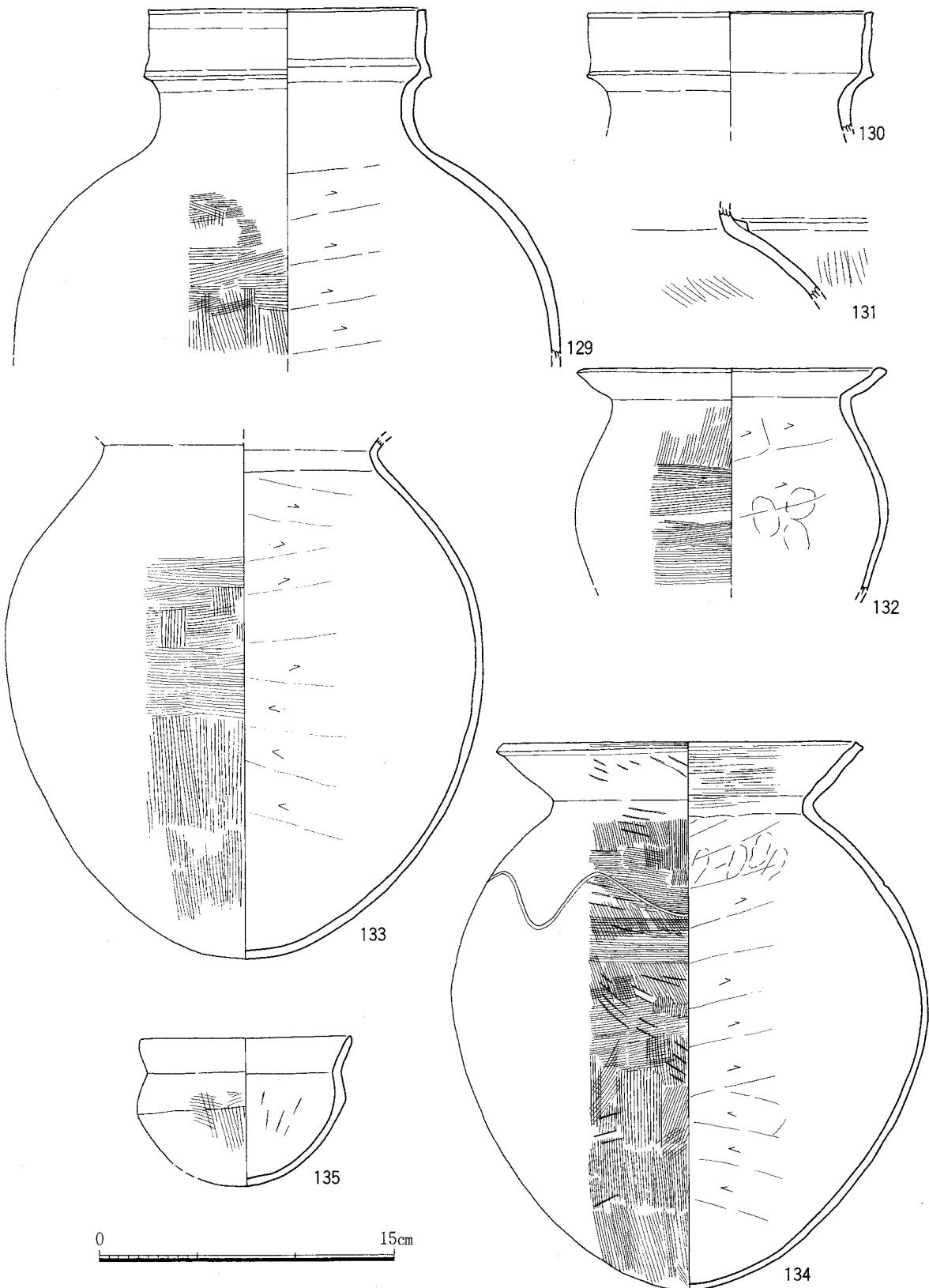


Fig. 40 S D9028出土遺物 (1/3)

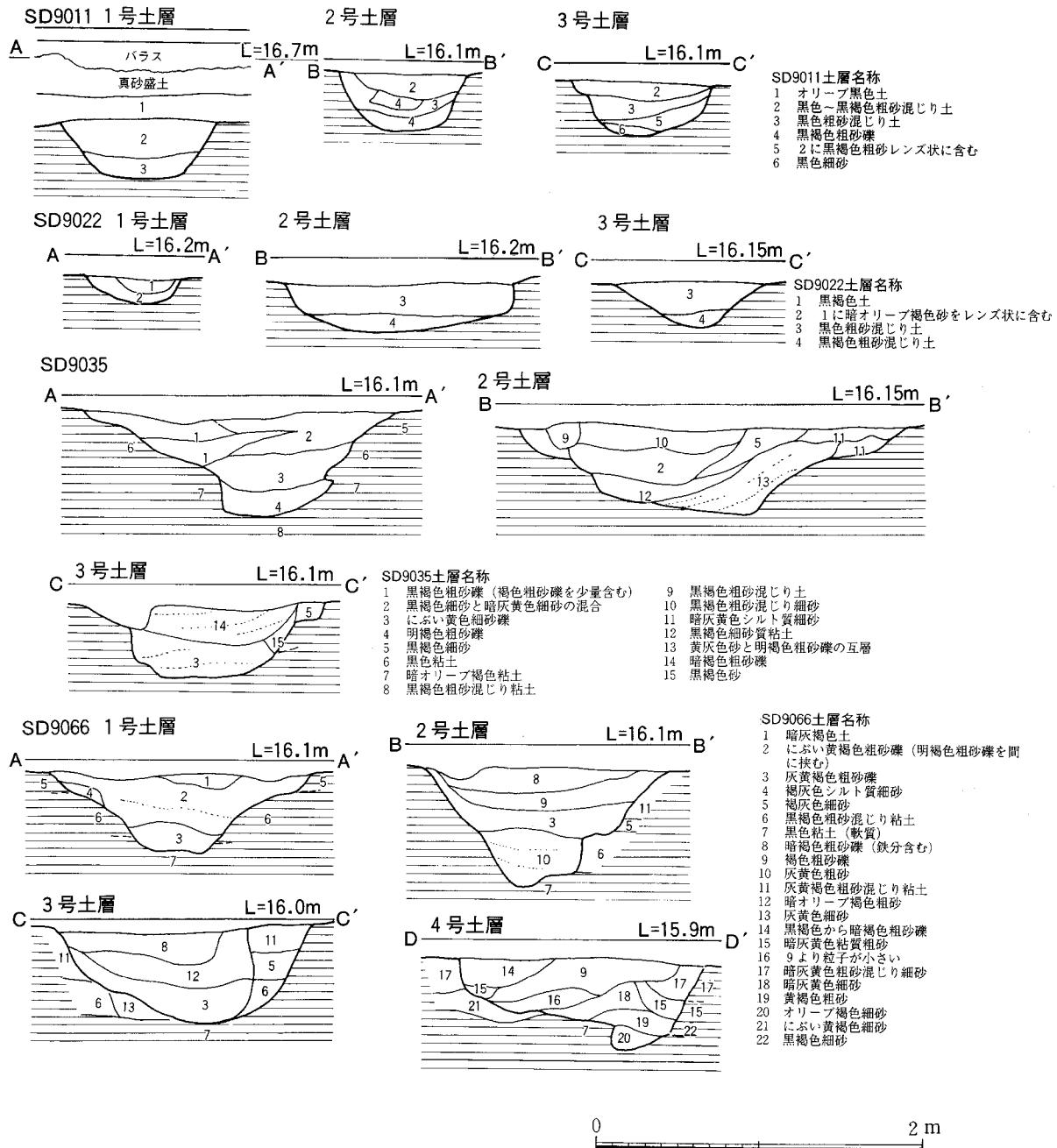


Fig.41 SD9011・9022・9035・9066土層図 (1/40)

深さは60~75cmを測る。上層は暗褐色から褐色粗砂、下層は暗灰黃褐色粗砂から灰黃色粗砂礫となる。

出土遺物 (Fig.43) 近世の遺物が少量出土するが、必ずしも溝の時期を表すものではない。145は近世の染付碗口縁部小片。146は陶器のすり鉢底部片である。

SD9073 (Fig.42、PL.22-(1)) 16 I区~15 F区にかけて蛇行して伸びる小溝である。溝幅は0.9~1.8mと一定せず、深さは20~30cmと浅い。断面を見ると新旧2時期の溝の流れが確認出来る所もある。埋土は黒褐色粘質粗砂混じり土又は砂礫で、底のほうは細砂となる。南壁近くで両側に突出する不定形の張り出しがあり (PL21-(3))、その部分が水田に伴う水口と考えれば、水路の可能性もある。

出土遺物 (Fig.43) 繩文土器から弥生土器などが少量出土している。147・148は繩文土器の口縁部小片。147は粗製の深鉢で、内外面条痕を施す。

SD9076 (Fig.42、PL.22-(3)) 調査区東隅は35cm程の深さで段落ちし、その面で確認した。溝

III 調査の記録

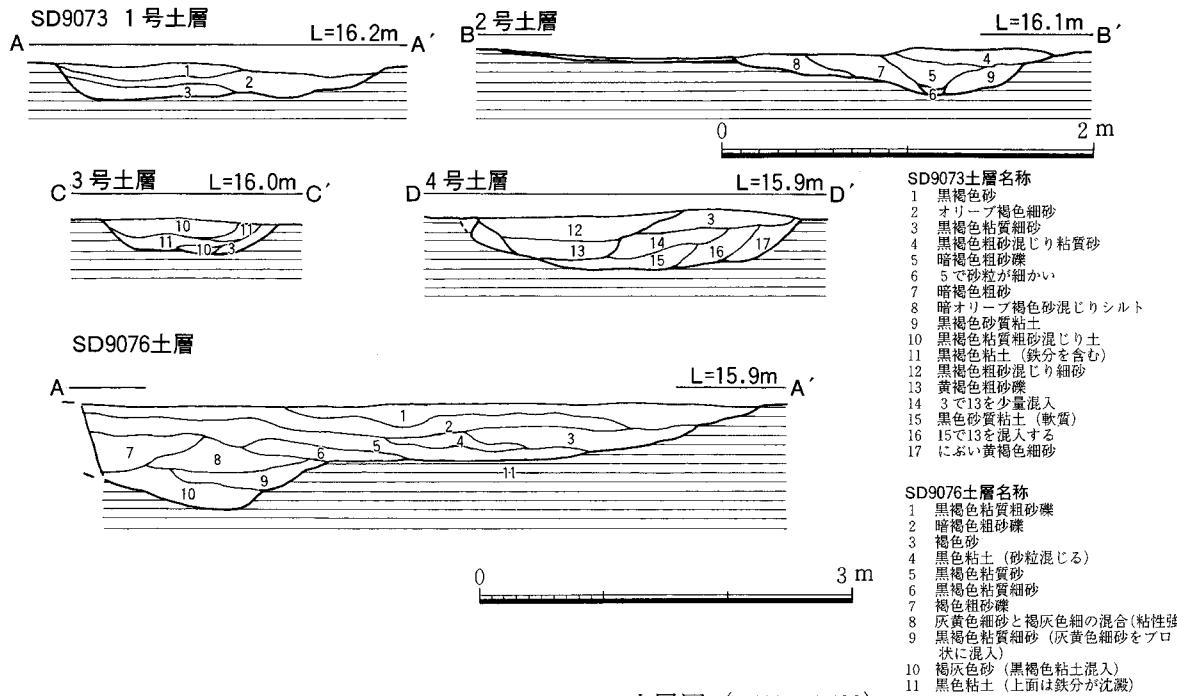


Fig.42 SD9073・9076土層図 (1/40・1/60)

幅2.4～3.4m、深さは70cm程を測る。埋土は粗砂疊と細砂が主体で、部分的に黒褐色の粘土を混入する。

出土遺物 (Fig.43) 繩文土器などの小片が少量出土しているが、混入か近世陶器片が1点含まれる。150は縩文土器の粗製の深鉢口縁部小片。外面斜めの条痕を施す。

その他の溝出土遺物 (Fig.43、PL.30)

139はSD9023出土の須恵器の甕口縁部小片。外面にはヘラによる刻目が入る。140はSD9027出土の縩文晚期の浅鉢小片、精製で内外面ヘラ研磨。141・142はSD9045出土。141は須恵器の甕底部小片。内面同心円状の当て具痕、外面平行タタキを加える。142は近世の白磁蓋小片。143はSD9046出土の龍泉窯系青磁碗細片。144はSD9058出土の縩文土器の口縁部小片。深鉢か。149はSD9074出土の土師質土器すり鉢口縁部小片。内外面ナデ調整で、内面に下ろし目が残る。胎土は精良。151・152はSD9083出土。151は須恵器坏蓋小片。7世紀代のもの。152は唐津焼きの碗小片。復元底径5.6cmを測る。内底には砂目痕が残る。緑灰色釉がかかるが、発色は余り良くない。17世紀前半であろう。153はSD9087出土の白磁碗口縁部小片。わずかにオリーブ色の透明釉がかかり、口縁部は端反りである。154～156はSD9093出土。154は縩文土器深鉢口縁部小片。外面横方向の条痕を施す。155は縩文土器の胴部片か。色調はにぶい橙色を呈す。156は縩文土器の胴部小片。157・158はSD9095出土の縩文土器。157は深鉢口縁部小片。内外面ナデ。158は胴部小片で外面は条痕を施す。159はSD9096出土の縩文土器胴部片。外面粗い条痕を施す。160～162はSD9097 (PL.22-(2)) 出土の縩文土器。160は深鉢の口縁部小片。外面は横方向の条痕を施す。161は胴部小片。162は底部小片である。163はSD9098出土の縩文土器底部小片。内外面雑なナデ。164はSD9098出土の縩文土器片。外面沈線状の条痕を施す。165はSD9104出土の縩文土器胴部小片。166はSD9111出土の縩文土器底部小片。復元底径9.4cmを測る。ナデであるが雑な調整。色調はにぶい黄橙色、胎土は粗砂を多く含む。

その他の遺構 (PL.14-(2))

調査区西側9～11区にかけては2m間隔位で南北に伸びる小溝があり、農地に伴う溝と考えられる。

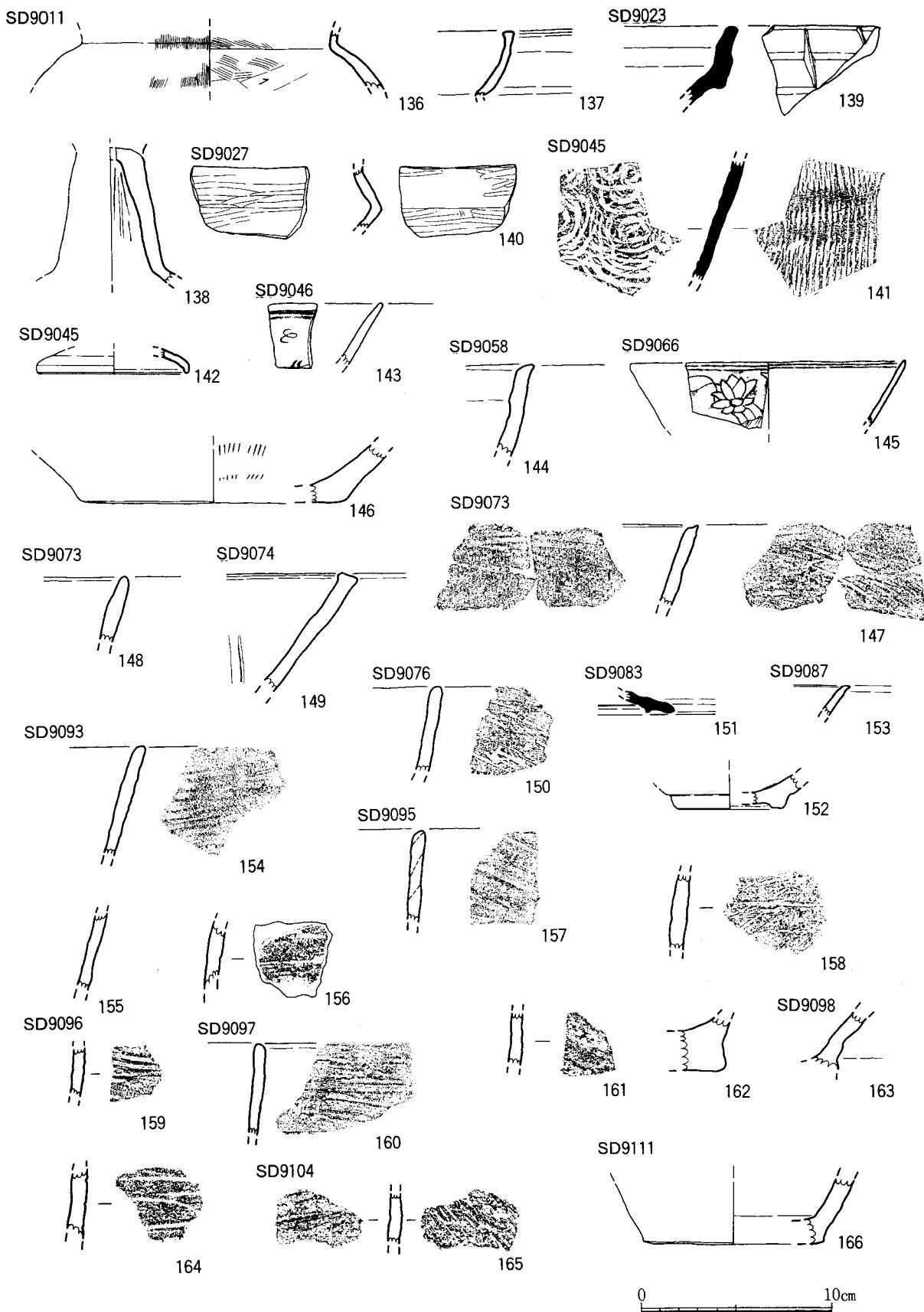


Fig.43 各溝出土遺物 (1/3)

III 調査の記録

また10・11区の北側にはSD 9045・52・59など幅0.5~1mほどの溝で、内法18×12mの規模で長方形に囲まれる部分がある。その中にはSD 9046~50・53~56・58・60・61などの小溝がある。埋土は黄灰色粗砂混じり粘土で、下層に黒褐色粘土ブロックを混入する。遺物は少ないが近世の陶器碗片などを含み、また埋土が灰味を帯び、鉄分を含むことから、近世以降の畑などの農地の跡と考える。

足跡の調査 (Fig.44、PL.20-(5)・21-(1)・(2))

西側8~11区にかけて、遺構面上に粗砂が薄く堆積していたため、粗砂を取り除いた所、足跡群や小さな不定形の落ち込み、直径10cmに満たない円形の株痕のような痕跡群を検出した。足跡群は南から北に続くものが多く、10・11区では牛と思われる足跡もある。ただ水田遺構などの可能性も考えたが畦畔などは確認出来なかった。上記した南北溝群との関連もあるのかも知れない。8・9区では上面足跡の下の第2面から溝状遺構などが出土している。

③ 第2面の調査 (付図1、PL.23・24)

第1面の調査終了後、だめ押しの調査も兼ねて、場所によって変わるが安定した基盤、西側では黒色粘土または黒褐色粗砂混じり粘土、東側では暗灰黄色粘土や黒褐色粘土面まで下げる遺構の確認を行った。その結果、溝状遺構やピットなどを検出した。また各壁下には排水溝も兼ねてトレーナチを設定し、可能な限り掘り下げ、各壁の全体土層図 (Fig.19・20、PL.25) を作成した。遺構については主なものを記述する。

溝状遺構

SD 9110~114 (Fig.44、PL.21-(4)) 8・9区の南側で検出した小溝である。9G区から北西に伸びるSD 9111の北側に逆「く」字状を呈して伸びるSD 9110があり、SD 9111の南側で北に並行して伸びるSD 9112がある。またSD 9111の南西側には1~1.4mの間をおいて並行に伸びる溝SD 9114がある。溝幅はSD 9110が0.3~0.8m、SD 9111が0.7~2.4m、SD 9112が0.7m位、SD 9113が0.2~0.4mを測る。深さは最大でも20cm位で浅く、底面は凹凸が激しく、足跡のような窪みも多数確認出来た。

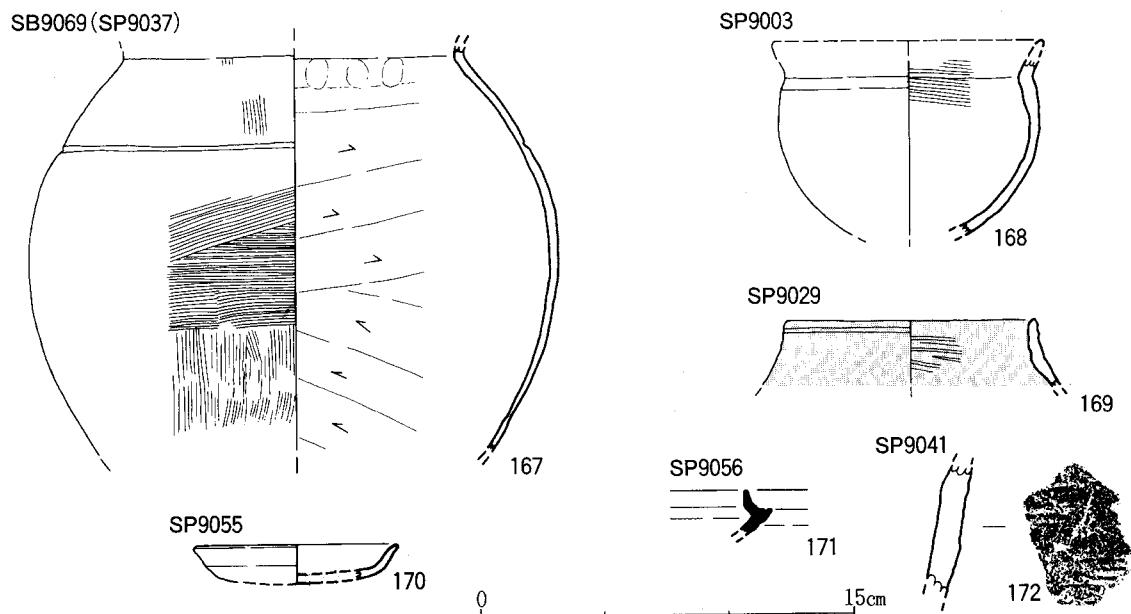


Fig.44 柱穴・ピット出土遺物 (1/3)

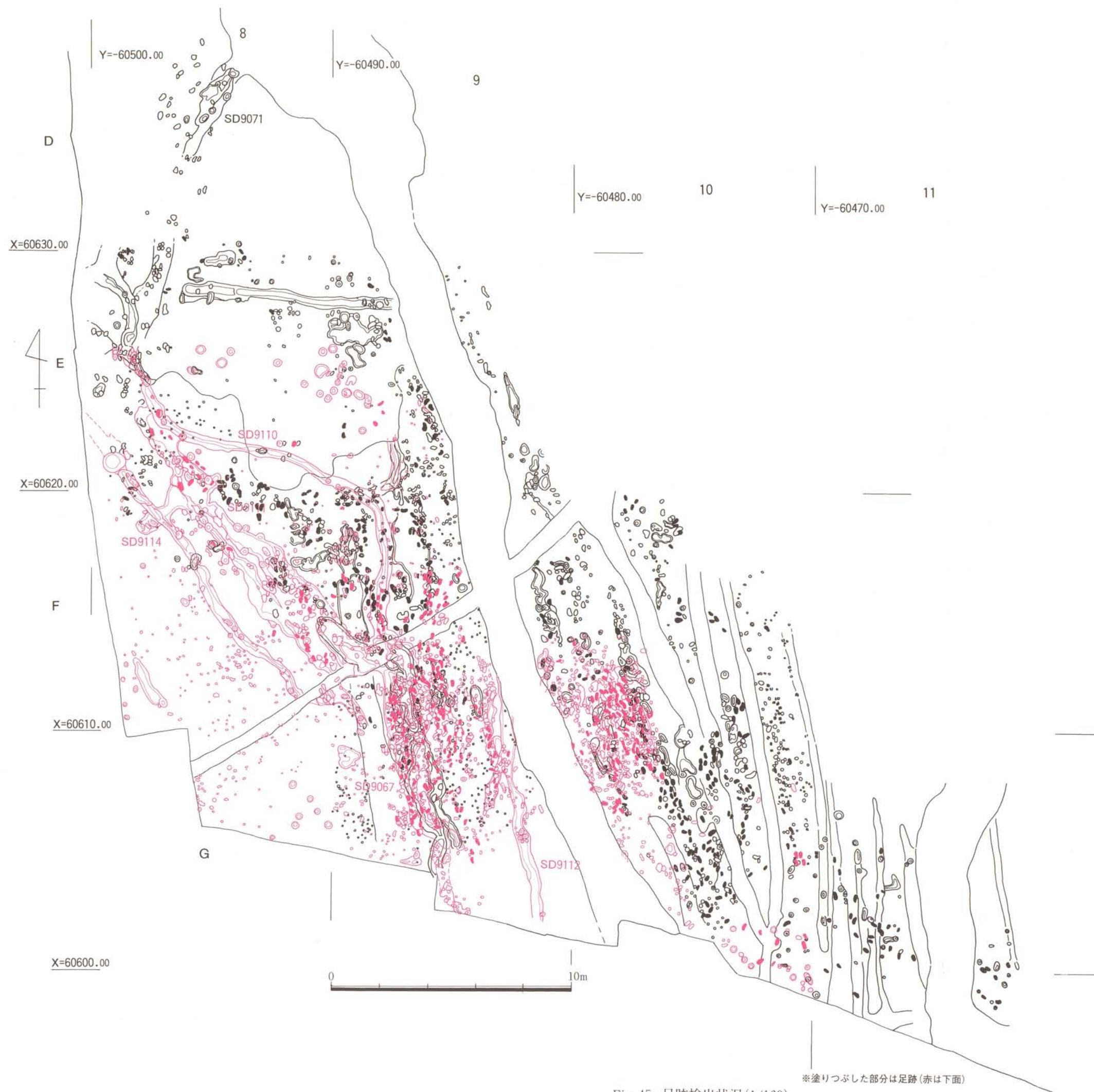


Fig. 45 足跡検出状況(1/160)

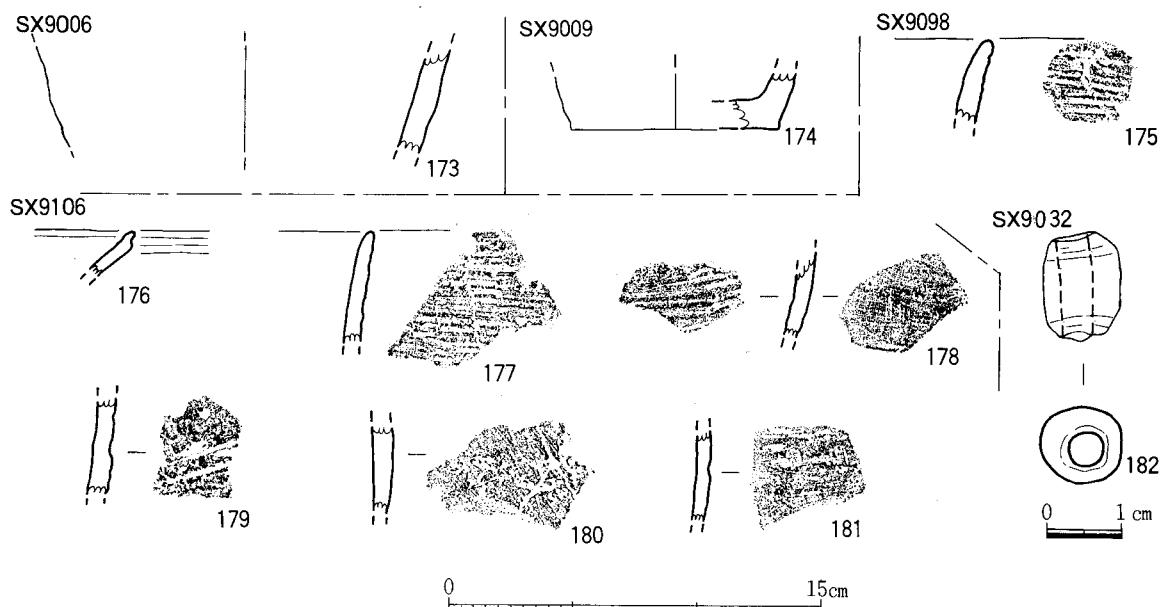


Fig. 46 不明土坑 (SX) 出土遺物 (1/3 · 1/1)

溝の埋土は粗砂礫である。SD9111とSD9114の間の部分は道のような部分であろうか。出土遺物は縄文土器片などの細片が少量出土しているが、近世染付1点と古墳時代土師器片らしきものもある。

SD9104 12H区からD区にかけて検出した蛇行して北に伸びる溝である。SD9066の東側を並行する溝で、9066より時期的に古いものであろう。埋土は暗褐色オリーブ粗砂礫で下ほど粒子が粗い。出土遺物は縄文土器の細片と黒曜石の石鏃や剝片などが少量出土している。

その他の遺構出土の遺物

ピット出土遺物 (Fig. 45)

168はSP9003出土。土師器の鉢胴部1/4片。外折する短い口縁部を持つ。胴部外面はハケ状工具のナデで、黒変している。169はSP9029出土。弥生土器の小壺の口縁部小片。復元口径10cmを測る。内外面丹塗りである。170はSP9055出土。土師器の皿1/6片で、復元口径8.2cmを測る。内外面ナデ。色調は淡橙色、胎土は精良。171はSP9056出土。須恵器の壊身小片。小田富士雄氏の須恵器編年IV期のもの。172はSP9041出土。縄文土器深鉢胴部小片。外面は横方向の条痕を施す。

不明土坑 (SX) 出土遺物 (Fig. 46、PL. 30)

173はSX9006出土。縄文土器深鉢の胴部小片。調整はナデで、色調は橙色を呈し、胎土は粗く、粗砂を多く含む。174はSX9009出土。縄文土器と思われる底部1/5片。磨滅がひどく調整は不明瞭。色調は淡黄色を呈し、胎土は粗い。175はSX9098出土。縄文土器深鉢の口縁部小片である。外面は横の条痕、内面は横ヘラ研磨。色調は灰黄褐色を呈す。176～181はSX9106出土。いずれも縄文土器小片。176は浅鉢の口縁部片で、横ヘラ研磨。177は深鉢口縁部片。外面横の貝殻条痕を施す。178～181は胴部小片。調整は条痕を施すものが178・179・180、工具でナデるものが181である。色調は178・181がにぶい黄橙色、179が灰黄色、180が赤褐色を呈す。182はSD9001上面のSX9032出土。濃紺色を呈すガラス玉である。一部欠失するが、全長1.5cm、直径0.8～1.1cm、孔径は0.4cmを測る。

遺構面出土遺物 (Fig. 47、PL. 30)

183～191は第1面出土である。183は18I区出土。陶器碗高台部小片。復元高台径4.3cmを測る。オリーブ灰釉がかかる。見込みは蛇の目状に釉を搔き取りし、高台部は露胎。184は土師器甕口縁部1/2片。復元口径17cmを測る。色調はにぶい橙色を呈す。185は須恵器甕胴部細片。186～191は縄文土器胴部

III 調査の記録

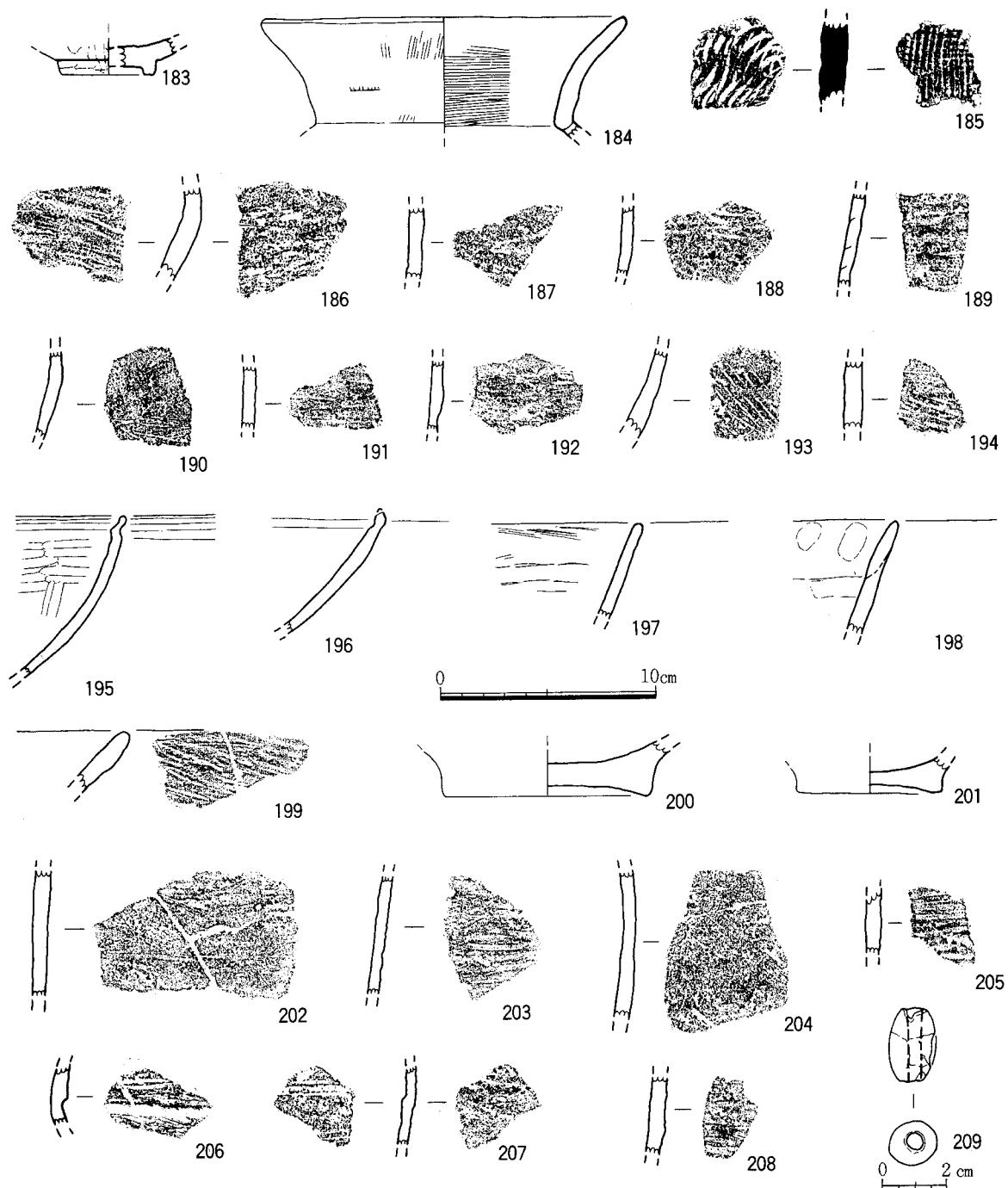


Fig.47 遺構面出土遺物 (1/3・1/2)

小片。186は8D区、187・190・191は14G区、188は12E区、189は13E区出土。いずれも外面は条痕かナデを施す。192は13E区出土の縄文土器胴部小片。外面はヘラナデである。

193～208は第2面出土。193・194は遺構面出土。14F区・12E区出土の縄文土器小片である。いずれも外面は条痕を施す。195～208は標高が一番高い10区の第1面下の黒褐色粘土中から出土した縄文土器。195～199は口縁部小片。195・196・199は10F区出土、197・198は10G区出土である。195・196は晩期の鉢口縁部片。いずれも内外面はヘラ研磨。197は内面は条痕後研磨、198は全面ナデ、199は斜めに条痕を施す。色調は195・197が灰黄橙色、196は灰黄褐色、198・199は黄橙色を呈す。200・201

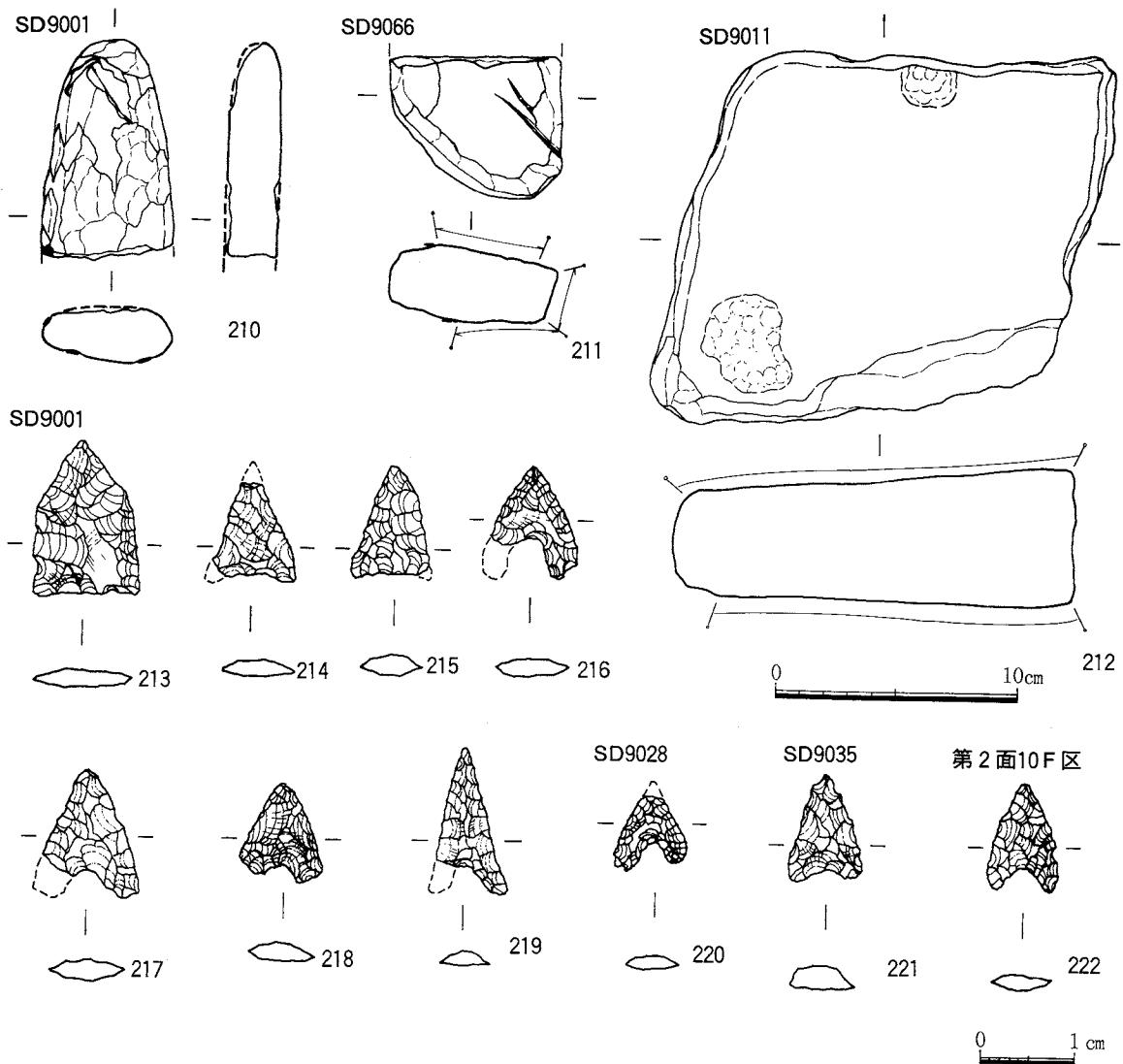
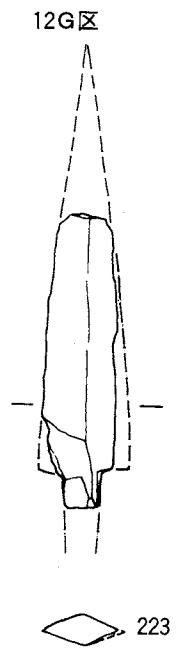


Fig.48 各遺構出土石器 (1/3・2/3)

は10F区出土の底部片。200は1/2片で復元口径は9.5cm、201は6.8cmを測る。いずれもナデ調整。色調は橙色、淡黄橙色である。202～208は胴部片。203が10G区出土以外は10F区出土。いずれも粗製の深鉢のようで表面の調整は条痕かナデである。色調は202が黄褐色、203が灰黄色、204は黄褐色、205はにぶい黄橙色、206はにぶい橙色、207は灰褐色、208は黄褐色を呈す。209は9F区出土の土錐である。一部欠失するが全長2.4cm、直径1.1～1.5cm、孔径0.4cmを測る。指押さえ仕上げである。

各遺構出土石器 (Fig.48、PL.30)

210はSD9001下層から出土した縄文時代の磨製石斧である。刃部を欠損する。研磨仕上げであるが表面は欠損が著しい。残存長9cm、最大厚2.2cmを測る。211はSD9066出土の砥石片。上下、右側面を砥石として使用している。石材は砂岩で目は比較的細かい。残存長5.9cm、幅7cmを測る。212はSD9011出土の作業台石。石材は花崗岩で上下両面は使用で磨滅している。最大長16.5cm、最大幅15cm、厚み5.5cmを測る。213～223は石鏸。213～219まではSD9001出土。220はSD9028、221はSD9035、222は第2面10F区出土である。いずれも無茎の打製石鏸である。石材は214・217・219が安山岩で、他は黒曜石である。全長は3.2cm・2.0cm・2.3cm・2.35cm・



III 調査の記録

2.7cm・2.0cm・3.05cm・1.6cm・2.3cm・2.25cmを、厚みは0.3~0.5cmを測る。223は12G区で出土した朝鮮系の有柄式磨製石鎌である。残存長5.9cmを測る。鎌断面は菱形を呈する。研磨仕上げであるが表面は磨滅剥落がひどい。石材は砂岩である。

6. 小結

各小区について成果を簡単にまとめて小結としたい。

VI区では調査としては3面の調査を行ったが、第1面が中心となる。出土遺物が少ないので時期の判断は難しいが、SK6005やSD6001、北壁などの出土遺物から見て古墳時代中期が主体である。SK6005は5世紀前半で、形態から見て井戸の可能性がある。井戸とすれば後世にかなり削平を受けている。下層の2面の遺構は上面の掘り残しもあり、また出土遺物もなく、時期ははっきりしない。溝は自然流路であろう。

VII区は調査範囲が狭く、時期も遺構の性格も明確でない。しかし遺構はVI区との続きであり、時期的にも同時期のものであろうか。

VIII区は西側で溝を確認した。溝の時期はSD8003が出土遺物からみて中世である。糸切りの土師器壺や中国産白磁、竜泉窯系青磁などから見てから13世紀位であろう。SD8004は8003に切られることからそれよりも古い。奈良時代の須恵器を含むことから、古くても8世紀代であろうか。野芥大藪遺跡跡I区では溝と井堰、IV区でも奈良から平安時代の遺物が出土している⁽¹⁾。IV区以東は該期の遺物が確認出来ず、古代の遺構は主にVIII区から西側に分布する可能性がある。

IX区は2面ないし3面を調査したが、主体は上面の第1面である。時期的には古墳時代から近世までである。溝SD9001は下層は縄文時代晩期末の遺物を含むが、上層では古墳時代の土師器を少量含むことや5世紀代の住居跡SC9025に切られることから、古墳時代中期には埋没していた。粗砂が主体であることから、たびたび洪水などがあったのであろう。生活遺構が確認できたのは古墳時代だけであり、三雲遺跡の柳田康雄氏編年のIIa~b期⁽²⁾、4世紀の中頃から後半に位置づけられるSD9022・9028やSC9051、それに続くSC9030、5世紀代でも新しい時期のSC9025など、前期から中期にかけての集落を確認した。当地点から南約200mほど離れた第8地点でも、4世紀前半から6世紀初めにかけての溝や祭祀遺構が調査されている⁽³⁾。ほぼ同時期の遺構・遺物であり、該期の集落が北に細長く延びている事が考えられる。遺構面に粗砂が被ることから分かるように、集落の立地基盤は脆弱で、生活地には余り適していない。集落が営まれたのは一時的で、野芥大藪遺跡第1次調査のI区で見られるように、奈良時代以降は水田化していったと考えられる。野芥遺跡第4次調査地点のような東側の丘陵部に集落が移動していくのであろうか⁽⁴⁾。調査区東側で行ったプラント・オパール調査の分析では、中世から古墳時代の層でイネのプラント・オパールが検出された。明確な水田遺構は確認出来なかったが、水田の存在が考えられる。第2・3面は古墳時代以前から縄文時代にかけてである。縄文時代の遺物は晩期末のものが多く、周辺にまたはかって生活遺構があつたことが考えられる。

今回の調査では古墳時代の集落の確認、遺跡の北への拡大の確認などで成果をあげる事が出来たが、紙面の都合上、十分な考察を加える事が出来ず、不十分なまとめとなってしまった。詳細な遺跡の検討については将来に委ねたい。

註

(1) 福岡市教育委員会『福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告-4-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第581集 1998

(2) 柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古希記念 古文化論集』1982

(3) 福岡市教育委員会『野芥遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第576集 1998

(4) 福岡市教育委員会『野芥遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第575集 1998

付論1. 福岡市野芥大藪遺跡における古環境変遷

北九州大学文学部 野井 英明

はじめに

野芥大藪遺跡は、福岡市の早良平野に位置する縄文時代から近世までの長期間に亘る遺跡である。早良平野は、中央を南北に貫流する室見川と、その支流や十郎川によって形成された扇状地と沖積地から形成される平野である。野芥大藪遺跡において、縄文時代は、この扇状地と沖積地がまさに形成されつつある時期にあたっており、蛇行河川がしばしば流路を変えながらこの地域を流下していた。その結果、縄文時代の遺物の多くは、これらの蛇行河川を埋積した堆積物中から検出される（福岡市教育委員会、1998）。

本論では、野芥大藪遺跡における縄文時代の埋没河川堆積物の花粉分析を行い、この時代の古環境について考察した。

試 料

花粉分析に用いた試料は、第1次調査第1区のSD0149(Fig. 1)とよばれる縄文晩期の埋没河川堆積物から採取した。試料は、5 cm間隔で52点採取したが、最終的に分析を行ったのは、それらのうち10cm間隔の25点である。各試料は、水酸化カリウム水溶液処理、塩化亜鉛水溶液による重液分離、アセトトリシス処理の順に処理を行い花粉化石を抽出した。抽出した花粉化石は、グリセリンジェリーで封入し、顕微鏡(×400)を用いて、検鏡・同定した。最上部から下位へ20cmの部分の2点の試料では、花粉化石は保存が悪くほとんど検出されなかつたが、それ以下の23点からは分析に十分な量が検出された。結果は樹木花粉の総数を基数とした各分類群の百分率を求め、ダイアグラムで示した(Fig. 2)。

結 果

木本類は、シイノキ属、アカガシ亜属が合わせて80%以上に達し優占する。マツ属とヤナギ属が10数%、コナラ亜属が数%ずつ連続して出現する。これら以外には、モミ属、ツガ属、ナギ属、ハンノキ属、シデ属、コナラ亜属、ニレ属・ケヤキ属、カエデ属などが検出されるが、ともに低率で、散発的である。草本類は、イネ科とヨモギ属が高い出現率を示す。とくにヨモギ属は、上部で樹木花粉に対して100%以上の頻度を示す。ほかにカヤツリグサ科、ヨモギ属以外のキク科、ガマ属、セリ科などが連続してみられる。ほかには、アカザ科、ワレモコウ属、カラマツソウ属などが検出される。

野芥大藪遺跡の第1次調査においては、今回の分析試料と同時期と考えられる埋没河川堆積物中の自然材の樹種と、種実遺体の同定が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1998）。それによると、自然材の樹種では、ヒノキ、マキ属、カエデ属、アカガシ亜属、クマシテ属、ノグルミ、ムクロジ、センダンが、種実遺体では、カヤ、イヌガヤ、イチイガシ、アカガシ亜属、ムクノキ、バリバリノキ、クスノキ科、センダン、シキミ、アカメガシワ、ムクロジなどが記載されている。これらと、今回の花粉分析の結果を比較すると、自然材の樹種記載とはよく一致するが、種実遺体では記載されていて、花粉分析では記載できていないものもみられる。

IV 付論1 福岡市野芥大藪遺跡における古環境変遷

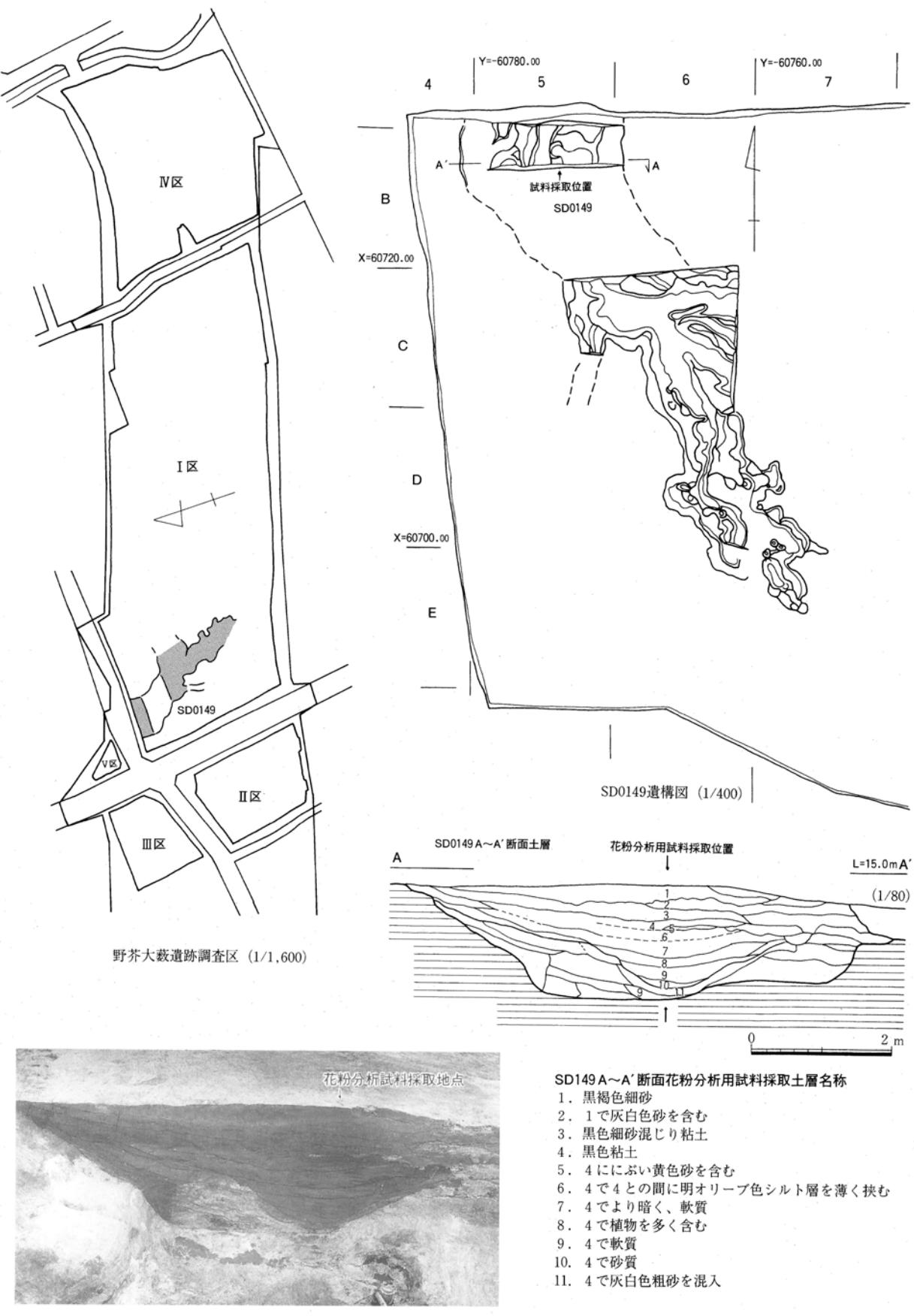


Fig. 1 野芥大藪遺跡花粉試料採取地点位置図と土層 (1/1,600・1/400・1/80)

IV 付論1 福岡市野芥大藪遺跡における古環境変遷

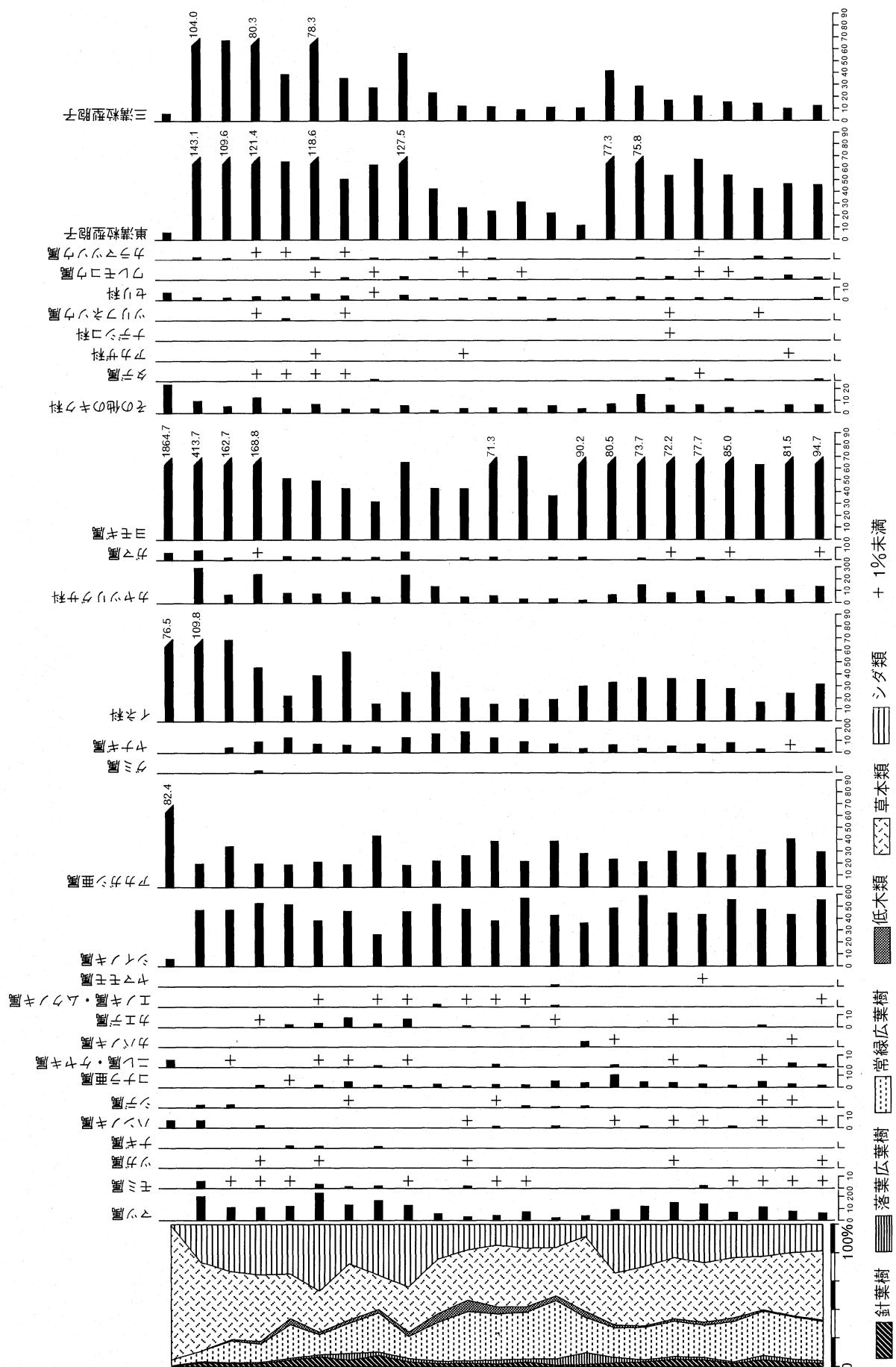


Fig. 2 野芥大藪遺跡SD0149から採取した試料の花粉ダイアグラム

考 察

野芥大藪遺跡の古環境

今回の分析結果に基づいて、野芥大藪遺跡の縄文時代の植生を中心とした古環境を推定する。花粉分析においては、一般に、樹木花粉は花粉堆積地点（試料採取地点）を中心とした比較的広い周辺地域の植生を、草本花粉は花粉堆積地点を中心とした比較的狭い範囲の植生を反映していると考えられている。

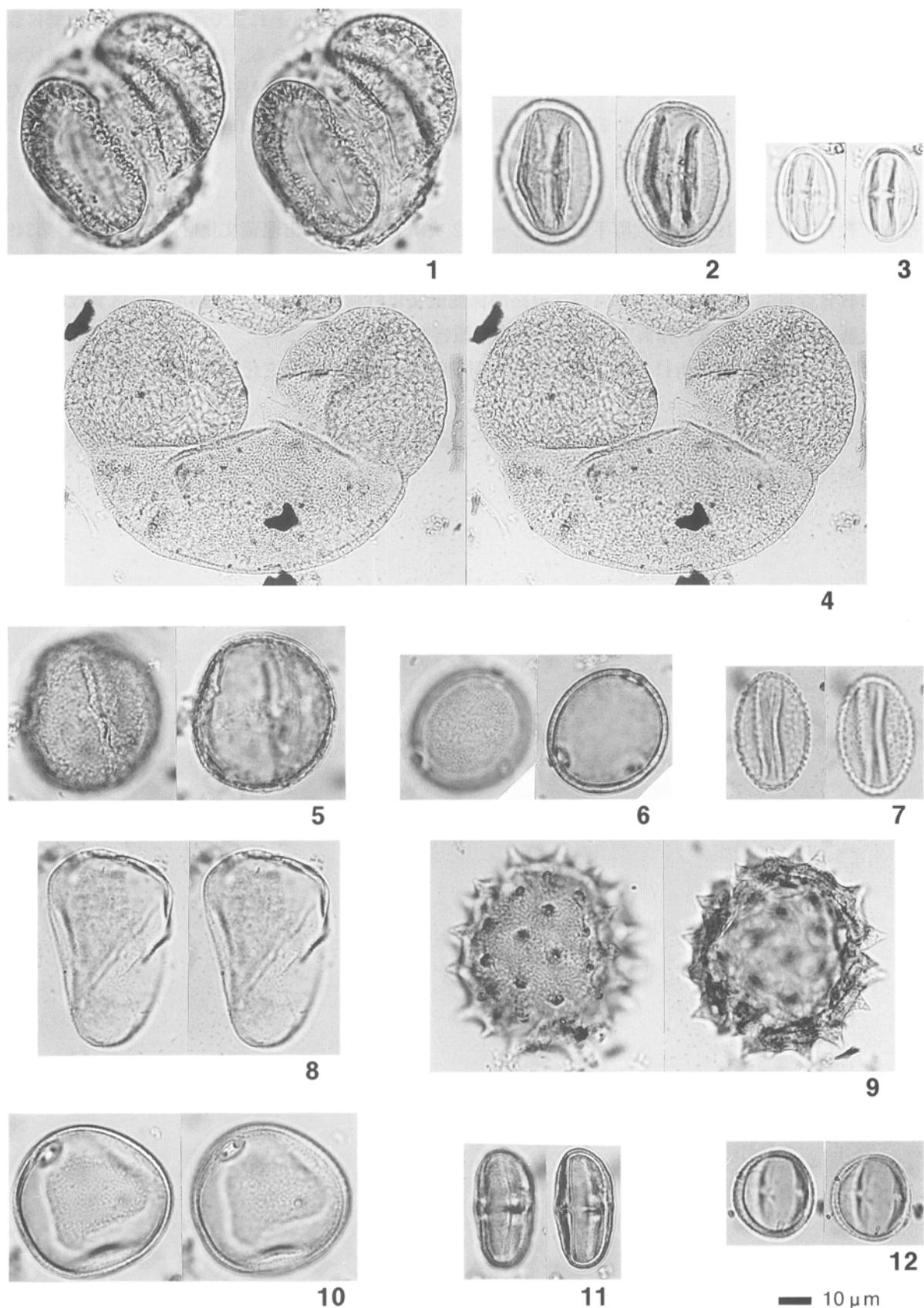
樹木花粉では、シイノキ属とアカガシ亜属が優占することから、野芥大藪遺跡における縄文時代は自然植生の照葉樹林が広く広がっていたと考えられる。弥生時代になって人類の活動が活発化し、耕地、住居、燃料、建設資材などとして森林資源を大量に使用する時期になると、シイノキ属、アカガシ亜属が減少し、代わって二次林としてのマツ属が急激に増加する傾向がみられる地域が多いが、この時期はまだマツ属は検出されるものの低率である。野芥大藪遺跡の縄文人は、森林を利用してはいたと思われるが、その規模は小さく、いわゆる再生可能なものであったであろう。

草本類は概して高い頻度でみられ、イネ科とヨモギ属が優占する。今回の分析試料は、比較的細粒な埋没河川堆積物であることから、この地点は当時、河川の流路にあたっており、その河川の流れは緩やかで、場所によっては三日月湖化していた部分もあったと考えられる。また、このような埋没河川は、ほぼ同時期のものが当遺跡には数多く見られることから、その緩やかな流れの河川や三日月湖にも急に流路や位置を変えるような異変がしばしば発生したことが窺える。このような異変は、発生する度に流域の植生を破壊し植生遷移を後退させ、森林の発達を妨げたと考えられる。その結果、河川の流域にはイネ科とヨモギ属のなかまの雑草が茂る荒れ地が広がっていたのではないかと考えられる。パリノ・サーヴェイ株式会社（1998）は、自然材の樹種と種実遺体の同定によって、この時期の植生は、照葉樹林とその林縁部等に生育する種類が多いとしているが、林縁部に生育する種類が多いのは、このような理由によって「林縁部」が作られ続けていたためと考えられる。河川の水辺には、カヤツリグサ科、ガマ属、セリ科のなかまの水辺を好む草本類がややナギが生育していたであろう。

環境の安定化—拾六町平田遺跡との比較から

拾六町平田遺跡は、野芥大藪遺跡と同じく早良平野に立地する遺跡であり、野芥大藪遺跡から北西方向（下流方向）へ約4kmの位置にある。拾六町平田遺跡の第2次調査においても、今回の野芥大藪遺跡でみられる埋没河川と同様な埋没河川が発見されている（福岡市教育委員会、1993）。その堆積物の花粉分析によると、木本類は、シイノキ属とアカガシ亜属が優占し、マツ属を数%づつ交え、草本類は概してイネ科とヨモギ属が優占する組成を示す（野井、1993）。この花粉組成は、野芥大藪遺跡と極めてよく一致する。これらのことから、早良平野においては、流路が定まらず著しく蛇行する緩やかな流れの河川が発達し、その流域にはイネ科とヨモギ属の仲間の雑草が茂る荒れ地が広がっていた時期が、縄文時代のある時期にあったと考えられる。

このような環境は、拾六町平田遺跡の花粉分析によると、気候がやや低下することによって終了する。すなわち、拾六町平田遺跡の埋没河川SD15では、ブナ属が出現し気候がやや冷涼化する花粉組成を示した後、埋没河川はみられなくなる。野芥大藪遺跡では、特に冷涼化を示す花粉組成は得られていない。しかし、拾六町平田遺跡で、ブナ属が出始める直前にナギ属とニレ属・ケヤキ属が一時的に出現する特徴を示す。このような特徴は野芥大藪遺跡でもナギ属の一時的な消長として現れており、今回の分析層準の上の層準で気候の冷涼化が現れるのではないかと思われる。このような、気候の冷



1 マツ属 2 アカガシ亜属 3 シイノキ属 4 モミ属 5 コナラ亜属 6 エノキ属・ムクノキ属 7 ヤナギ属
8 カヤツリグサ科 9 キク科 10 イネ科 11 セリ科 12 ヨモギ属

Fig. 3 野芥大蔵遺跡SD0149から検出された主要花粉化石

涼化によって海水準が低下し、侵食基準面が低下することによって、それまで河川の流路が頻繁に変わるような不安定な地域が、侵食の場に変わり比較的安定した環境になる。野芥大藪遺跡は、扇状地状を呈する低位段丘上に立地するが（福岡市教育委員会、1998）、この段丘化はこの時期に起こったものと考えられる。この後、近世までの長い期間にわたって遺跡が維持される環境が整うことになる。

文 献

- 福岡市教育委員会（1993）拾六町平田遺跡2－第2次調査－。福岡市埋蔵文化財調査報告書、第349集
- 福岡市教育委員会（1998）福岡市外環状道路関係埋蔵文化財調査報告－4－福岡市早良区賀茂所在野芥大藪遺跡第1次調査、福岡市埋蔵文化財調査報告書、第581集
- 野井英明（1993）花粉分析による平田遺跡の古環境復元。福岡市埋蔵文化財調査報告書、第349集、p.51-54
- パリノサーヴェイ株式会社（1998）付論1 野芥大藪遺跡における自然科学分析。福岡市埋蔵文化財調査報告書、第581集、p.82-96

付論2. 福岡市野芥遺跡群におけるプラント・オパール分析結果について

宮崎大学 藤原 宏志

1994年11月、野芥遺跡群第5次調査地点で土壤試料の採取を行い、以下のような分析結果を得たので報告し、結果に対する若干の検討を加えたい。

1. 分析試料

試料採取2地点（土層1および土層2）から計26点の土壤試料を採取した。土壤試料は土層壁面に100cc試料円筒を重力方向に打ち込み、試料の汚染を避けながら定量採取した。

2. 分析方法

土壤試料の分析は宮崎大学農学部で行った。分析方法はガラス・ビーズ定量分析の定法に従い、イネ科植物の乾物量および種子生産総量を算出した。

3. 分析結果

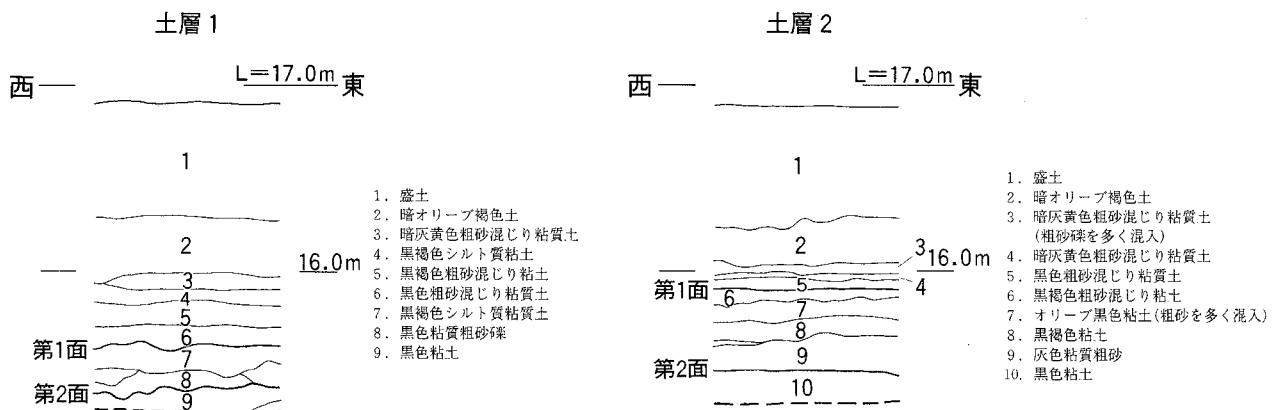
分析結果は表1、表2および図1、図2に示した。

4. 分析結果の検討

(1)両地点とも7層より上の土層からイネ(*Oriza sativa L.*)のプラント・オパールが検出された。イネのピークはいずれも4～5層（中世・近世の遺物包含層）にあるが、6～7層（古墳時代遺物包含層）でも、その近傍あるいは、そこで生産された可能性も考えられる量のプラント・オパールが検出された。なお、8層以下ではイネと思われるプラント・オパールは認められなかった。

(2)7層より上の土層から、ヒエ(*Echinochloa utilis*)とみられるキビ族プラント・オパールが検出された。稻作にともなう雑草とも思われるが、ヒエも収穫の対象になっていた可能性が十分考えられる。

(3)6層より下の土層ではタケ類(Bambusaceae)とともにヨシ(Phragmites属)が多量に検出された。また、有機物が多く樹木に由来するプラント・オパールも検出されていることから、これらの土層堆積時は比較的湿った森林の縁辺部であったと推察される。



(1/50)

表1 野芥遺跡群におけるプラント・オパール定量分析結果

宮崎大学農学部 地域農学講座
 Sampling block [土層 1]
 Sampling date [11/17'94]

層名	植物体乾重 (t/10a.cm)						
	イネ (O.sati.)	イネ穀 (Rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ススキ (Andoro.)
1	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
2-1	2.109	0.579	56.132	25.194	3.015	1.671	0.000
2-2	2.342	0.671	43.401	19.480	1.749	1.453	0.939
3	0.774	0.222	28.699	12.881	0.000	0.000	2.483
4	3.609	1.035	50.175	22.520	0.000	0.560	0.000
5-1	5.507	1.578	59.540	26.724	0.000	0.949	1.962
5-2	3.474	0.996	24.149	10.839	1.297	0.719	2.089
6	1.715	0.492	47.674	21.398	5.122	1.064	1.375
7-1	1.442	0.413	0.000	0.000	4.308	0.298	0.964
7-2	0.995	0.285	18.447	8.279	2.973	1.338	1.596
8	0.000	0.000	0.000	0.000	2.772	1.536	0.992
9-1	0.000	0.000	0.000	0.000	7.720	1.070	0.460
9-2	0.000	0.000	0.000	0.000	5.317	0.921	1.189

図1 プラント・オパール定量分析結果 -土層1-

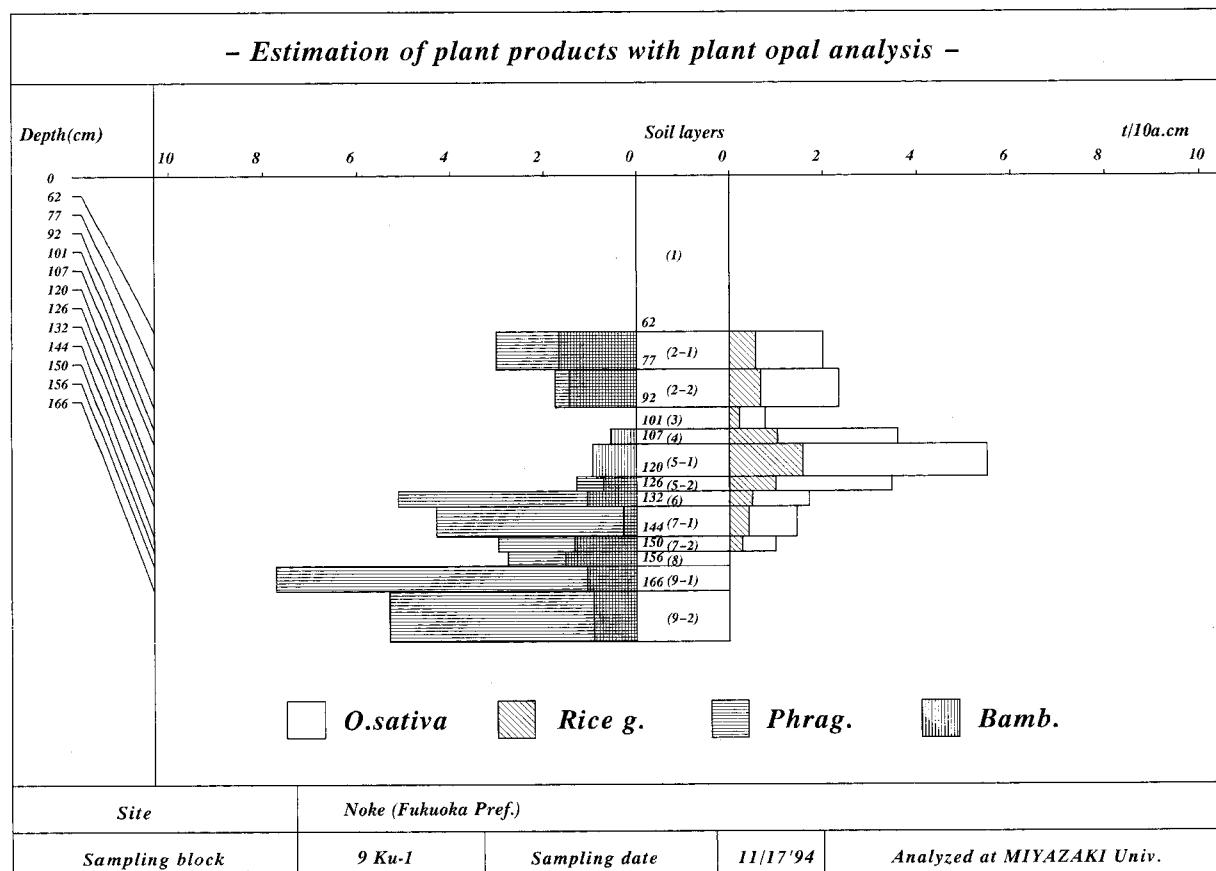


表2 野芥遺跡群におけるプラント・オパール定量分析結果

宮崎大学農学部 地域農学講座
Sampling block [土層2]
Sampling date [11/17'94]

層名	植物体乾重 (t/10a.cm)						
	イネ (O.sati.)	イネ穀 (Rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ススキ (Andoro.)
1	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
2-1	3.061	0.878	49.650	22.285	1.143	1.108	0.000
2-2	2.918	0.836	36.056	16.183	1.453	1.006	0.780
3	3.172	0.909	29.396	13.194	0.000	0.000	1.695
4/5	5.450	1.562	50.509	22.670	0.000	0.940	0.000
6	2.464	0.706	22.835	10.249	4.907	0.850	1.317
7-1	1.801	0.516	0.000	0.000	4.036	0.559	0.481
7-2	2.132	0.611	19.753	8.866	3.184	1.213	0.854
8	0.000	0.000	0.000	0.000	2.707	0.844	0.727
9-1	0.000	0.000	0.000	0.000	1.558	0.540	1.115
9-2	0.000	0.000	0.000	0.000	4.065	0.985	0.364
10-1	0.000	0.000	0.000	0.000	2.682	0.991	0.640
10-2	0.000	0.000	0.000	0.000	2.585	0.597	0.462

図2 プラント・オパール定量分析結果 - 土層2 -

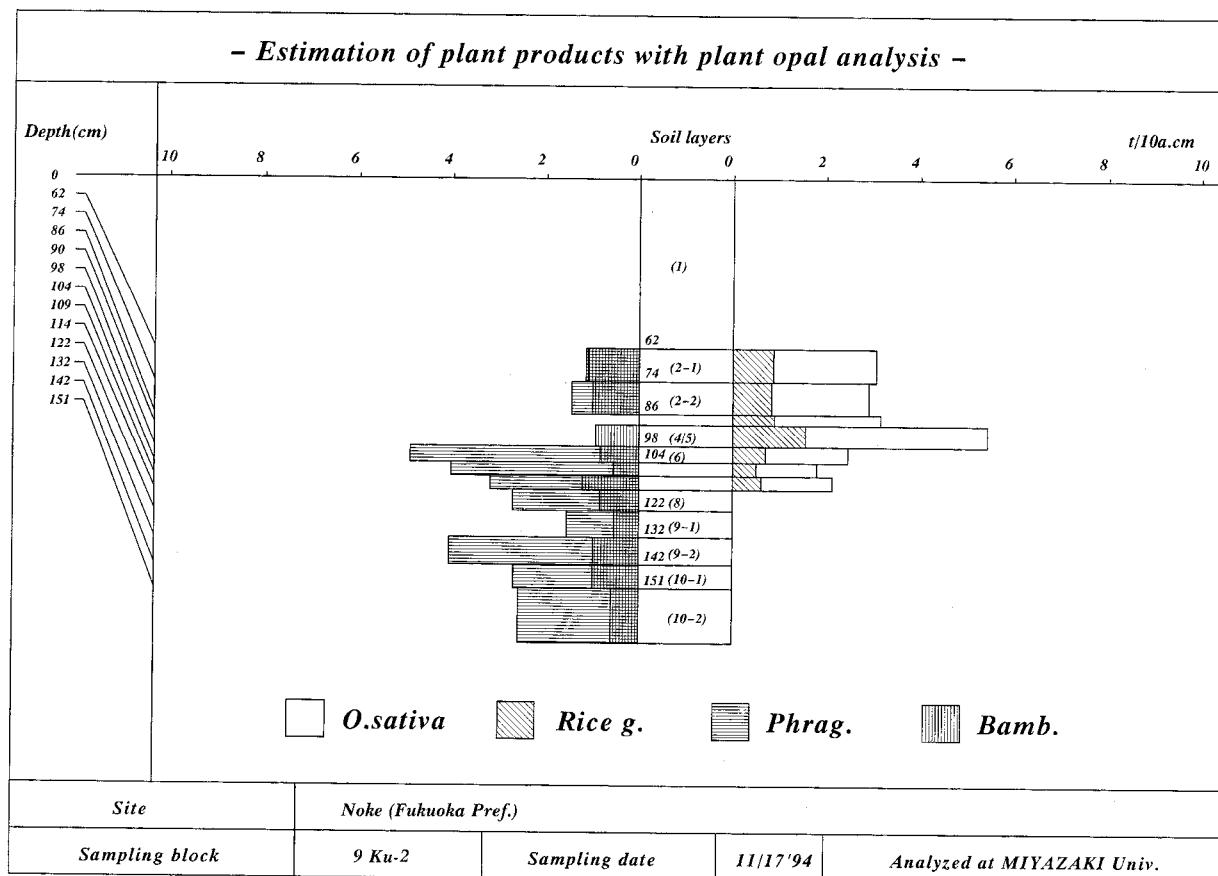


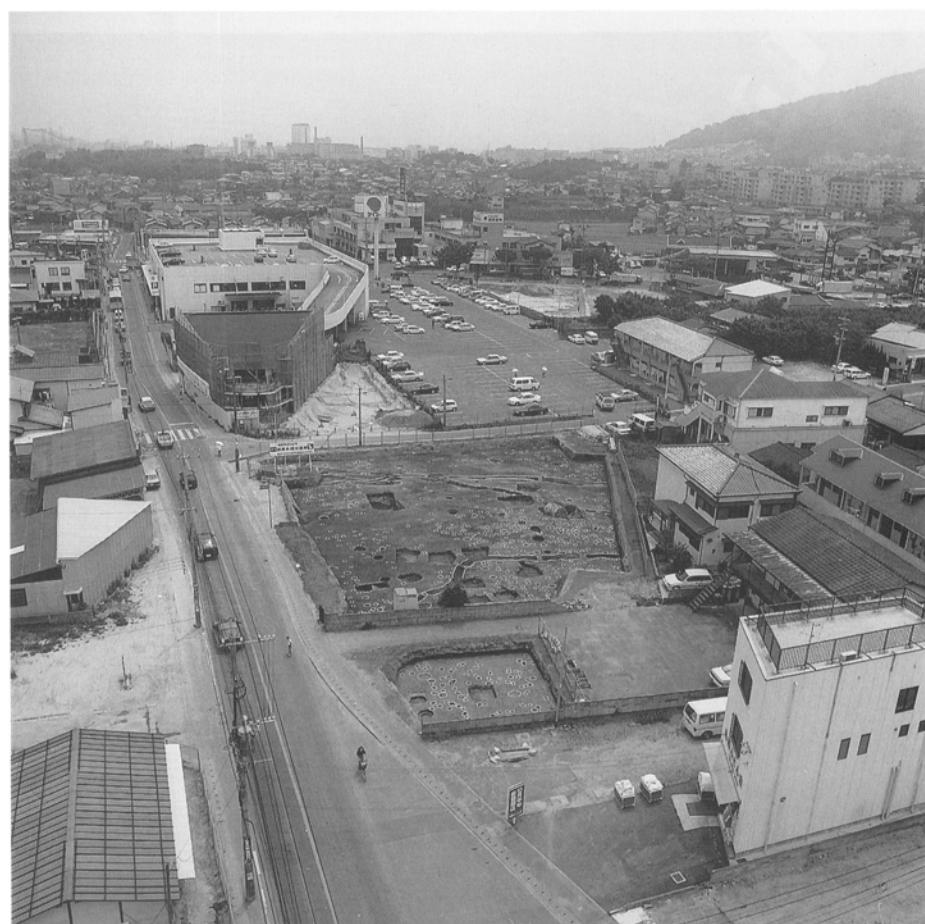
図 版



IX区発掘作業風景（南西から）



(1)上空から外環状道路予定地を見る（南東から）



(2)野芥第5次地点調査区全景（北西から）

PL. 2



(1)VI区第1面遺構検出状況（東から）



(2)同東側SD6001・6002（北から）



(1)第2面遺構検出状況（西から）



(2)第2面北西部遺構検出状況（西から）



(1)第3面遺構検出状況（西から）



(2)第3面北西部遺構検出状況（西から）



(1)SD6004 (北から)



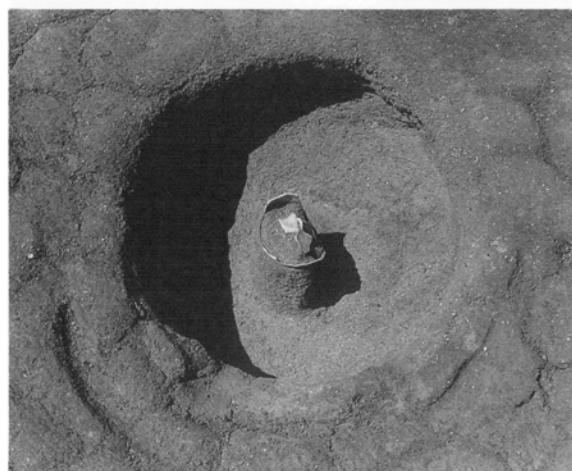
(2)第2面SD6014・6015 (西から)



(1)第3面SD6016・6017（西から）



(2)SD6008（北から）



(3)SK6005（南から）



(4)SX6013（南西から）



(1)東壁土層（西から）



(2)南壁土層（北から）



(3)西壁土層（東から）



(4)SK6005・6007出土遺物（縮尺不統一）

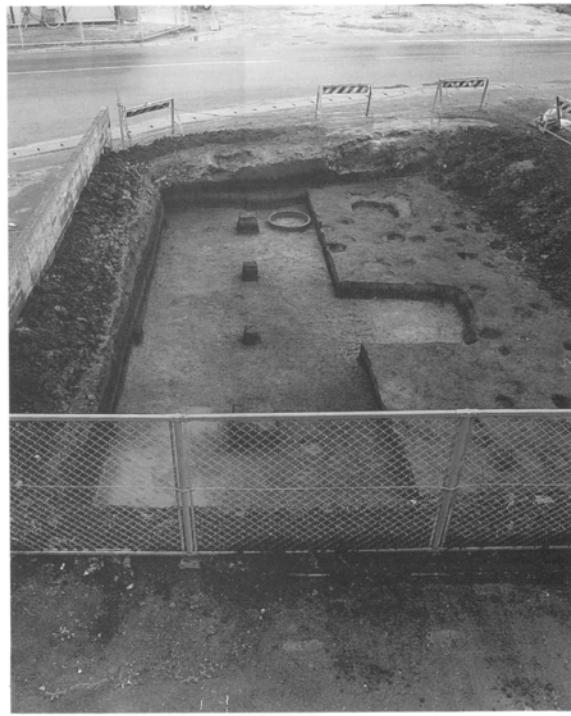
PL. 8



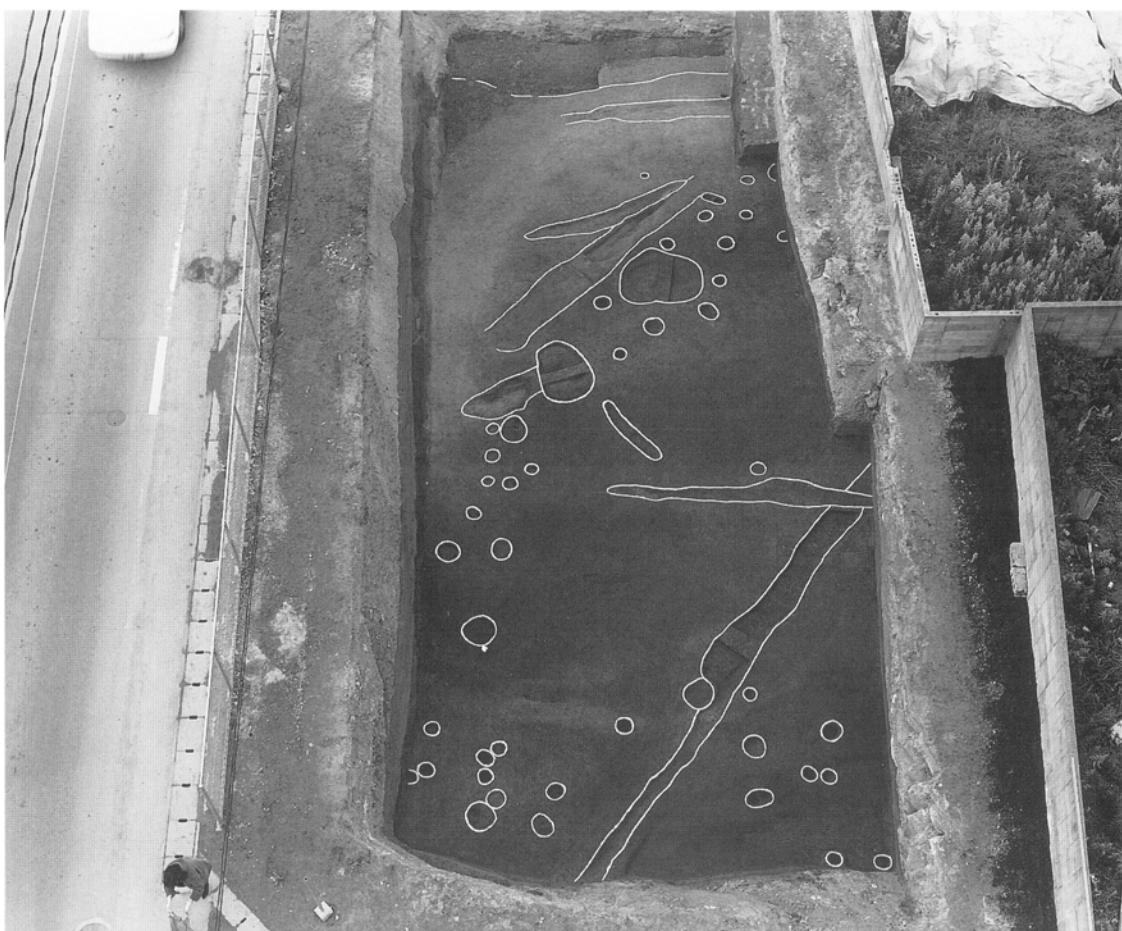
(1)VII区全景（南から）



(2)同全景（東から）



(3)だめ押し作業状況（南から）



(1)VII区南側全景（東から）



(2)同北側全景（南から）

PL. 10



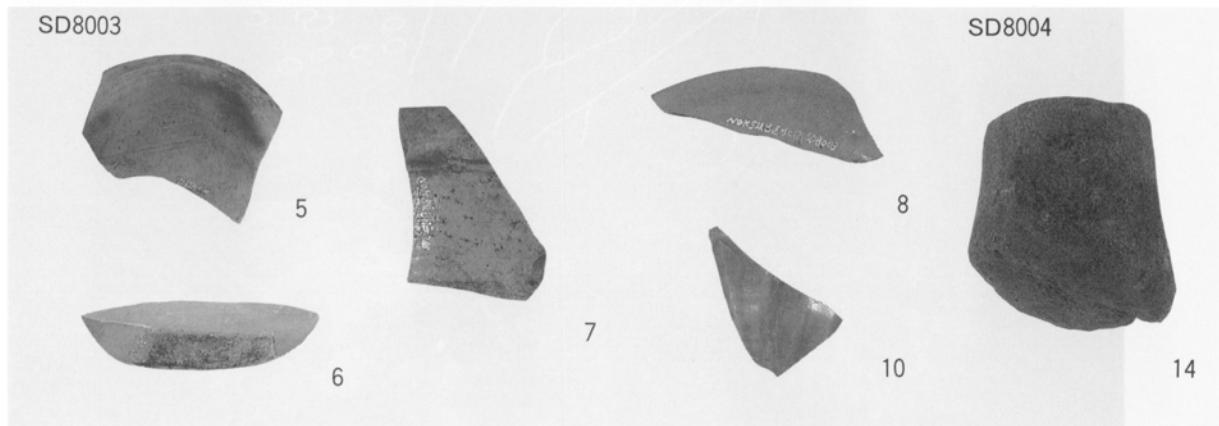
(1)SD8003・8004 (南から)



(2)SD8003・8004南壁土層 (北から)



(3)同北壁土層 (南から)



(4)SD8003・8004出土遺物 (縮尺不統一)



(1)IX区第1面全景（北西から）



(2)IX区第1面全景（南東から）

PL. 12



(1)調査区西侧遺構検出状況



(2)調査区西侧から中央部遺構検出状況



(1)調査区中央から東側遺構検出状況



(2)調査区東側遺構検出状況



(1) 調査区南西隅遺構検出状況



(2) 調査区北側農耕地遺構検出状況



(1)SC9025完掘状況（北西から）



(2)同遺物出土状況（北西から）



(3)同遺物出土状況（南から）



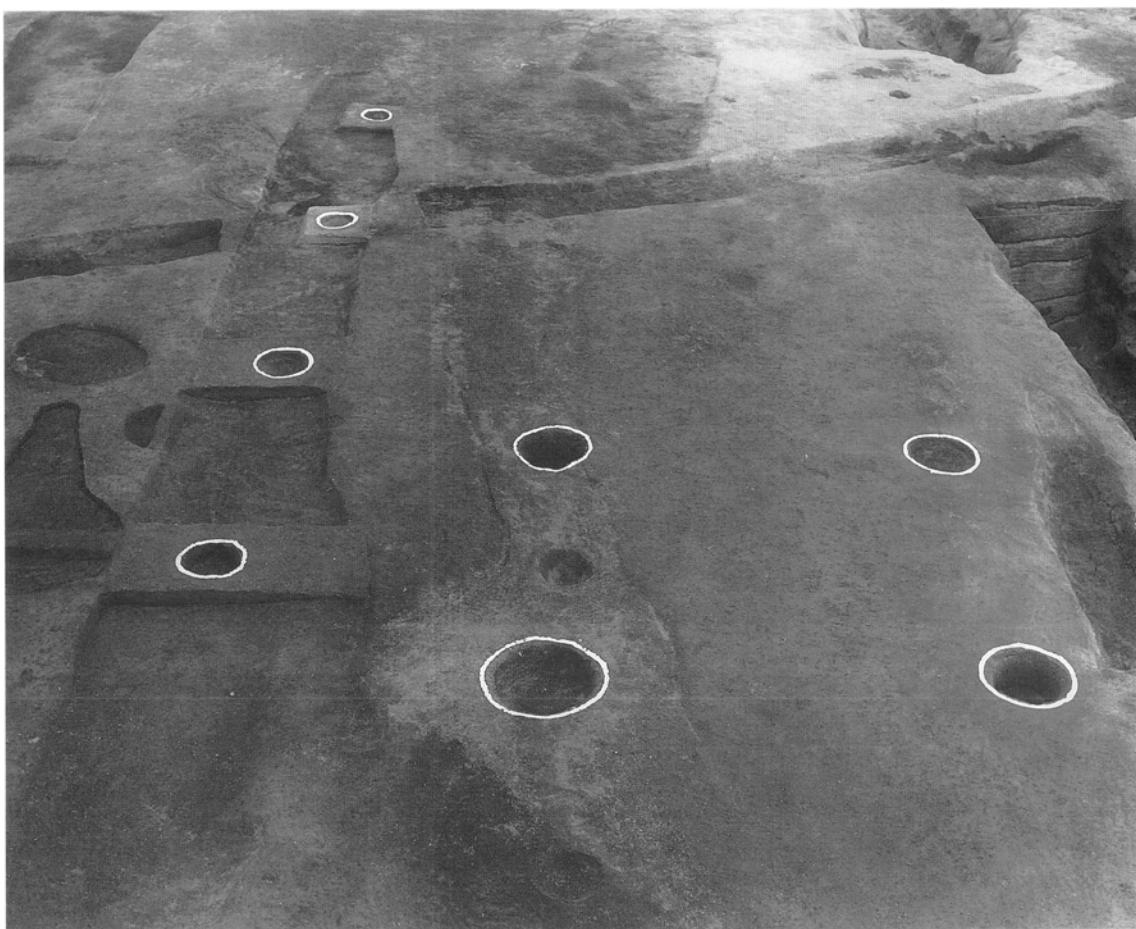
(4)SC9030遺物出土状況



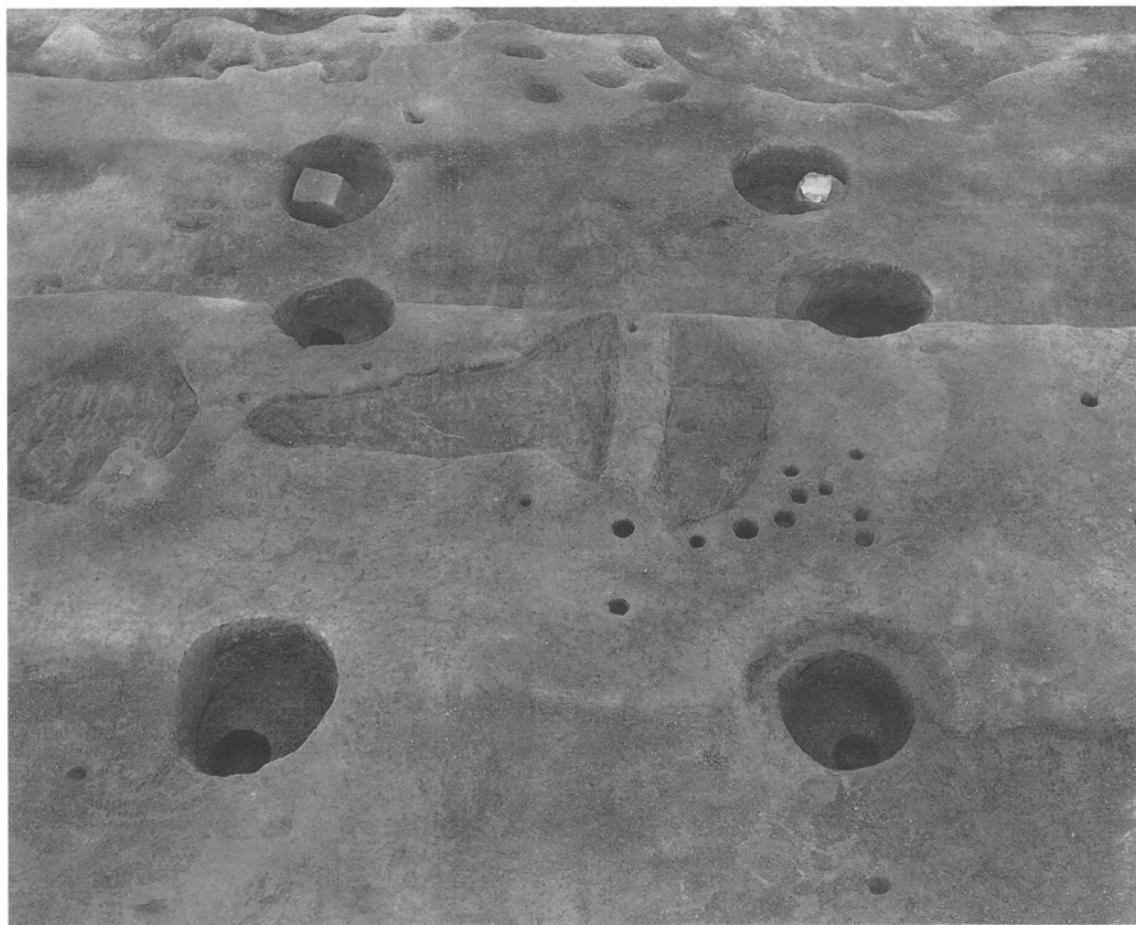
(1)SC9030 (南から)



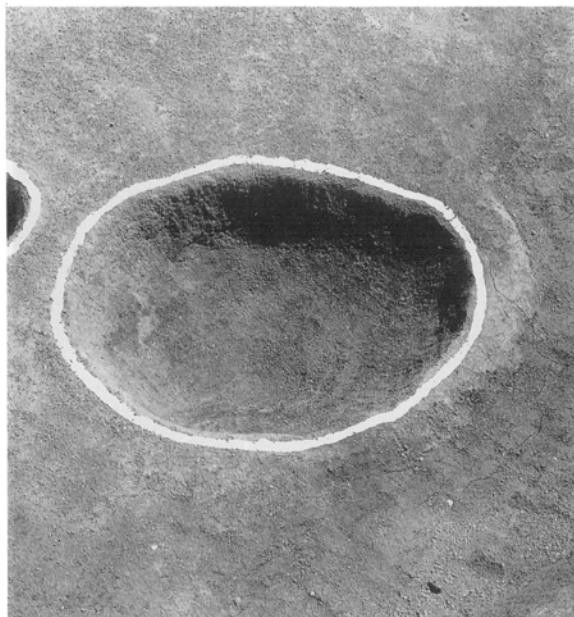
(2)SC9051 (南東から)



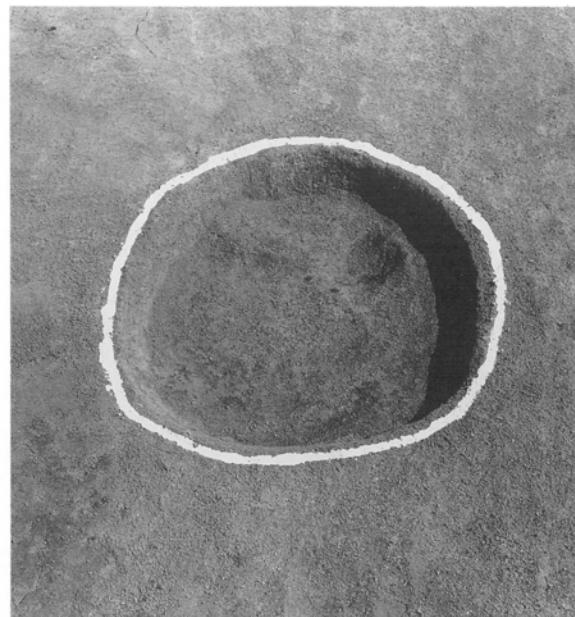
(1)SB9017・SA9018 (南から)



(2)SB9069 (西から)



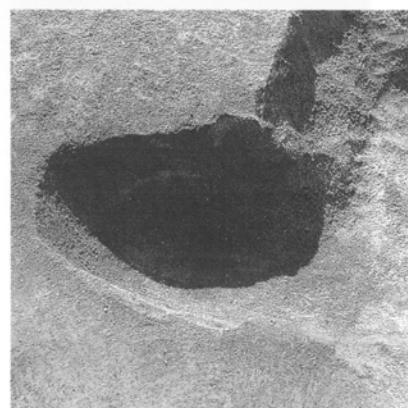
(1)SK9010 (西から)



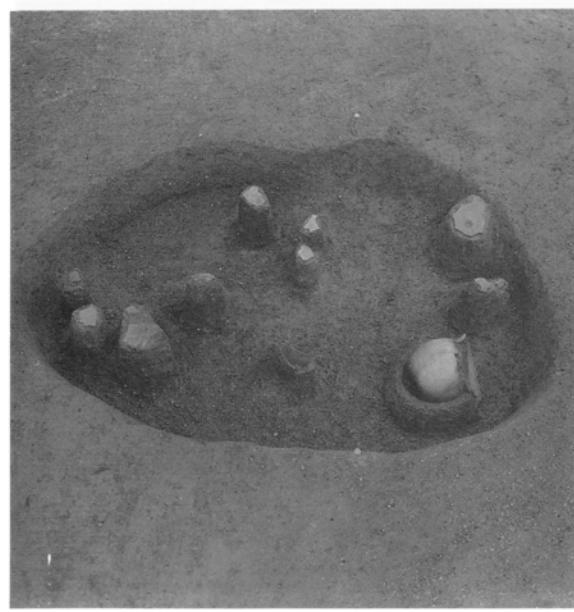
(2)SK9013 (西から)



(3)SK9015 (東から)



(4)SK9020 (東から)



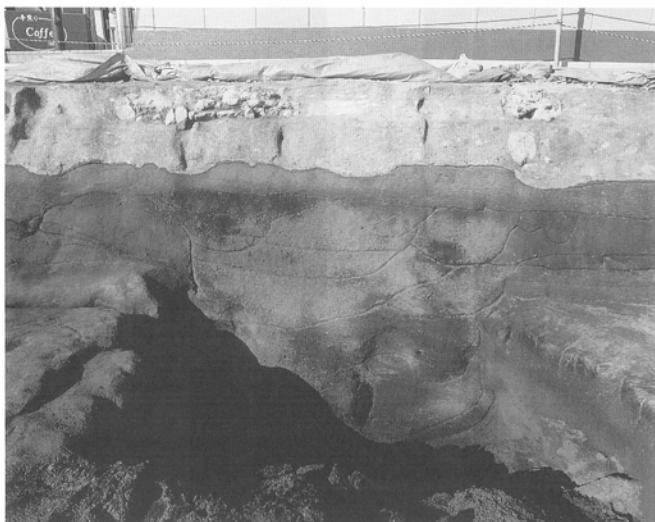
(5)SK9021 (北東から)



(6)SK9091 (南東から)



(1)SD9001 (南東から)



(2)同北壁土層 (南から)



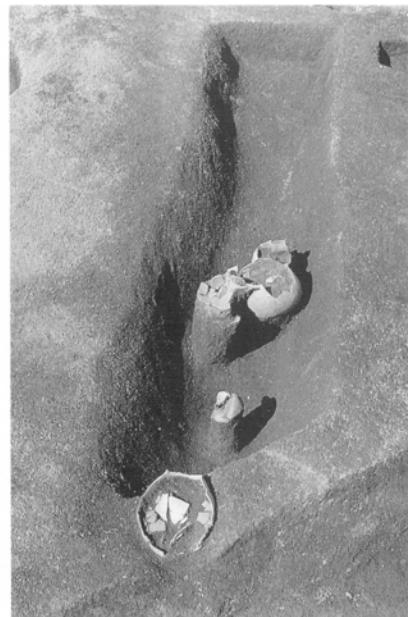
(3)SD9011 (西から)



(4)SD9035 (北西から)



(1)SD9022 (南東から)



(2)SD9028 (南から)



(3)SD9022遺物出土状況 (南東から)



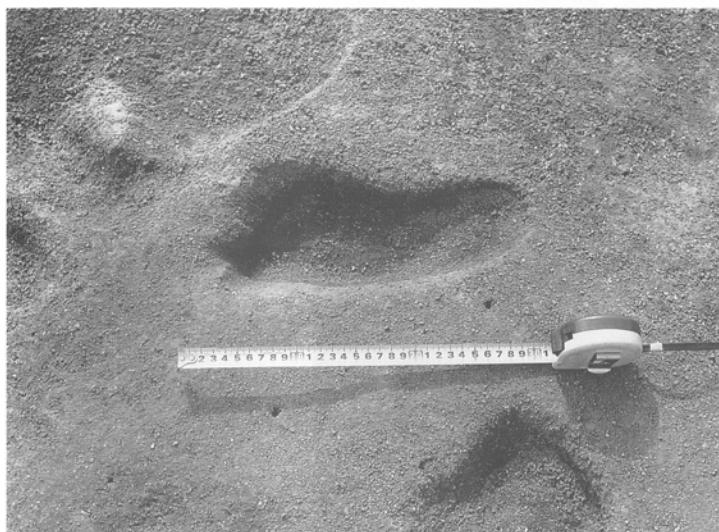
(4)同遺物出土状況 (南東から)



(5)調査区西侧足跡群 (北西から)



(1)牛と思われる足跡の検出状況



(2)人の足跡検出状況



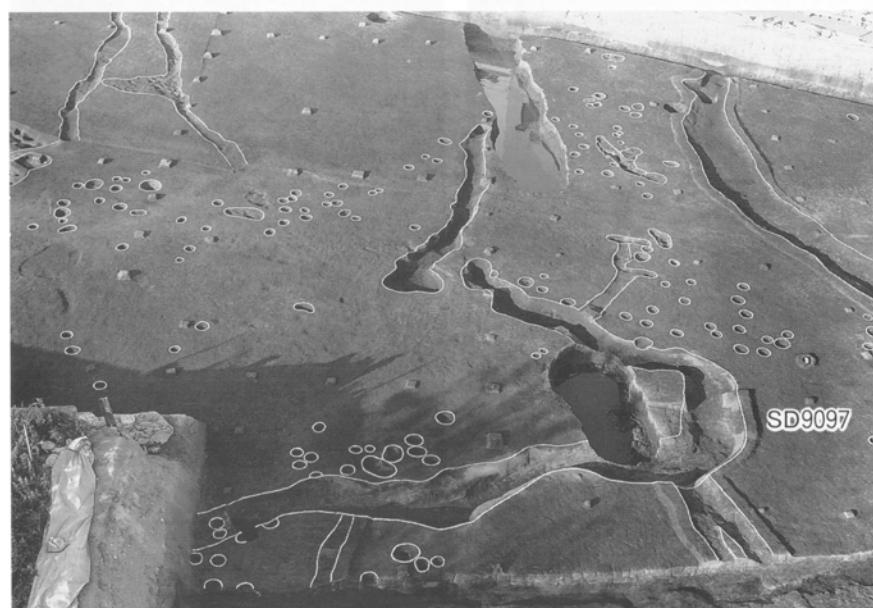
(3)SD9073の水口か (西から)



(4)西側第2面遺構検出状況 (西から)



(1)SD9073 (南から)



(2)SD9097 (南から)



(3)SD9076・9101 (南から)



(1)中央部北側第2面遺構検出状況（北東から）



(2)中央部北側第2面遺構検出状況（西から）



(3)北西側第2面遺構検出状況（西から）



(4)西側南半部だめ押し調査遺構検出状況



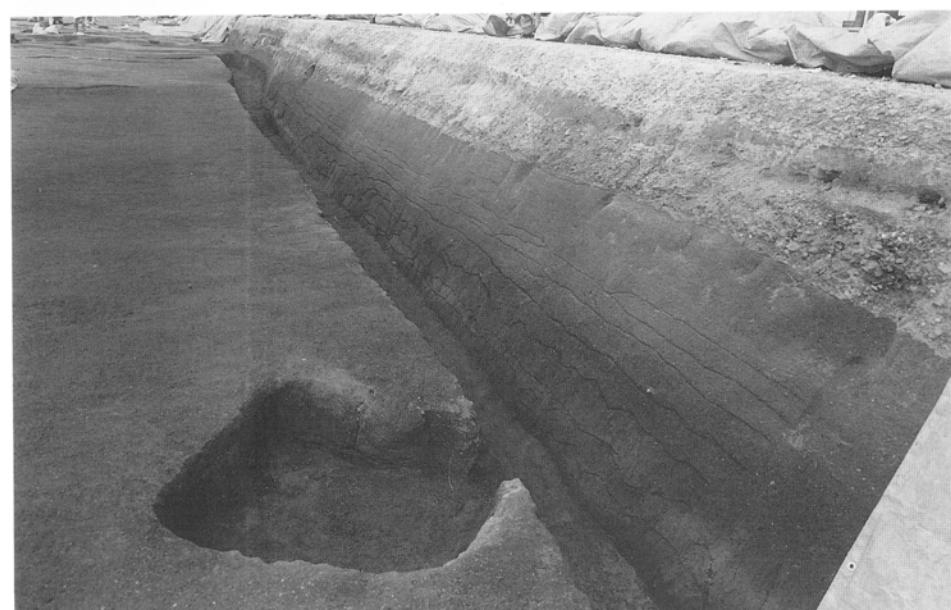
(1) 東側第2面遺構検出状況（西から）



(2) 中央部遺構検出状況（南東から）



(1)調査区西壁土層（北東から）



(2)同北壁土層（南東から）



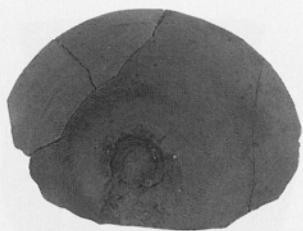
(3)同南壁土層（北から）

PL. 26



SC9025出土遺物（縮尺不統一）

SC9025



16



21



22

SC9030



27



|



28

SC9051



30

SB9069



167

PL. 28



SD9022出土遺物（縮尺不統一）

SD9022



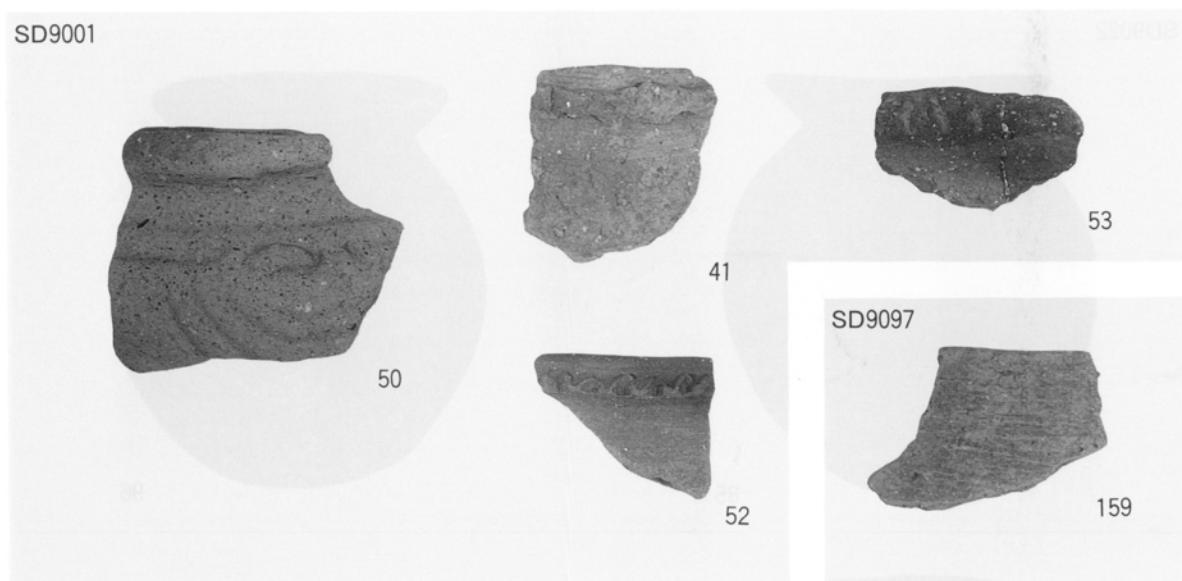
SD9028



SD9022・9028出土遺物（縮尺不統一）

PL. 30

SD9001



SD9001



遺構面

SX9032



各遺構出土遺物（縮尺不統一）

福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

— 6 —

野芥遺跡群第5次発掘調査報告

1999年（平成11年）3月9日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8の1

印刷 株式会社 トータルプリンティング博多
福岡市南区大楠2丁目21-1